

京都府遺跡調査概報

第 70 冊

1. 近畿自動車道敦賀線関係遺跡
 - (1) 青路古墳・銭塚古墓
 - (2) 池下城支城跡・堀古墳
2. 園部城跡第4次
3. 上中太田遺跡
4. 中海道遺跡第34次(3NNANK-34)
5. 長岡京跡右京第498次(7ANKNZ-8)
6. 植物園北遺跡第16次
7. 井尻遺跡

1 9 9 6

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方の協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成6・7年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団大阪建設局、京都府教育庁管理部管理課、京都府農林水産部、京都府乙訓土木事務所、京都府出納管理局、京都府知事公室の依頼を受けて行った、近畿自動車道敦賀線関係遺跡、園部城跡第4次、上中太田遺跡、中海道遺跡第34次、長岡京跡右京第498次、植物園北遺跡第16次、井尻遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会・園部町教育委員会・京北町教育委員会・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所・宇治市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
1. 近畿自動車道敦賀線関係遺跡 2. 園部城跡第4次 3. 上中太田遺跡
 4. 中海道遺跡第34次 5. 長岡京跡右京第498次
 6. 植物園北遺跡第16次 7. 井尻遺跡
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 近畿自動車道敦賀線関係遺跡 (1) 青路古墳・銭塚古墳	舞鶴市与保呂8 舞鶴市堂ノ奥小字青ジ555	平6.12.5～ 平7.2.16	日本道路公団 大阪建設局	野島 永
(2) 池下城支城跡・堀古墳	舞鶴市池内、舞鶴市堀	平7.9.25～ 12.8		黒坪 一樹
2. 園部城跡第4次	船井郡園部町小桜町97	平7.6.26～ 8.9	京都府教育庁 管理部管理課	黒坪 一樹
3. 上中太田遺跡	北桑田郡京北町上中小字城	平7.10.19～ 12.22	京都府農林水 産部	竹下 士郎
4. 中海道遺跡第34次	向日市物集女町御所海道地内	平7.9.27～ 11.21	京都府乙訓土 木事務所	奈良 康正
5. 長岡京跡右京第498次	長岡京市天神1丁目	平7.6.5～ 12.22	京都府乙訓土 木事務所	引原 茂治 奈良 康正
6. 植物園北遺跡第16次	京都市左京区下賀茂北芝町	平7.4.19～ 8.18	京都府出納管 理局	石尾 政信
7. 井尻遺跡	宇治市伊勢田町井尻	平7.10.26～ 平8.1.17	京都府知事公 室	八木 厚之

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成6・7年度発掘調査概要-----	1
(1) 青路古墳・銭塚古墓-----	2
(2) 池下城支城跡・堀古墳-----	3
2. 園部城跡第4次発掘調査概要-----	11
3. 上中太田遺跡発掘調査概要-----	21
4. 中海道遺跡第34次発掘調査概要-----	35
5. 長岡京跡右京第498次発掘調査概要-----	43
6. 植物園北遺跡第16次発掘調査概要-----	57
7. 井尻遺跡発掘調査概要-----	83

挿 図 目 次

1. 近畿自動車道敦賀線関係遺跡

(1) 青路古墳・銭塚古墓

第1図	調査地位置図	2
(2) 池下城支城跡・堀古墳		
第2図	調査地周辺遺跡分布図	4
第3図	調査トレンチ配置図	5
第4図	集石遺構平・断面図	6
第5図	集石遺構下層平面図	6
第6図	青白磁器皿・刀実測図	7
第7図	調査トレンチ配置図・トレンチ土層断面図	8
第8図	墳丘及び主体部土層断面図	9
第9図	遺構平・断面図	9
第10図	砥石実測図	10

2. 園部城跡第4次

第11図	周辺の遺跡分布図	12
第12図	園部町の投影断面図	13
第13図	調査地位置図	14
第14図	中堀検出状況	15
第15図	中堀上層断面図	15
第16図	出土遺物実測図(1)	16
第17図	出土遺物実測図(2)	17
第18図	出土遺物実測図(3)	17
第19図	出土遺物実測図(4)	18
第20図	軒丸・軒平瓦実測図・拓影	19
第21図	園部城郭図	19

3. 上中太田遺跡

第22図	調査地及び周辺遺跡分布図	22
第23図	トレンチ配置図	24
第24図	調査地遺構平面図	25
第25図	竪穴式住居跡実測図(1)	27

第26図	竪穴式住居跡実測図(2)-----	28
第27図	土坑 S K12実測図-----	29
第28図	溝 S D01土層断面図-----	29
第29図	掘立柱建物跡 S B10実測図-----	30
第30図	出土遺物実測図(1)-----	31
第31図	出土遺物実測図(2)-----	32
第32図	出土遺物実測図(3)-----	33
4. 中海道遺跡第34次		
第33図	調査地及び周辺遺跡分布図-----	35
第34図	調査トレンチ配置図-----	36
第35図	1 トレンチ遺構実測図(下層遺構)-----	37
第36図	1 トレンチ遺構実測図(上層遺構)-----	38
第37図	2 トレンチ遺構実測図-----	39
第38図	竪穴式住居跡 S H201実測図-----	40
第39図	出土遺物実測図-----	41
5. 長岡京跡右京第498次		
第40図	周辺遺跡分布図-----	43
第41図	調査地位置図-----	44
第42図	調査トレンチ配置図-----	45
第43図	1 トレンチ遺構実測図-----	46
第44図	S D498103実測図-----	47
第45図	2 トレンチ遺構実測図-----	48
第46図	S B498201実測図-----	49
第47図	3 トレンチ遺構実測図-----	50
第48図	S E498301・S B498301実測図-----	51
第49図	出土遺物実測図-----	53
第50図	条坊及び周辺調査地関連図-----	54
6. 植物園北遺跡第16次		
第51図	調査地位置図-----	57
第52図	遺構平面図-----	58
第53図	竪穴式住居跡 2 (S H02)実測図-----	59
第54図	竪穴式住居跡 3 (S H03)実測図-----	60
第55図	竪穴式住居跡 6 (S H06)実測図-----	61
第56図	竪穴式住居跡 4 (S H04)実測図-----	62
第57図	集石遺構(S X13)実測図-----	63

第58図	竪穴式住居跡 1 (S H01) 実測図	65
第59図	竪穴式住居跡 5 (S H05) 実測図	65
第60図	土坑 7 (S K07)・8 (S K08) 実測図	66
第61図	土坑 9 (S K09) 実測図	66
第62図	土坑12 (S K12) 実測図	67
第63図	出土土器実測図(1)	69
第64図	出土土器実測図(2)	70
第65図	出土土器実測図(3)	71
第66図	出土土器実測図(4)	72
第67図	出土土器実測図(5)	73
第68図	出土土器実測図(6)	74
第69図	出土土器実測図(7)	75
第70図	出土土器実測図(8)	76
第71図	出土土器実測図(9)	76
7. 井尻遺跡		
第72図	調査地及び周辺遺跡分布図	84
第73図	調査地位置図	85
第74図	トレンチ配置図	86
第75図	トレンチ土層断面柱状図	87

付 表 目 次

6. 植物園北遺跡第16次		
付表 1	出土土器観察表	77

図 版 目 次

1. 近畿自動車道敦賀線関係遺跡

(1) 青路古墳・銭塚古墓

図版第1 (1)調査地(青路古墳)遠景(北から) (2)調査地掘削後近景(西から)

図版第2 (1)調査地(銭塚古墓)近景(南から) (2)調査地掘削後(北西から)

(2) 池下城支城跡・堀古墳

図版第3 (1)調査地遠景(北西から) (2)調査地全景(空撮、南西から)

図版第4 (1)調査地全景(空撮、南東から) (2)集石遺構全景(空撮、南から)

図版第5 (1)集石遺構全景(空撮、南東方向から)

(2)集石遺構全景(空撮、垂直方向)

図版第6 (1)南堀切掘削状況(東から) (2)南堀切掘削状況(南西から)

(3)郭掘削状況(南東から) (4)郭掘削状況(北から)

図版第7 (1)南堀切掘削状況(北から) (2)トレンチ掘削状況(南東から)

(3)トレンチ掘削状況(南から) (4)トレンチ掘削状況(南から)

図版第8 (1)集石遺構検出状況(南から) (2)集石遺構検出状況(北から)

図版第9 (1)集石遺構(南部) (2)集石遺構(北西部)

(3)集石遺構(南東部) (4)集石遺構(北東部)

図版第10 (1)再掘坑周辺精査状況 (2)再掘坑精査状況(南から)

図版第11 (1)青白磁小皿及び出土状況 (2)鉄刀及び出土状況

図版第12 (1)集石遺構下層検出状況(南から) (2)集石遺構調査終了風景(南から)

図版第13 (1)調査前風景(北東から) (2)調査地南部トレンチ掘削状況(北から)

図版第14 (1)遺構検出状況(北東から) (2)遺構検出状況(北から)

図版第15 (1)主体部完掘状況(北から) (2)主体部完掘状況(東から)

(3)土坑内炭化材検出状況 (4)主体部内炭化材検出状況

図版第16 (1)土坑検出状況(北西から) (2)調査完了風景(北西から)

2. 園部城跡第4次

図版第17 (1)中堀検出状況(南から) (2)中堀検出状況(西から)

図版第18 (1)杭列検出状況(南西から) (2)杭列検出状況(アップ)

図版第19 (1)中堀掘削状況(東から) (2)中堀内土層堆積状況(東から)

図版第20 (1)中堀完掘状況(南から) (2)調査地全景(北東から)

図版第21 出土遺物(1)

図版第22 出土遺物(2)

3. 上中太田遺跡

図版第23 (1)調査地遠景(西から、調査地の右寄りが上中城跡)
(2)調査地空中写真(右側が北)

図版第24 (1)第2トレンチ調査前(南から)
(2)第1トレンチ重機掘削状況(北西から)

図版第25 (1)SH14検出状況(南西から) (2)SH14完掘状況(南西から)
(3)第1トレンチ完掘状況(北西から)

図版第26 (1)SB10柱根検出状況 (2)SD01遺物出土状況
(3)SH07遺物出土状況

図版第27 出土遺物(1)

図版第28 出土遺物(2)

4. 中海道遺跡第34次

図版第29 (1)1トレンチ調査前全景(北から) (2)2トレンチ調査前全景(西から)

図版第30 (1)1トレンチ上層遺構全景(南から)
(2)1トレンチ下層遺構全景(南から)

図版第31 (1)2トレンチ全景(西から) (2)竪穴式住居跡SH201全景(西から)

図版第32 出土遺物

5. 長岡京跡右京第498次

図版第33 (1)1トレンチ調査前全景(北から) (2)1トレンチ全景(北から)

図版第34 (1)1トレンチSD498101(南から)
(2)1トレンチSD498103(南西から)

図版第35 (1)1トレンチSD498103遺物出土状況(南西から)
(2)1トレンチSD498102(北西から)

図版第36 (1)2トレンチ調査前全景(南から) (2)2トレンチ全景(南から)

図版第37 (1)2トレンチSB498201(南から)
(2)2トレンチSB498201柱穴(北から)

図版第38 (1)2トレンチSD498201・498202(西から)
(2)2トレンチSD498202遺物出土状況(南から)

図版第39 (1)3トレンチ調査前全景(南から) (2)3トレンチ全景(北から)

図版第40 (1)3トレンチSE498301(南から) (2)3トレンチ杭列(南から)

図版第41 (1)3トレンチSB498301(西から)
(2)3トレンチ断ち割り後全景(北から)

図版第42 出土遺物

6. 植物園北遺跡第16次

- 図版第43 (1)調査地全景(西から) (2)調査地全景(南から)
- 図版第44 (1)1トレンチ全景(西から) (2)竪穴式住居跡1集石遺構(北から)
- 図版第45 (1)竪穴式住居跡1上層土器堆積状況(西から)
(2)竪穴式住居跡1完掘状況(北から)
- 図版第46 (1)集石遺構(西から) (2)集石遺構(東から)
- 図版第47 (1)集石遺構の土坑14土器出土状況(西から)
(2)集石遺構下層の土器出土状況(南から)
- 図版第48 (1)竪穴式住居跡2・6完掘状況(北から)
(2)竪穴式住居跡2・6完掘状況(南東から)
- 図版第49 (1)竪穴式住居跡2中央土坑(西から)
(2)竪穴式住居跡2南辺土坑(西から)
- 図版第50 (1)竪穴式住居跡6柱穴1土器出土状況(北から)
(2)竪穴式住居跡5南辺土坑土器出土状況(北から)
- 図版第51 (1)竪穴式住居跡5完掘状況(東から)
(2)竪穴式住居跡5南辺土坑完掘状況(北から)
- 図版第52 (1)竪穴式住居跡4完掘状況(南東から)
(2)竪穴式住居跡4堆積土断面(東から)
- 図版第53 (1)土坑7土器出土状況(南から) (2)土坑8土器出土状況(北から)
- 図版第54 (1)土坑9土器出土状況(北から) (2)土坑12土器出土状況(南から)
- 図版第55 (1)2トレンチ全景(西から) (2)竪穴式住居跡3完掘状況(北から)
- 図版第56 (1)竪穴式住居跡3床面直上土器出土状況(南から)
(2)竪穴式住居跡3東辺沿いの小坑(北から)
- 図版第57 (1)竪穴式住居跡3中央土坑(南から)
(1)竪穴式住居跡3南辺土坑(西から)
- 図版第58 出土遺物(1)
- 図版第59 出土遺物(2)
- 図版第60 出土遺物(3)

7. 井尻遺跡

- 図版第61 (1)第1トレンチ全景(東から) (2)第2トレンチ全景(南から)
- 図版第62 (1)第1トレンチ遺構全景(東から)
(2)第1トレンチ杭群検出状況(南から)
- 図版第63 (1)作業風景 (2)第1トレンチ遺構検出状況(南東から)
- 図版第64 (1)第1トレンチ土層断面(北から) (2)第2トレンチ土層断面(東から)

1. 近畿自動車道敦賀線関係遺跡 平成6・7年度発掘調査概要

はじめに

日本道路公団では、近畿自動車道敦賀線(舞鶴西IC～北陸道敦賀IC間)の建設工事を鋭意計画・実施している。この事業地内(京都府管内)に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、日本道路公団と京都府教育委員会との間で協議が進められ、遺跡台帳との照合、路線内の詳細分布調査などの事前の調査を経て、記録保存を前提とする緊急調査の対象となる埋蔵文化財の件数が確定された。

発掘調査は、日本道路公団大阪建設局の依頼にもとづき、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施することとなった。調査は、平成6年度と同7年度の2年度にわたって実施した。このうち、平成6年度事業は青路古墳と銭塚古墓の2遺跡を対象とし、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員野島 永が担当して実施した。平成7年度には、堀古墳と池下城支城跡の2遺跡を対象とし、調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員黒坪一樹・大岩洋一が担当して行った。調査を行うにあたり、日本道路公団には調査経費を全額負担していただいたほか、さまざまな面で御協力を賜った。このほか、京都府教育庁指導部文化財保護課、舞鶴市教育委員会、地元関係各位には適切な指導・助言・参加協力を賜^(注1)った。あわせて、厚くお礼申し上げる次第である。

なお、本概要には2年度にわたる発掘調査の概要を収録し、文責を文末に示した。図版の写真は主に担当者が撮影したが、遺物写真のみ調査第1課調査員田中 彰が撮影した。

(奥村清一郎)

遺跡の所在・調査期間・面積

青路古墳は、舞鶴市字与保呂小字8番地、銭塚古墓は、舞鶴市字堂ノ奥小字青ジ555番地に位置する。調査面積は合計約350㎡で、調査は平成6年12月5日から平成7年2月16日の延べ13日間行った。

池下城支城跡は舞鶴市字池内、堀古墳は舞鶴市字堀に位置する。調査面積は池下城支城跡が約400㎡、堀古墳が約200㎡である。調査期間は、池下城支城跡が平成7年9月25日から平成7年12月8日、堀古墳が平成7年10月19日から11月29日までである。

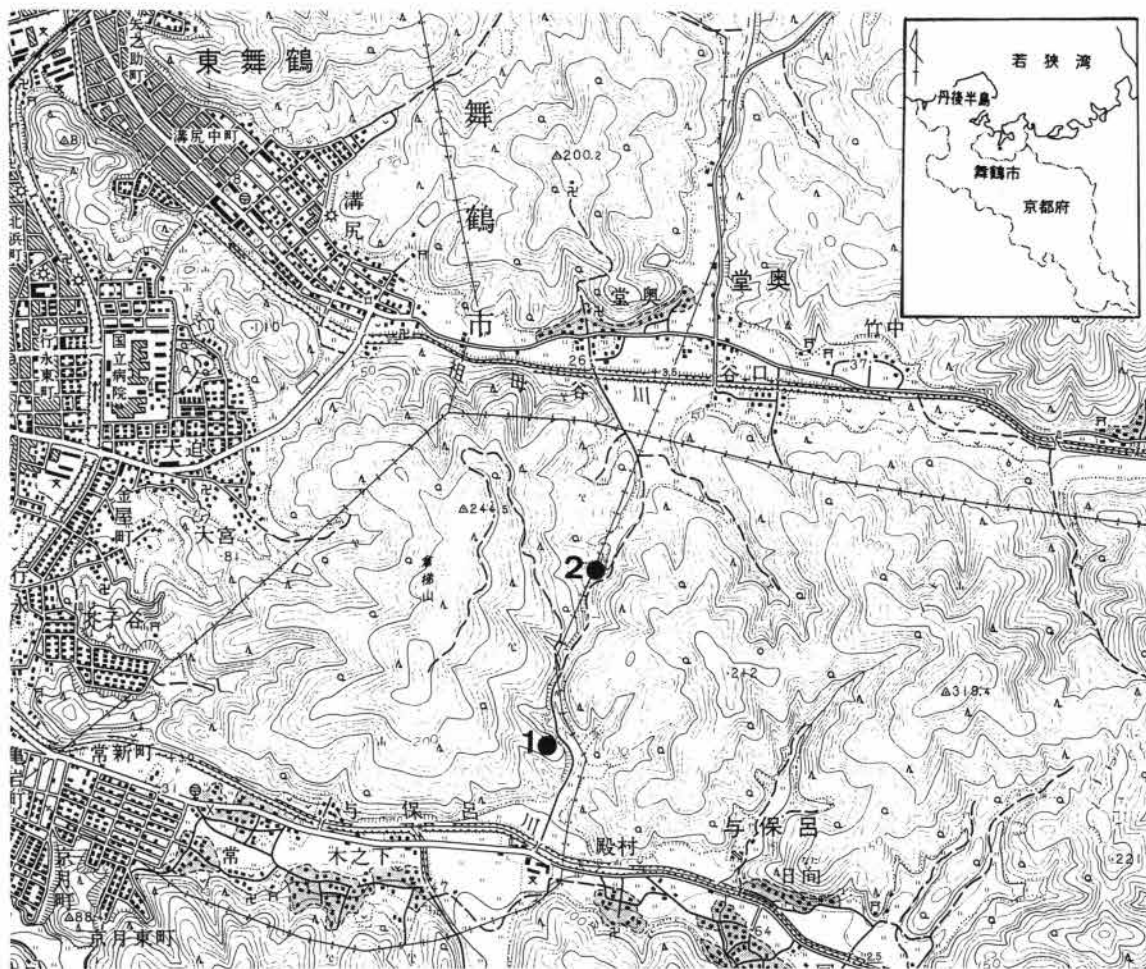
(野島 永・黒坪一樹)

(1) 青路古墳・銭塚古墓

1. 位置と環境

今回の発掘調査は、東舞鶴における近畿自動車道敦賀線に伴う調査である。自動車道建設地において、埋蔵文化財の包蔵される可能性の高い、古墳状隆起3地点、古墓推定地1地点の発掘調査を行った。便宜上、前者を青路古墳群、後者を銭塚古墓と仮称した。

青路古墳は、舞鶴湾東港に注ぎ込む与保呂川の上流、与保呂の村落の北側の山塊丘陵上に位置する(第1図1、図版第1-(1))。また、銭塚古墓は、祖母谷川上流の堂ノ奥村落から南西500mほどの舌状低丘陵に位置する(同図2、図版第2-(1))。両者は、直線距離で約600mほど隔てた位置関係にある。青路古墳の近隣には、与保呂の村落を取り囲むように、日向城跡、時岡源之丞城跡、波賀隠岐城跡、波賀谷城跡など、中世の山城が点在するが、古墳状隆起、古墓については、周辺における調査例はなく、この地区ではじめての調査例となる。



第1図 調査地位置図(1/25,000)
1. 青路古墳 2. 銭塚古墓

2. 調査概要

青路古墳では、墳丘測量をアドバルーンによる写真撮影を実施した。当初、東にのびる丘陵尾根の先端部の古墳状隆起と、丘陵尾根の最高所に古墳の存在する可能性が高いと考えられたために、2地点に2つの長方形のトレンチを設定した。古墳状隆起と丘陵尾根最高所の表土を約250㎡、約0.2mほど除去した。さらに、2地点の最高か所を中心に十字に断ち割りして掘削を行った(図版第1-(2))。

丘陵表土下の地山は、礫をほとんど含まない花崗岩パイラン土によって形成されており、視覚的にも遺構を確認しやすかったが、遺構・遺物を確認できなかった。ただ、旧陸軍が設営したと考えられる電信柱のワイヤーが埋設されていたのみであった。

銭塚古墳は、青路古墳の調査地から600mあまり北北東に離れた独立低丘陵上にあり、当初、人為的な石列と考えられる石が認められたため、その周辺の土砂を除去した。その結果、舌状に突出した岩盤が、節理によってスレート状に剝離していたため、板石を人為的に積み上げたような形状を呈していることが判明した(図版第2-(2))。

今回の調査では、古墳・古墓として調査を開始したが、両遺跡ともに遺構・遺物は検出できなかった。古墳状隆起は、自然地形の一部であり、調査地周辺の路線内にも石室墳などをうかがわせるような石材や墳丘は認められなかった。

東舞鶴における古代遺跡は、現状では舞鶴湾に注ぎ込む志楽川、祖母谷川、与保呂川の三河川のうち、最も北側から西流する志楽川流域に顕著に認められるが、祖母谷川あるいは与保呂川上流域では今後のさらなる調査に期待したい。^(注2)

(野島 永)

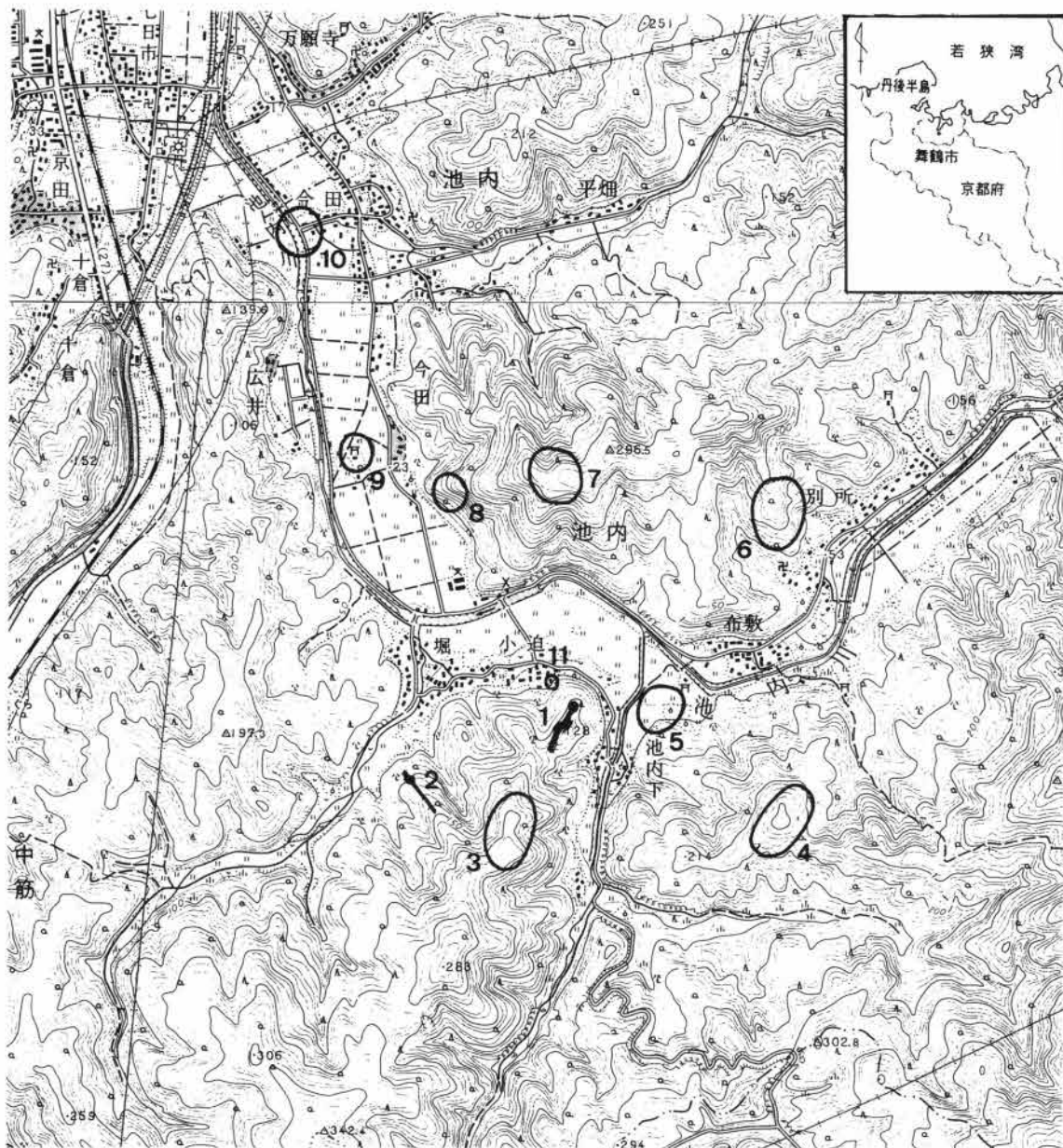
(2) 池下城支城跡・堀古墳

1. 位置と環境(第2図)

今回報告する池下城支城跡と堀古墳のある池内地区は、古代の人々の生活の痕跡を示す遺跡が数多く知られている。現在、最も古いものとしては、池内の集落の西を流れる池内川の河床である今田遺跡(10)から採集された縄文時代後期の土器がある。縄文時代は、一般に狩猟・採集の社会といわれるが、その早い時期(草創期)から定住し、原初的な食用植物の栽培も行っていただとされている。この地でも小規模ながら集落が営まれたのであろう。また、同じく今田地区にある延喜式内社の倭文神社境内(9)からは、黒耀石製の石器が採集されている。弥生時代の遺跡はほとんどないようであるが、古墳時代には万願寺古墳群や上殿古墳^{うえのどん}などが知られている。上殿古墳は、横穴式石室をもつ円墳であるが、京極氏の時代に古墳の石室の石材が、伊佐津川改修工事の堤防の礎石として使用されたといわれている。

平安時代に入ると、先にあげた倭文神社がある。この倭文神社には、平安時代後期の彫刻である男神像が安置されている。「シドリ」という読み方は、古代の^{シツオ}綵織りの名に由来すると言われている。

さて、池下城支城跡(1)及び堀古墳(2)は、現在の池下・小迫・堀の集落を見下ろす丘陵尾根部に立地している。池下城支城跡は標高約120m、堀古墳は標高約100mのところにあつて、ともに北西から北東にかけての見晴らしは良好である。舞鶴湾が白く光り、由良ヶ岳、赤岩山などの山々も真近に感じられる。舞鶴湾(海)からの道、若狭に至る谷・尾根筋、さらに綾部の上林や上杉に抜ける山道の接点であることから、この地は古くから交通の要衝あるいは軍事的な拠点に当たっていたのであろう。丹波・丹後の境に位置するこの地が、鎌倉～戦国時代には要衝の地であ



第2図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | | |
|-----------|-----------|---------|----------|---------|---------|
| 1. 池下城支城跡 | 2. 堀古墳 | 3. 池下城跡 | 4. 布敷城跡 | 5. 布敷遺跡 | 6. 別所城跡 |
| 7. 今田下村城跡 | 8. 池内石垣遺跡 | 9. 倭文神社 | 10. 今田遺跡 | 11. 喜雲寺 | |

ったことは、池下城跡をはじめ、布敷城跡(4)、別所城跡(6)、今田下村城跡(7)などの山城が背後の尾根に多くひしめきあっていることから明白である。また池下城支城跡の麓に建つ喜雲寺(11)は、大永3(1523)年創建で、この時期は戦国時代への移行期である。山城の多く築かれる時期に重なる。おそらく、曹洞宗の喜雲寺は宗教上の拠点であったのであろう。

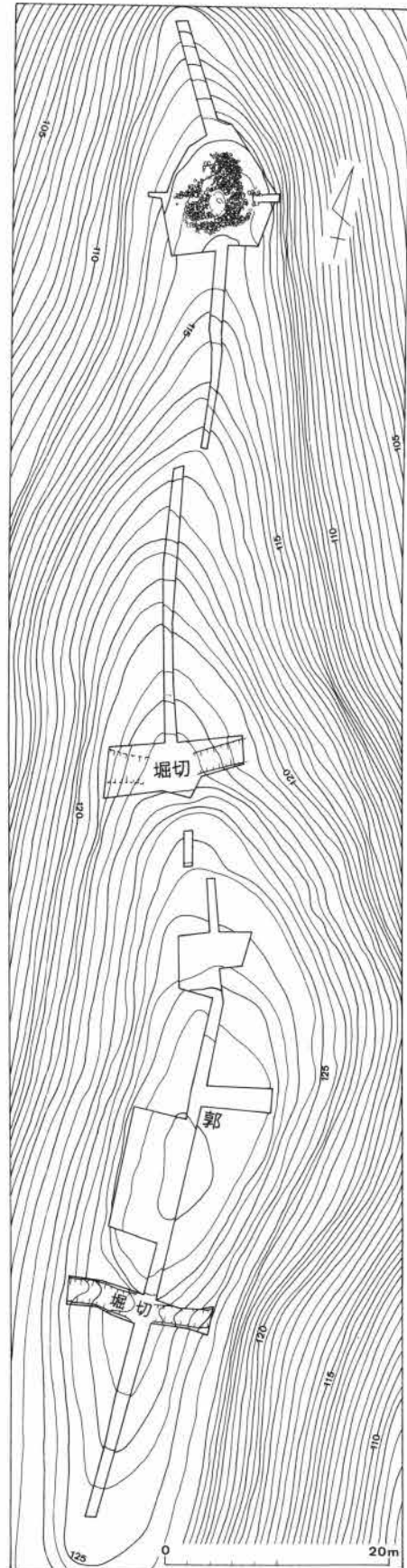
交通路という点からは、実際に池内谷の岸谷から小吹峠を越え、上林(綾部市)に抜けたことを、安土・桃山時代の連歌師である里村紹巴(1524~1602)が『天橋立紀行』で記している。それによると、「上林かが別館に入り」とあり、上林城をさしていることがわかる。^(注3)峠は古来より重要な道であった。

2. 池下城支城跡

①調査経過

池下城支城跡は、中世山城として知られ、標高200mで、背後にそびえる池下城(本城)の北に派生する尾根に築かれている。最頂部の郭や尾根をカットして掘られた堀切など、山城に特有の遺構がある(第3図)。丘陵先端部に人頭大くらいの石が多く露出していることから、古墳や古墓あるいは経塚などの存在を予想した。調査地の標高は110~120mを測る。

調査は、まず尾根筋にそって幅1m・長さ50m以上のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた。ただ、明確に山城の遺構と理解される部分(郭・堀切)については、当初から広く掘削した。掘削深度は浅く、およそ0.2mで堅い地山(赤褐色砂質土)となった。さらに中心部に深くほみをもち、周囲に石の集積する丘陵先端部を精査していった。浅い表土(腐植土)を除去していき、集石の範囲全体を出し切った段階でラジコン・ヘリコプターによる空中撮影を実施した。その後、集石の実測及び山城全体の地形測量をし、11月28日に関係者説明会を開催した。そして、12月8日にすべての作業を終了した。



第3図 調査トレンチ配置図



第4図 集石遺構平・断面図

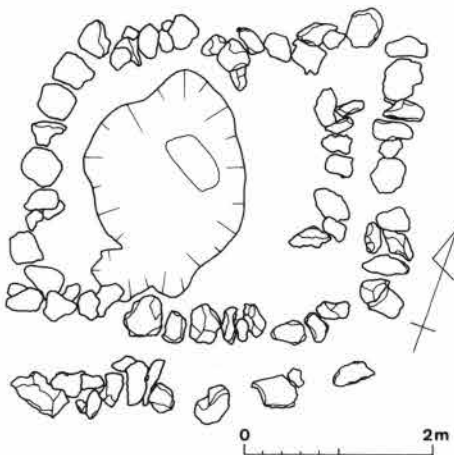
②検出遺構(図版第3～10・12)

山城遺構である郭及び堀切、さらに集石遺構1基を検出した(第3図)。最頂部の郭(平坦面)はおよそ200㎡の広さをもつが、溝や建物などの遺構はまったく存在していない。堀切は、この郭の南北を画して掘られているが、北側については浅く明瞭ではない。自然の段状地形による高低

差を利用したものといえる。南側の堀切は、長さ約13m・幅約2.4m・深さ約1mの規模をもつ。現在の堀の集落から見ると、堀切が郭の存在を際立たせている。

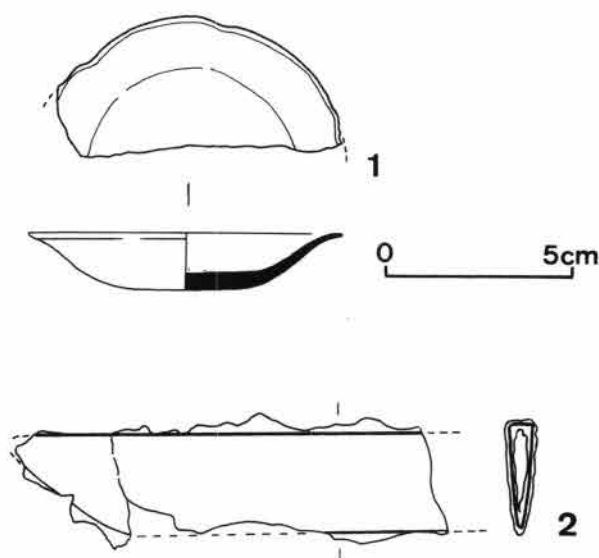
集石遺構は、大きな石が直径約7m・高さ約0.5mの規模で積み重なっていた(第4図)。中心部には不定形な深さ約1mの穴が掘られていた。集石の間に12～13世紀の中国製青白磁器の皿1点と刀の断片1点が出土した(図版第11)。

なお、これらの集石は、本来、中心主体の埋納あるいは埋葬に使用されたものであるが、顕著な再掘を受



第5図 集石遺構下層平面図

けているために、ほとんどの石は地山面の上の表土(腐植土)中に存在している。したがって、集石遺構(第4図)の状態は再掘時に近いものであって、本来の遺構が整備された時点のものではない。最初の遺構がどのような状態であったかについては、もはや完全には復原しえないが、石の最終的な除去作業の過程で、地山面に意図的に並べられた石列が残っているように思われた(第5図)。石列は、部分的であること、石は組みあらずに地山面に置かれたような状態であることなど、石列による方形区画とするには否定的な点も多いが、可能性を指摘しておきたい。



第6図 青白磁器皿・刀実測図

③出土遺物(第6図、図版第11)

青白磁器皿は、淡青白色を呈する。輪花させた口縁部は径8.1cm、器高は1.5cmを測る。時期は12～13世紀(平安～鎌倉時代)にあたる。刀は切先近くの断片である。

3. 堀古墳

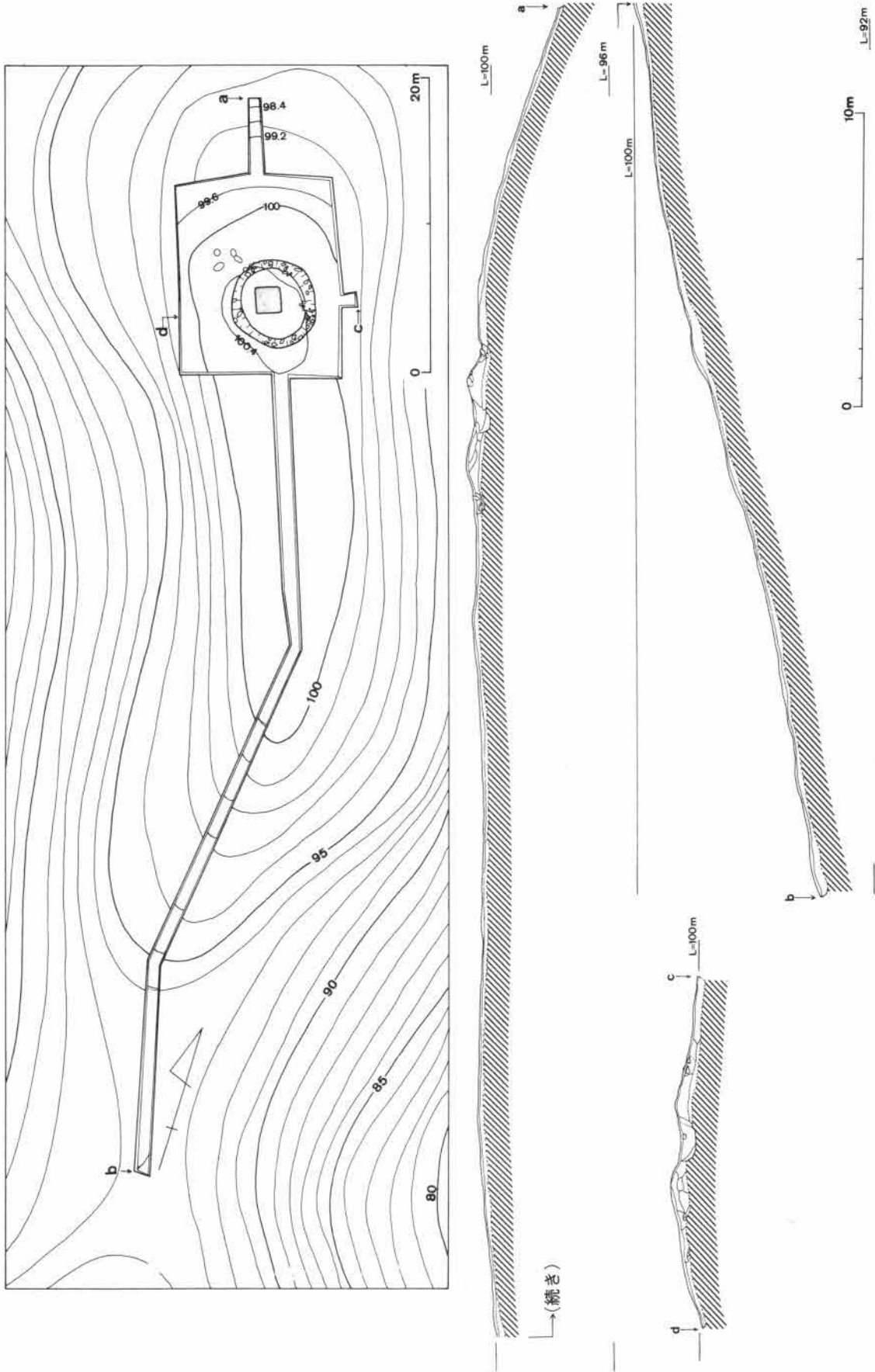
①調査経過

堀古墳は、調査範囲の北側の丘陵先端部に位置している(第2図)。標高は約95～100mを測る(第7図)。古墳状に隆起している中心部が大きくくぼんでおり、派手な再掘(あるいは盗掘)を受けていることがうかがえた。四分法で逆「L」字形にトレンチを設定した。掘削の結果、周囲を円形に溝をめぐらし、中心部分に方形の掘形をもつ、墓状の遺構になることが判明した。中心部に配置されていたであろう石は四方に散乱し、周溝中に入っていた。さらに、調査地南側の丘陵尾根部にもトレンチ(長さ43m・幅1m・深さ約0.15～0.2m)を入れたが、遺構・遺物はなかった(図版第13)。池下城支城跡と同日に関係者説明会を実施した。

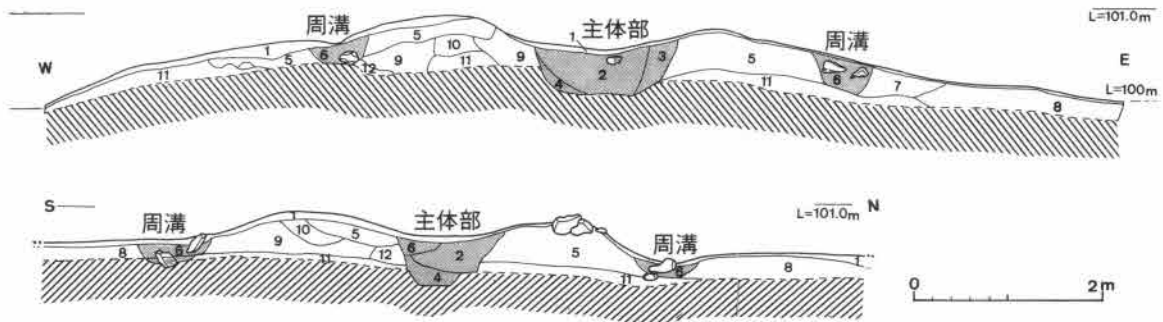
②検出遺構(第8・9図、図版第14～16)

古墳としての遺構・遺物は検出されなかった。周溝をめぐらす古墳状隆起の中心部から、一辺約1.7m・深さ約0.4mを測る二段の掘形(主体部)を検出した。全体の直径は約6m、周溝の底からいわゆる墳頂までの高さは約1.5mを測る。周溝の幅は約0.4m・深さ約0.1mを測る。方形掘形内の埋納物は、再掘坑から取り出されたとみられ、掘形の北西隅に焼土及び炭化材を検出したのみである。赤い焼土は、掘形の外側にも広がっており、この部分で火を使ったと考える。また、周溝外に比較的近接して小規模な土坑が4基あり、その内の1基から炭化材を検出している。

なお、周溝の中に散在する石は、もともと掘形の中に詰められていたものであろう。



第7図 調査トレンチ配置図・トレンチ土層断面図



第8図 墳丘及び主体部土層断面図

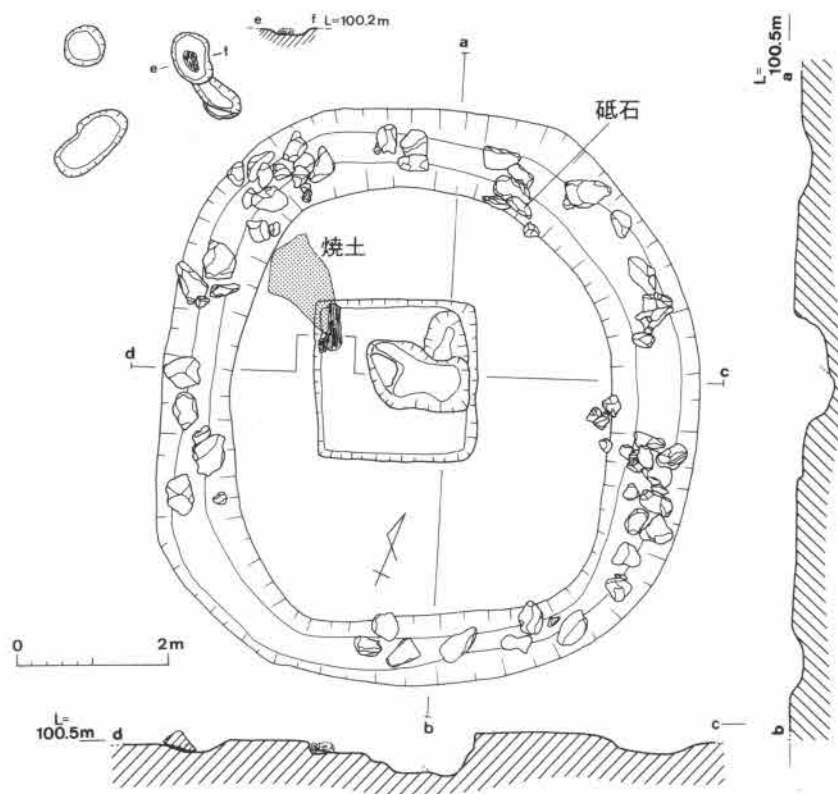
1. 表土 2. 暗黄褐色粘質土 3. 褐色粘質土 4. 黄褐色粘質土 5. 淡黄褐色粘質土
 6. 暗褐色粘質土 7. 褐色粘質土 8. 暗赤褐色粘質土 9. 暗黄褐色土 10. 褐色砂質土
 11. 淡赤褐色粘質土 12. 暗褐色土

③出土遺物(第10図)

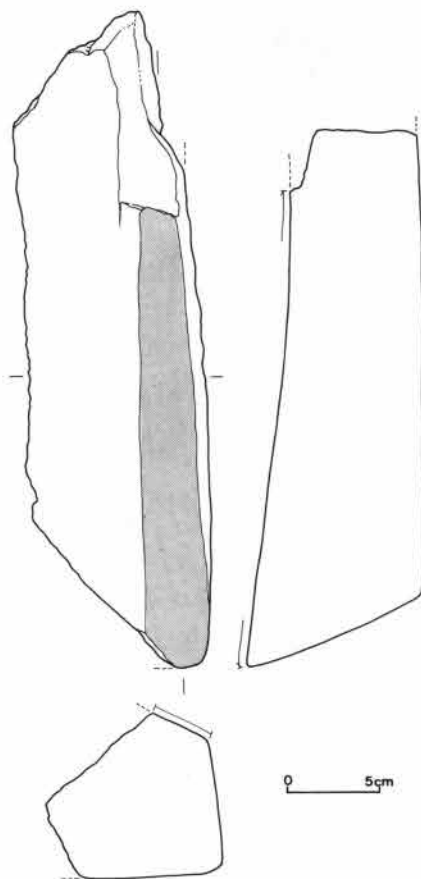
砥石(砂岩製)は、堀古墳の周溝内に落ち込んだ石の中から確認した。砥石として使用された砥面は、非常に滑らかである。正面左側は破損しており、右側面及び底面は平坦に加工されている。なんらかの石造物が破損の後、砥石に再利用された可能性もある。

4. まとめ

池下城支城跡では、郭・堀切の山城遺構及び集石遺構を検出した。その急峻な地形や眺望のよさとあいまって、池下城の出城としての役割は十分に果たせたであろう。歴史的にみた池下城支城跡と池下城の関係については、今後の課題である。また、集石遺構の性格であるが、経塚・墓の形態は時期、地域の違いによってさまざまである。丹波・丹後地方では経塚と墓が複合したと考えられる遺構も存在している。そして、経塚も墓も、各地の集落や寺院などと密接な関わりをもって造営されている。池内谷地区では中世集落の



第9図 遺構平・断面図



第10図 砥石実測図

発掘調査例はなく、寺院は多いが経塚、墓との関係を示す文書の存否も不明である。したがって、集石遺構が経塚、墓のいずれであるかの判断は現時点では避けたい。なお、集石遺構の造営時期は、出土した青白磁皿(12～13世紀)から、およそこの年代に近いものであろう。

堀古墳では、中心部に二段の方形掘形をもち、円形に周溝をめぐる遺構を検出した。この遺構についても、墓・経塚あるいは他の遺構になるのか判断できない。また、周辺の焼けた地面や土坑は、狼煙の場である可能性もある。池下城支城跡の集石遺構と同様、この遺跡についても周辺地域の調査・研究の進展のなかでその性格を決定すべきであろう。

(黒坪一樹)

注1 調査期間中、舞鶴市教育委員会の吉岡博之氏、京都府文化財保護指導委員の高橋卓郎氏・松本節子氏からは適切かつ専門的な助言や貴重な資料の提供を受けた。また、地元作業員の方々には、最後まで熱心に調査に協力していただいた。ご芳名を記し、心より御礼申し上げます。

平成6年度：秋友幸雄・井元亮平・井元晴美・越後道子・越後鈴子・大野岑郎・木下 武・木下千尋・木下利明・木下弥平・田中志のぶ・田中久士・団野 実・土本靖子・出口順一・中嶋広子・二谷信男・二谷美智枝・藤原勅子・法里太郎(以上、敬称略)

平成7年度：小滝初代・四方千佳子・杉本暁美・杉本清四郎・杉本友江・立花睦子・鉄尾カヅヨ・鉄尾こま子・鉄尾幸子・福井裕子・前 聡子・前 重夫・前 広代・南あさ子・南ハツミ・山田智恵子・山田美和子・山中道代(以上、敬称略)

注2 『京都府埋蔵文化財情報』第56号(44頁)において、祖母谷川、与保呂川上流域における古墳時代の造墓活動について、否定的な見解を示した。しかし、今後の調査によっては新しく認められることも否定できず、前回の推断を撤回し、今後の調査に期待したい。

注3 本節については舞鶴市民新聞に連載されている松本節子氏の『舞鶴・文化財めぐりー池内谷の文化財ー』(311・312・314・316) 1992を参考にした。

注4 杉原和雄「経塚と墳墓ー丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡についてー」(『考古学雑誌』74-4 日本考古学会) 1989 53頁

2. 園部城跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、京都府船井郡園部町小桜町97番地に所在する京都府立園部高等学校の体育館建設工事に伴い、京都府教育庁管理部管理課の依頼を受けて実施した。

園部町には縄文時代から江戸時代までの多くの遺跡が存在している(第11図)。中でも、園部城は町の中心地に位置し、ところどころに建物・石垣などの遺構が残存している。そもそも、近世園部城は但馬国出石から移ってきた小出吉親によって築城され、元和7(1621)年に完成している。城は、天守閣をもたない陣屋形式である。幕末までの約250年間は、園部藩主小出氏の居城として栄える。最後の藩主小出英尚の時、明治の新政府から京都を守護することを理由に、城の整備と増改築を許可される。京都府立園部高等学校に現存し、京都府の文化財に指定されている巽櫓や楼門は、この時のものである。しかし、明治4(1871)年の廃藩置県以降に城内の主な建物は解体され、明治20(1887)年に船井郡立高等小学校が建てられ、大正15(1926)年には府立園部中学校(現園部高校)が建設されて今日に至っている。

園部城跡の発掘調査は当センターでは3度目である。すべて、園部高校内の建設工事に伴って実施した。昭和56年度調査では、石組の溝、瓦溜まり、溝、塀跡などの遺構及びこれらに伴う多くの遺物(瓦・陶磁器・土師器・古銭など)が見つかった。さらに、古墳(方墳)2基及び埴輪なども検出されている。^(注1)昭和62年度調査では、井戸に伴う排水施設である石組の溝及び瓦溜まりなどの遺構に伴って、瓦や陶磁器類などの遺物が出土している。^(注2)園部町教育委員会による調査を第3次とし、今回の調査を園部城跡第4次調査とする。調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員黒坪一樹が担当した。調査期間は平成7年6月26日～8月9日までである。調査による掘削面積は約800m²である。

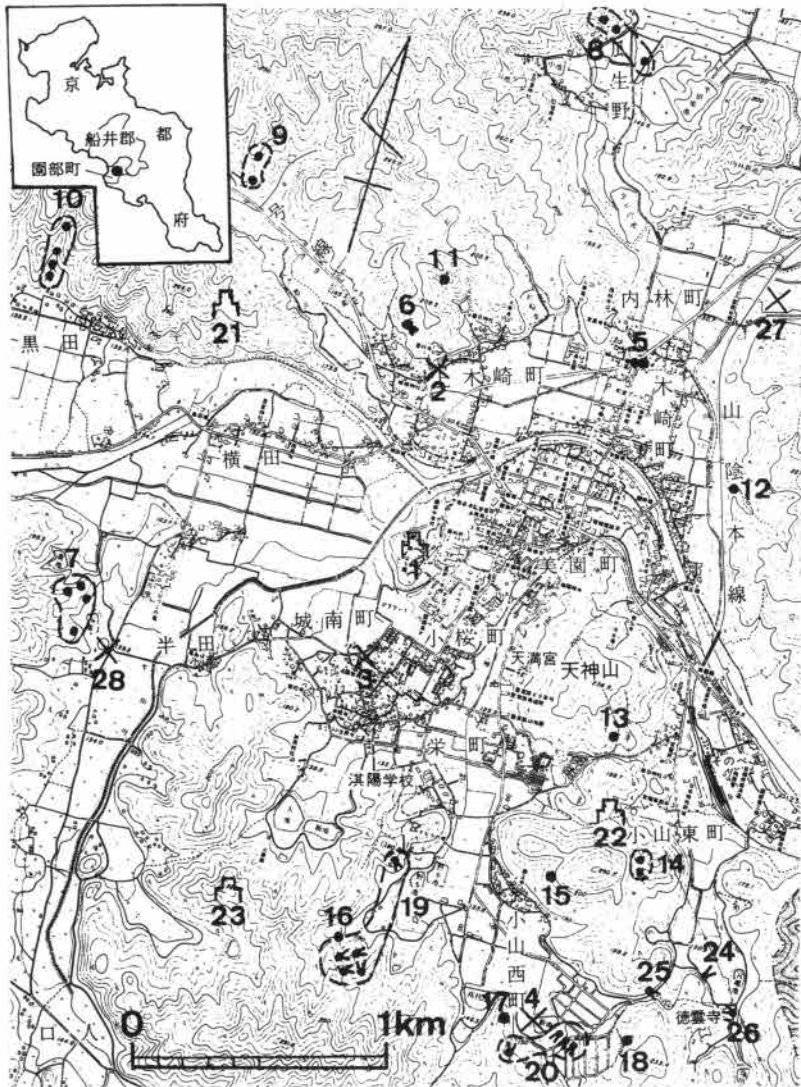
なお、調査にかかる経費は全額、京都府教育庁管理部管理課が負担した。現地調査中は、園部高校には多大の便宜を図っていただいた。また、園部町教育委員会の辻健二郎氏とタウン誌「丹の街」編集者の河原信之氏からは貴重な資料や適切な助言を賜った。地元作業員・調査補助員・整理員には猛暑にもかかわらず最後まで熱心に作業をこなしていただいた。^(注3)以上の方々から心から御礼申し上げる次第である。

本調査概要の執筆にあたっては、当センター調査員黒坪一樹、同尾崎昌之が分担した。文責は文末に記した。遺物写真は当センター調査員田中 彰が撮影した。また、出土遺物の記述にあたり、当センター主任調査員引原茂治と同調査員森島康雄の教示を受けた。

(黒坪一樹)

2. 園部町の位置と環境

園部町は、京都府の中央部に位置し、周囲は八木・日吉・丹波の各町・亀岡市と接しており、面積が約102.48㎡と小さな町である。園部町大河内に源を発する園部川は、市街地北方を蛇行し、半田川・板野川を合わせ桂川に合流する。延長19.5km・流域面積129.3㎡を測る。園部川やそれらと合流する諸河川に沿って耕地が開かれている。その多くは水田として利用されている。園部川の字仁江、本梅川の字大西、半田川の字口人付近の右岸域では、小扇状地状の地形が散見できる。園部町で見られるこうした川沿いの谷間に開けた平坦地は、高位段丘面に位置し、J R園部～船岡駅の区間は標高が約130mと低くなり、低位段丘面にあたるといわれる。これらの平坦地



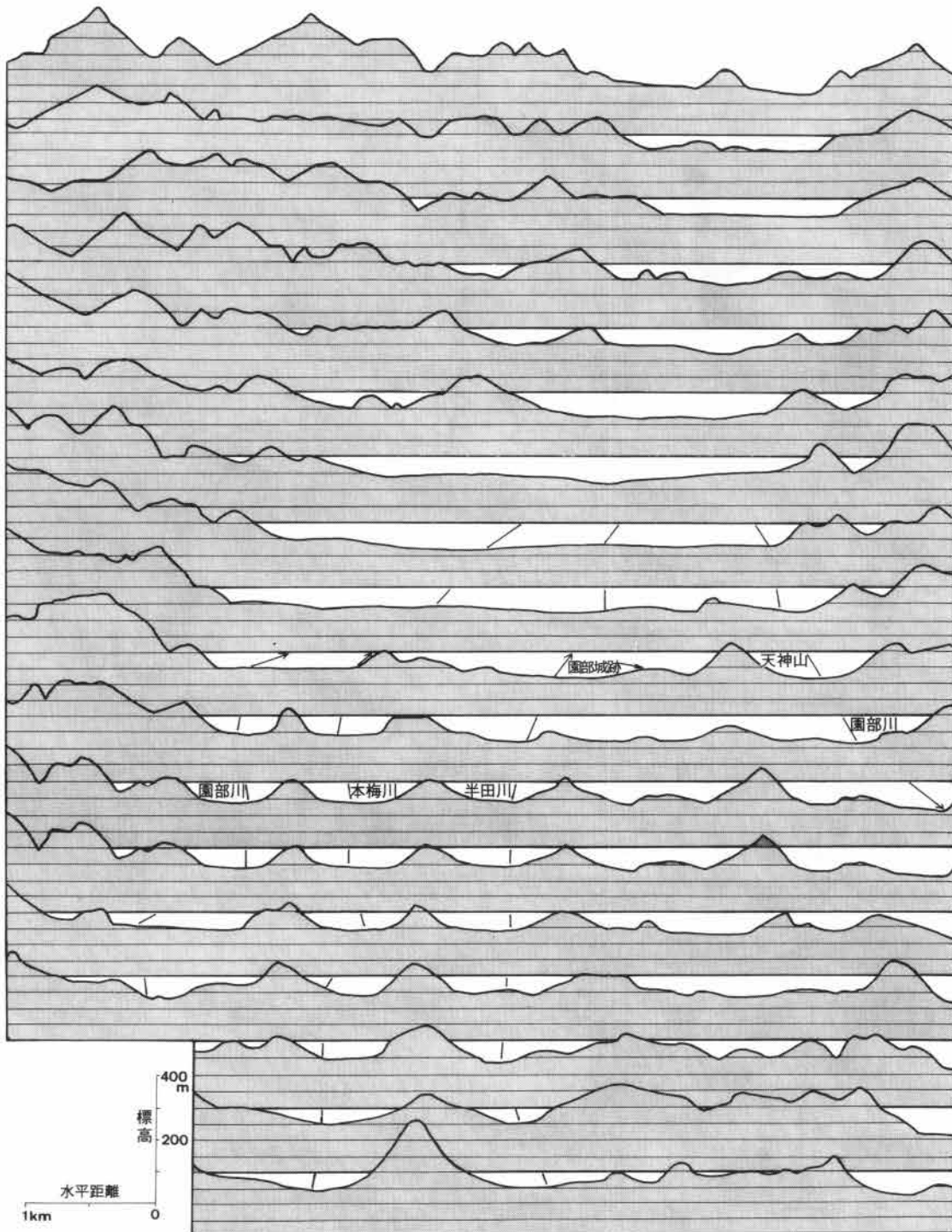
第11図 周辺の遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|------------|------------|-------------|
| 1. 園部城跡 | 2. 宮ノ口遺跡 | 3. 城南町遺跡 | 4. 滝谷遺跡 |
| 5. 垣内古墳 | 6. 中綴古墳 | 7. 温井古墳群 | 8. 瓜生野古墳群 |
| 9. 尾谷古墳群 | 10. 穴武士古墳群 | 11. 宮ノ口古墳 | 12. 向川原経塚 |
| 13. 天神山古墳 | 14. 小山古墳群 | 15. 大垣内古墳 | 16. 桑ノ内古墳 |
| 17. 滝谷古墳 | 18. シヤノ木古墳 | 19. 桑ノ内窯跡群 | 20. 大向窯跡群 |
| 21. 黒田城跡 | 22. 小山城跡 | 23. 大村城跡 | 24. 徳雲寺窯状遺構 |
| 25. 灰原露出地 | 26. 窯状遺構 | 27. 善願寺遺跡 | 28. 半田遺跡 |

は周囲を山に囲まれ、あたかも山間盆地のような姿を呈する。園部町の山地は、ほぼ丹波高地の東端に位置する。丹波高地は、東から西に高度が低下し、由良川や大堰川の二大水系も高度分布に従って流れる「必従河川」を形成する。丹波高地の高度分布は定高性といわれる。このような平坦地は「侵食小起伏面」と呼ばれ、かつて侵食作用を受けた証といわれる。園部町の地形概観を詳しく見るため、投影横断面図(第12図)を作成した。全体的に東から西に高度を下げる。園部町の平均海拔高度は約300mで、最低の地はJ R園部駅付近の約120mである。また、山地の高度も激しくなく、平均的であることも容易に読み取れる。園部城跡の周囲の状況も看取

できる。東側は天神山(235.9m)などの丘陵性山地が、西側は園部川をつくる氾濫原が、北側は園部川が、南側は標高250~300mの丘陵性山地が囲む。園部城跡も標高130~140mの小高い山頂に築かれていることが理解されよう。

(尾崎昌之)



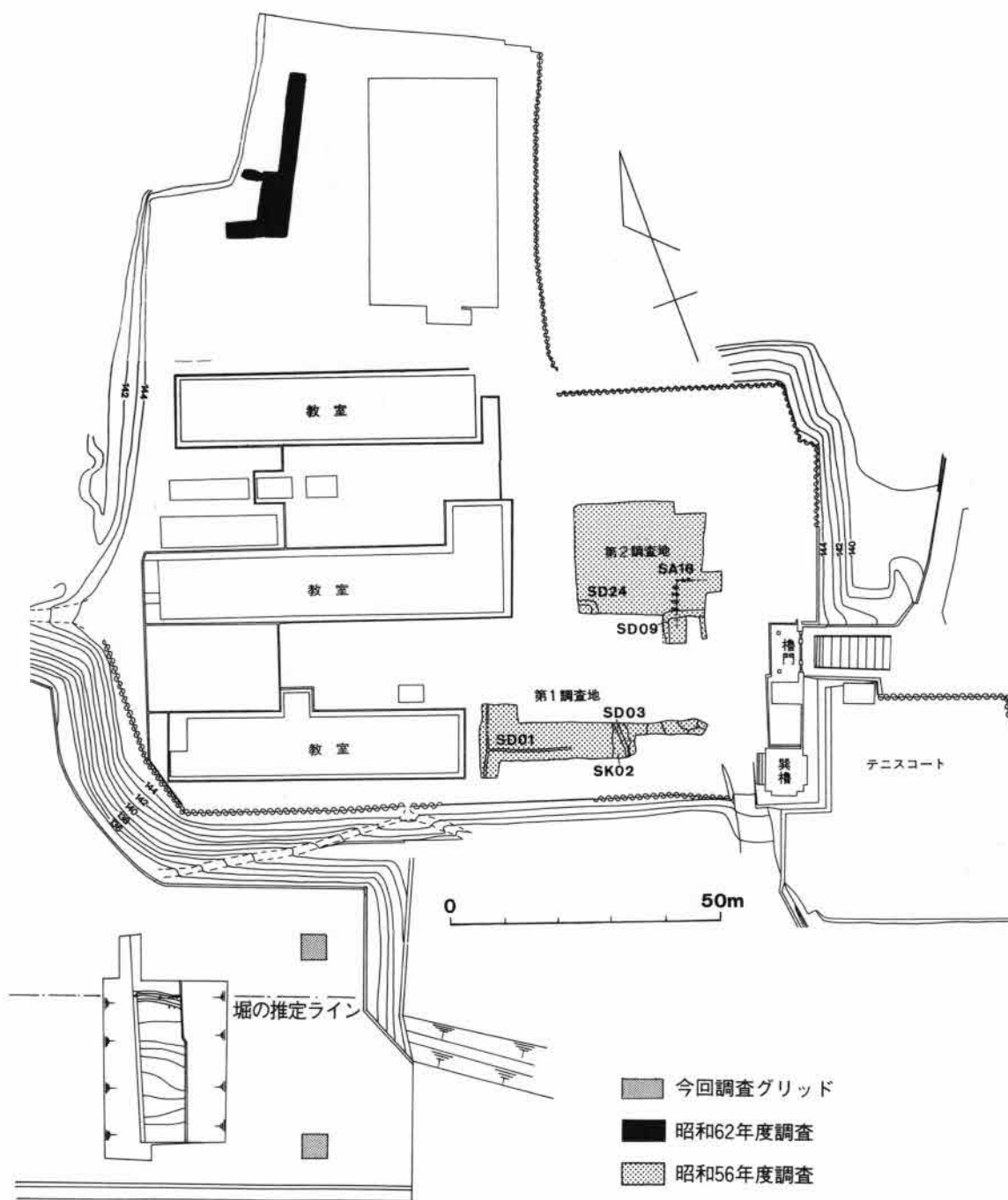
第12図 園部町の投影断面図

水準高は水平距離の2.5倍に誇張。山地の横線は50m間隔。図面上が北を示す。

3. 調査経過

調査は、グラウンドの盛り土がかなりの厚さで堆積しているので、重機によってそれを排除することからはじめた。調査範囲の四隅に5m四方のグリッドをあけた結果、北東・北西の両グリッドでは、盛り土直下が固い岩盤となり、遺構面は完全に削平されていた。南東グリッドでは、グラウンド造成時の排水暗渠によって盛り土の下は深く掘削されていた。園部城の中堀らしい暗褐色粘質土の堆積を確認したのは南西グリッドのみであった。

中堀の北側ラインを検出するため、北西グリッドを南に拡張しつつ掘り進めた。その過程で、



第13図 調査地位置図

堅くしまった黄褐色砂礫の地山面が切れたところが中堀の北側の落ち込みと判断した。中堀の始まりである落ち込みの肩部を壊さないようにして、堀内の埋土を徐々に掘削していった。遺物を含む層については人力でいねいに掘削し、層ごとに遺物を取りあげた。最終的に中堀を底まで掘り切り、かつ杭で護岸された堀の北肩部を検出した。堀の土層堆積状況や地形測量の実測・測量作業の後、8月9日に関係者説明会を実施し、すべての作業を終了した。

4. 調査概要

(1) 検出遺構

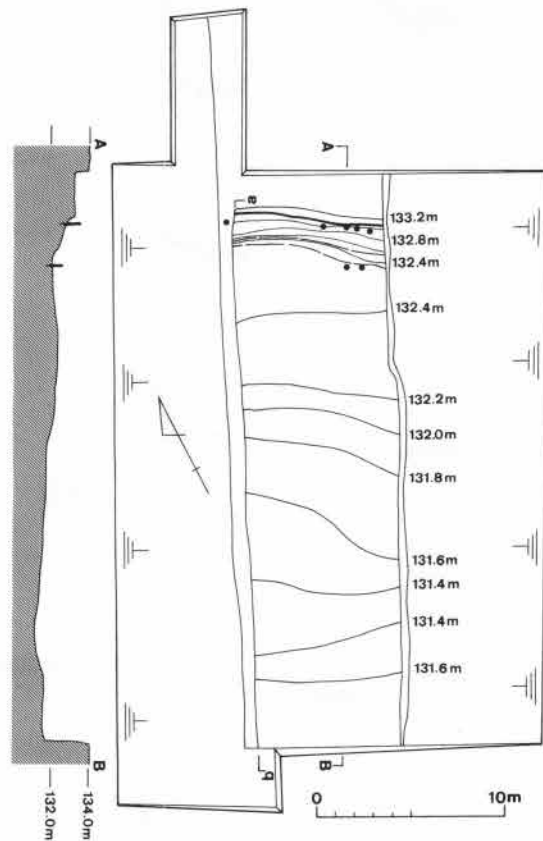
調査地は、園部高等学校のグラウンド東側である(第13図)。ここは、園部城の復原絵図『園部城郭図』によると中堀(南蓮池)にあたっている(第21図)。検出した遺構は中堀で、杭によって護岸された北側立ち上りの一部である。検出は長さ約8m分、幅は25m以上を測る(第14図)。堀の深さを示す土層の堆積は0.4~1mを測る。土層は、黒色~暗褐色の粘質土を中心に灰白色粘土や暗黄色砂質土の互層になっている(第15図)。杭は、中堀に並行して2列に打たれている。

なお、堀の南側の端は、調査範囲内では検出されず、堀の全体幅は不明である。土層断面には明瞭な立ち上がりは観察されなかった。

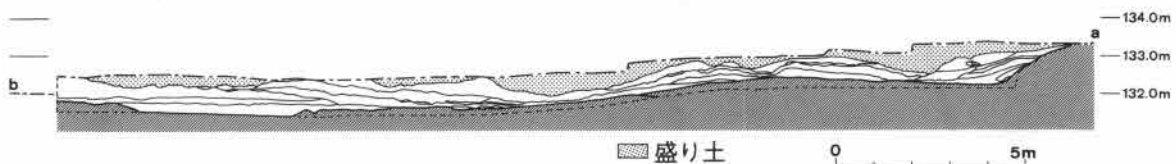
堀の北側には、絵図によると、城に関する郭(平坦部)が存在している(第21図)。しかし、調査経過で記したように、当時の遺構面は後世の削平で完全になくなっていた。

(2) 出土遺物(第16~20図、図版第21・22)

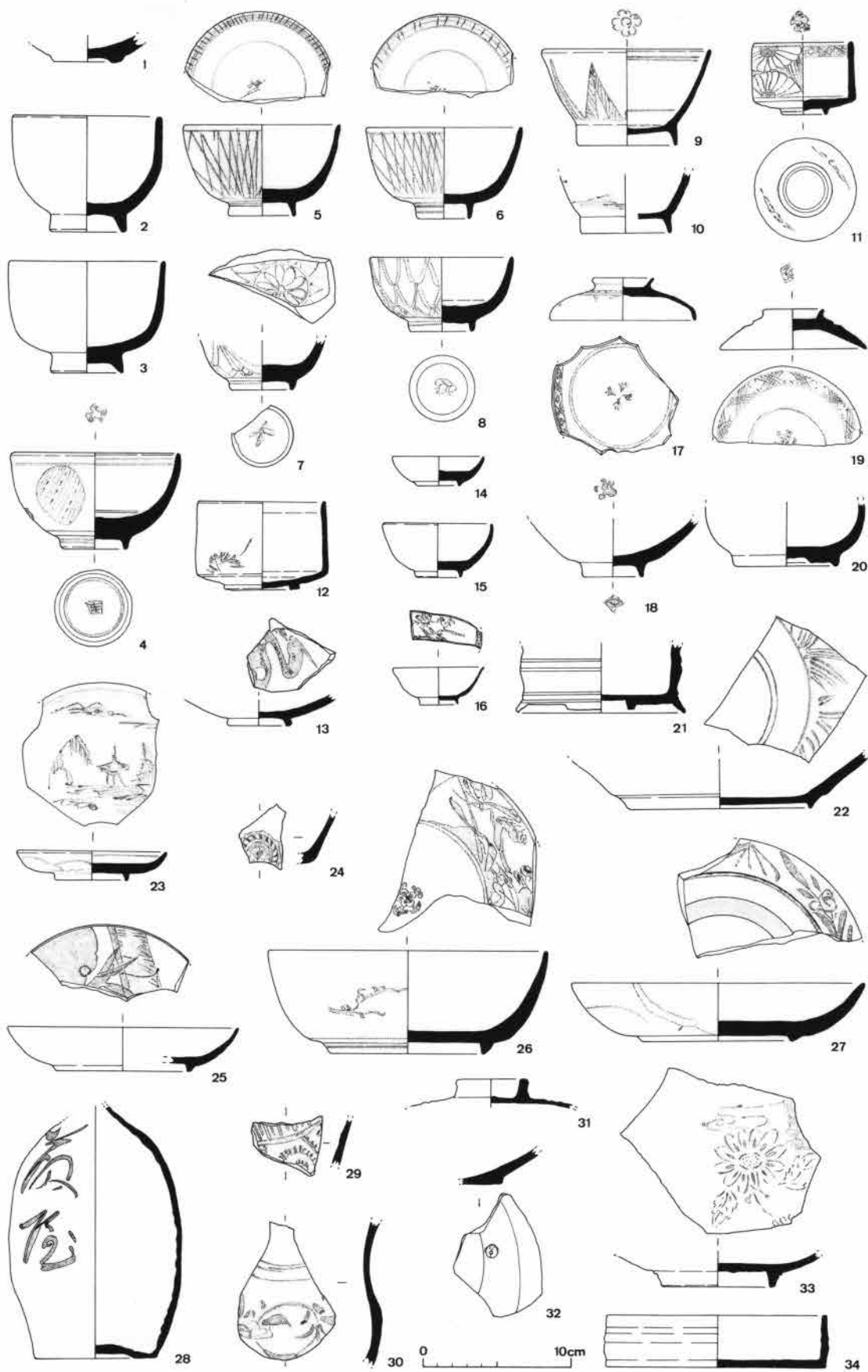
出土遺物は、すべて堀の中からで、近世園部城に関するものがほとんどである。肥前系陶磁器(古伊万里)を中心とする陶磁器類がコンテナ整理箱およそ4箱分、土師器皿4点、弥生土器片1点、硯の断片3点、下駄1点、曲物底1点、軒丸瓦2点、軒平瓦2点、平瓦整理箱2箱分などである。時期的には近世~



第14図 中堀検出状況(ドットは杭)



第15図 中堀上層断面図(a~bラインは第14図参照)



第16図 出土遺物実測図(1)

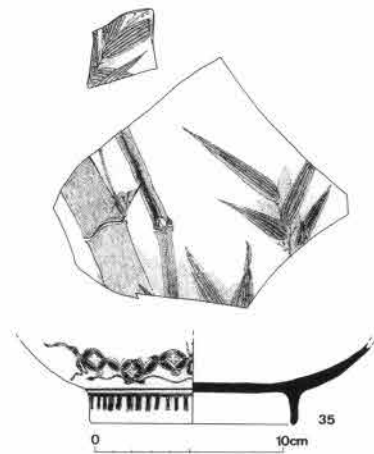
近代の資料が大部分であり、近世園部城の全時期にわたる資料である。出土位置は、堀の落ち込みの肩部付近に最も多く、次いで落ち込みの下場に多かった。すなわち、堀の岸に近いほど多く、南に離れていくに従って遺物の量は少なくなる。堀の南半部では遺物はきわめて希薄である。

出土遺物の約9割を陶磁器類が占める(第16～19図)。1は、肥前系陶器で唐津系の椀の底部である。今回出土の陶磁器類のなかでは比較的早く、17世紀初頭のものである。2・3は、肥前系陶器の椀である。貫入の地で器壁は厚い。同タイプのものが数点ある。17世紀後半のものといえる。4～10は、肥前系染付磁器椀である。4は丸文が描かれたもの、5・6は斜格子目文のもの、7・8は二重網目文のものである。7は、菊花と網目が見込みに、「春」の文が底にそれぞれ描かれる。8は、厚手のくらわんか椀の完形品で、口径9.6cm・器高5cmを測り、底中央に渦福が描かれている。これらは18世紀前半～末頃までの資料である。9・10は、広東型椀で、9は接合によりほぼ完形になり、口径11.4cm・器高6.6cmを測る。18世紀末の資料である。

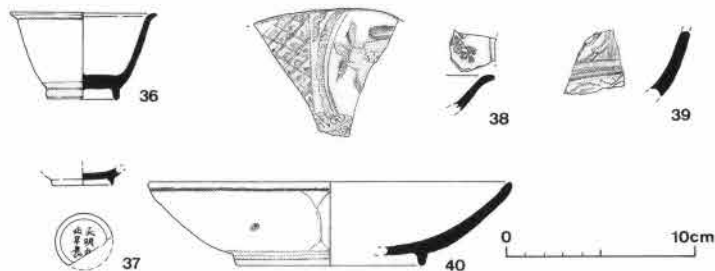
11は、肥前系染付磁器の筒型椀である。完形品で、口径6.8cm・器高5cmを測る。時期は18世紀後半である。12・13は、在地系(京焼写し)の椀と皿で、18世紀末から19世紀に入るものであろう。14・15は、肥前系磁器の紅皿と小型の椀である。ともに、18世紀後半に入る。16は小型染付磁器椀、薄手の作りで系統は不明である。17は、肥前系染付磁器の蓋である。広東型椀の蓋になろうか。椀と同じく18世紀末頃の資料である。18～20は、肥前系青磁の椀と蓋である。20は、高台の内側に無釉の部分幅広く残し、中央部をへこませる特徴がある。18世紀に入ってから出現する高台形態である。21は外青磁の香炉で、17世紀中葉になろう。22は、濃い暗緑色の青磁の皿である。ともに肥前系である。

23・25～27は、肥前系染付磁器の皿と鉢(26)である。24は肥前系色絵磁器の小椀である。青と赤の2色が使われている。28は、陶器製の徳利である。丹波焼である。29・30は、肥前系染付磁器の徳利の断片である。29は、蛸唐草が描かれている。31・32は、在地系の陶器で、蓋と土瓶の底部断片である。18世紀後半以降のものであろう。33は、瀬戸美濃焼の皿である。型紙刷りで菊花が描かれている。34は、鬘たらいである。33・34は、18世紀末～19世紀に入る資料である。

肥前系磁器類で特筆すべきは、鍋島の皿(第17図・図版第22-35)である。鍋島は、本来、鍋島藩から幕府や大名への贈答品で一般に出回る品ではない。外面の七宝繋ぎの意匠や内面の精密な竹の絵、高台の櫛目の染め付けなどにその特色がよくでている。櫛目の染付がくずれず



第17図 出土遺物実測図(2)



第18図 出土遺物実測図(3)

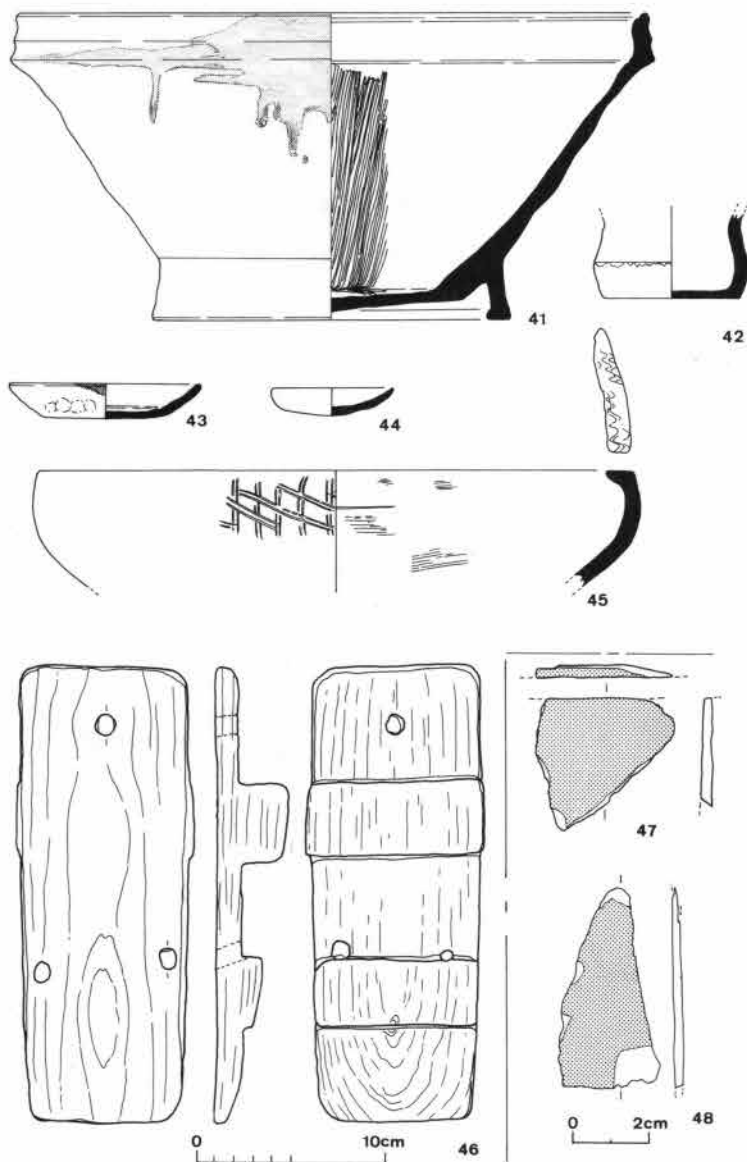
にしっかり描かれていることから、盛期のものと考えられる。年代は17世紀末～18世紀中頃である。京都でも公家クラスの屋敷以外ではほとんど出土例はなく、貴重なものである。

中国製の磁器は点数は少ないが、皿や小鉢を含め破片が数点ある(第18図)。36・37は、小型の椀である。37の底部には「大明成化年製」とある。38～40は、皿の断片である。全体に17世紀前半までのものである。

41・42は、陶器製の摺鉢と香炉である(第19図)。ともに丹波焼とみられ、18世紀末頃になる。43・44は、土師器の皿である。43は、17世紀のものである。

近世より古い時代の遺物は、弥生時代の鉢形土器(45)とみられるものが1点あるのみである。体部外面に斜格子の沈線及びハケ目、内面に横方向のハケ目が施される。また、口縁部は水平面をもち、ややくずれた波状文が描かれている。弥生時代中期のものであろうか。

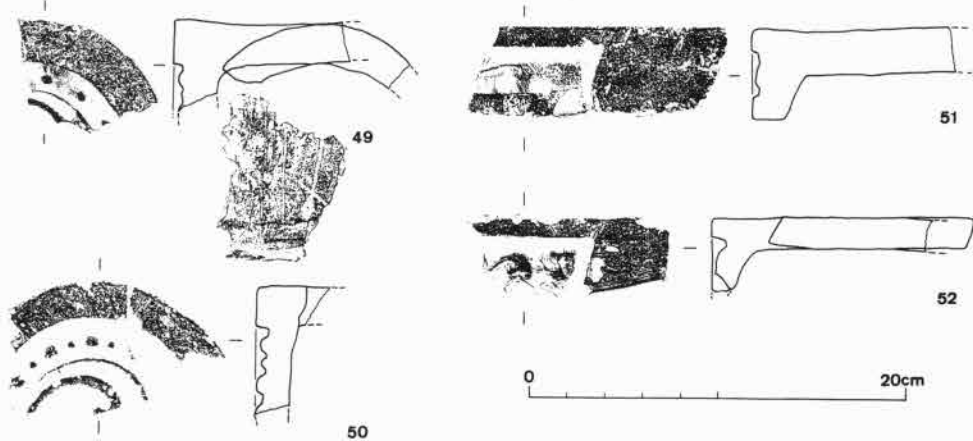
下駄(46)の鼻緒の穿孔は、中間に施されている。削り出しの歯は、後が顕著に減っている。そ



の他の木製品には曲物の底板とみられるものが1点ある。硯の断片は3点であり、2点を図化した(47・48)。底面とみられ、ともに滑らかな面を留めている。

瓦類には、棧瓦を含め、平瓦が十数点ある。軒丸瓦・軒平瓦は2点ずつ出土した(第20図)。瓦の出土点数は比較的少量といえる。49・50は、左三ッ巴文の軒丸瓦で、周囲に連珠文がめぐる。50は、連珠文の大きさが交互になっているのが特色である。50に比べて厚手で作りもしっかりしている49は、江戸時代前半に、50はやや新しく、江戸時代中頃となる。51・52は、均正唐草文軒平瓦である。中心飾りまではないので、全体の大きさは不明であるが、51などは厚みも重量もかなりある。江戸時代前半のものであろう。

第19図 出土遺物実測図(4)

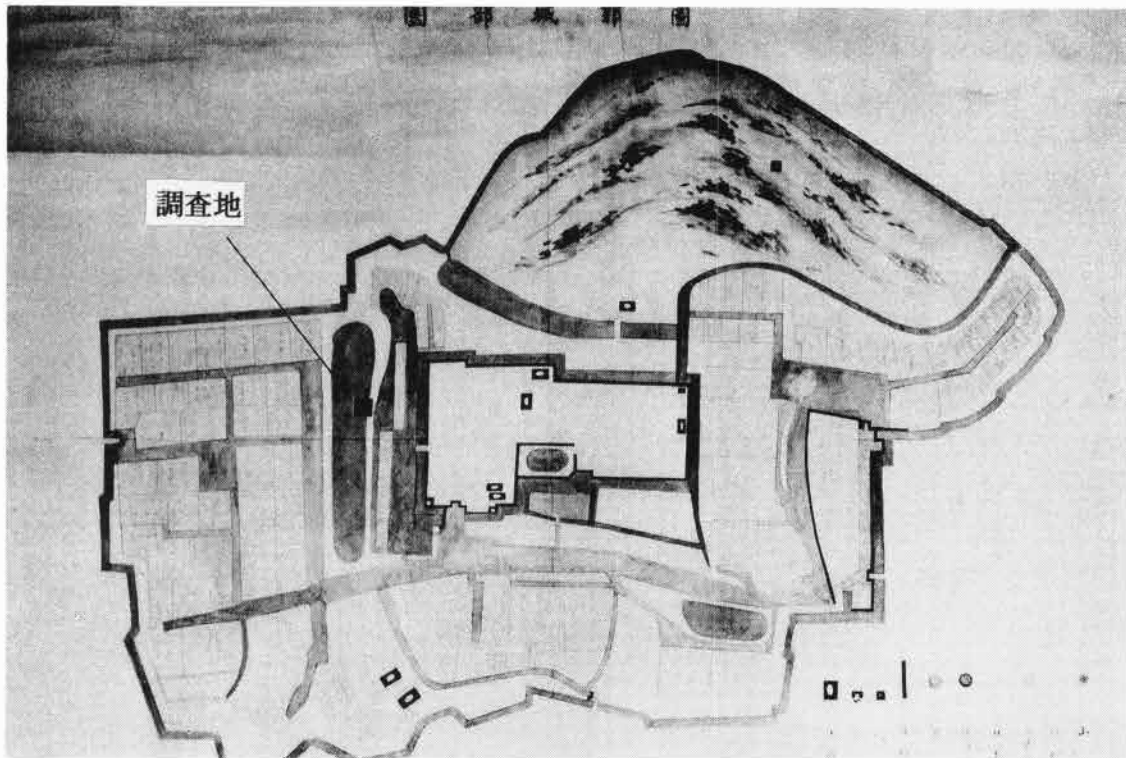


第20図 軒丸・軒平瓦実測図・拓影

5. ま と め

今回の調査では、近世園部城の堀跡の北側ラインを部分的に検出し、堀に堆積した黒色粘土層から多くの遺物が出土した。堀は、杭列が2段に並び、護岸されていた。規模は幅約25m以上を測る。堀の構造は、比較的急な立ち上がりを見せているが、石垣などの構築物はなく、杭で護岸しただけの素掘りで、簡単な構造であることがわかった。

出土遺物には、肥前系(古伊万里)を中心とした磁器類、肥前・瀬戸美濃・丹波などの陶器類、土師器皿、瓦類、硯、下駄などがある。近世園部城に関わる全時期(17~19世紀)の資料が出土したといえる。鍋島の皿や中国製の磁器、さらに多くの産地を異にする陶磁器類から、当時の繁栄や他地域との幅広い交流がしのばれる。特に、鍋島の皿は珍しく、丹波・丹後地方では初めての



第21図 園部城郭図

出土例である。当時の園部城の隆盛がうかがわれる。

部分的ながら、近世園部城の中堀の構造を明らかにできたことは、今回の大きな成果である。ただ、中堀の南岸については検出されなかった。調査区よりもやや幅広いと思われる。土層断面には明瞭な立ち上がりは観察されなかった。後世の土地利用のあり方を検証すべきであろう。

(黒坪一樹)

注1 引原茂治・竹岡 林・水谷寿克他「園部城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注2 鶴島三寿・水谷寿克「園部城跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注3 明田安夫・浅井義久・井上洋子・小島嘉晴・香川友子・片山八重子・金城竜成・木村恵子・斉藤澄代・莊林ハツエ・竹上美代子・栃下富江・中西セツ・人羅幸子・人羅義雄・俣野朋代・小滝初代・松元順代・山内 雅・山中道代・志賀智史(以上、敬称略)

3. 上中太田遺跡発掘調査概要

1. はじめに

上中太田遺跡は、大堰川の支流で京北町を南北に縦断する弓削川右岸の平野部にあって、弥生時代以降中世まで断続的に存続した大規模な複合集落遺跡である。今般、遺跡を含む水田が府営ほ場整備事業(弓削中南部農村活性化住環境整備事業)の対象となり、京都府教育庁指導部文化財保護課と京都府農林水産部との間で、その取り扱いについて協議が重ねられた。その結果、遺跡の範囲確認を主な目的とする試掘調査を京北町教育委員会が主体となって実施し、試掘調査の結果に基づく本調査を(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施することとなった。以下に報告するのは、当調査研究センターが京都府農林水産部の依頼を受けて平成7年度に実施した同遺跡の本調査の概要である。

調査区の確定にあたっては、京都府教育庁指導部文化財保護課及び京北町教育委員会の指導を得て決定した。現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員石井清司、同調査員竹下士郎が担当して行った。調査の対象となったのは、京都府北桑田郡京北町大字上中小字城ほかの水田で、調査面積は約1,500m²を測る。調査期間には、平成7年10月19日から12月22日までの延べ41日間を充てた。調査を実施するにあたり、京都府南丹土地改良事務所、京都府北桑田教育局、京北町教育委員会の各機関をはじめ、地元関係各位にはさまざまな面でご指導、ご協力を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である。^(注1)

なお、本調査概要は調査担当者が分担執筆し、文責は文末に示した。

(奥村清一郎)

2. 歴史的環境

上中太田遺跡が所在する北桑田郡京北町は、京都府のほぼ中央に位置する。町域のほぼ東方を京都市左京区、南方を京都市北区、西方を船井郡八木町、日吉町、北方を北桑田郡美山町に接し、大堰川(上桂川)の上流一帯に広がる丹波高地の山々に囲まれる山間の町である。町の中央を大堰川と支流の弓削川が南流し、中心地周山で合流したのち、大堰川として亀岡盆地へと西流する。この大堰川水系をさかのぼれば、若狭・近江に通じ、逆に下れば、亀岡・京都へと通じる。京北町は、このふたつの川沿いの狭小な盆地を中心に、古くから林業を主要産業として発展してきた。

京北町の歴史的環境を概観すると、最古の考古資料としては、周山瓦窯跡で発見され、旧石器時代後期の可能性が指摘されている、チャート製の剥片石器があげられる。^(注2) 縄文時代に属する明確な資料は発見されていないが、愛宕山古墳の主体部埋土の中から発見されたサヌカイト剥片や土器片は、縄文時代にまでさかのぼる可能性もある。^(注3) 弥生時代になると、これまで6次に及ぶ上

中遺跡の発掘調査^(注4)や、1994年の塔遺跡発掘調査^(注5)などによる遺物・遺構、下弓削出土とされる扁平鈕式袈裟襷文の銅鐸などがあり、盆地内の各所で集落が営まれはじめるようである。

古墳時代になると、町内各所に古墳が築造され、集落も広がっていったようである。詳細が明らかにされたものは少ないが、町内には現在130基余りの古墳が確認されており、その多くは古墳時代後期の群集墳である。その中でも1974年に調査され、古墳時代前期後半に比定される周山



第22図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------------------|------------|
| 1. 調査地 | 2. 宮の谷遺跡 | 3. 上中遺跡 | 4. 上中城跡 | 5. 岩ヶ鼻古墳群 |
| 6. 弾正古墳群 | 7. 八幡宮裏山古墳群 | 8. 宮の谷古墳群 | 9. 鳥谷古墳群 | 10. 矢谷古墳群 |
| 11. 矢谷奥古墳群 | 12. 狭間谷古墳群 | 13. 塩田口古墳群 | 14. しが田古墳群 | 15. 三宅谷古墳群 |
| 16. 塔村古墳群 | 17. のぼりお古墳 | 18. 鳥居古墳群 | 20. 塔遺跡(19は、平成6年度調査地点) | |
| 21. 愛宕山古墳群 | 22. 比賀江古墳群 | | | |

1号墳^(注6)や、1982年に調査が行われ、銅鏡(写真1)や鉄製武器・工具・装身具などが出土し、古墳時代中期初頭に比定される愛宕山1号墳は、古墳時代前半期のもものとして広く知られている。特に、愛宕山1号墳は、周山盆地全域の支配を確立した首長の墳墓としての可能性も指摘されており、この地が日本海沿岸部と畿内周辺部を結ぶ、交通路上の要地であったことをうかがわせるものとして注目される^(注7)。

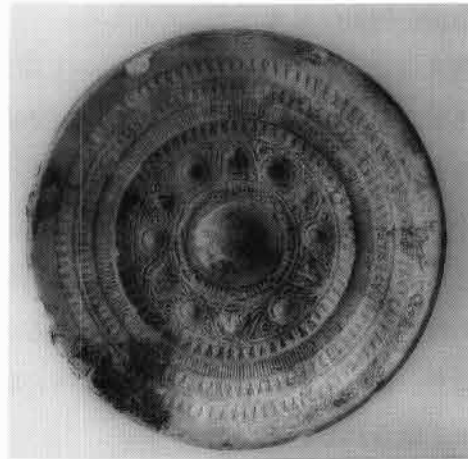


写真1 愛宕山古墳出土獣面鏡

続く奈良時代の遺跡としては、周山廃寺があげられる。この周山廃寺は、1947年東京帝室博物館(石田茂作代表)の調査によって、川原寺式軒丸瓦などが出土し、飛鳥時代から奈良時代のものとして位置づけられると同時に、中央政権との関わりも指摘されている^(注8)。また、1981年には、この周山廃寺に瓦を供給した周山瓦窯が調査され^(注9)、さらに1992年には、周山廃寺の対岸にある祇園谷遺跡の調査によって、この時期の集落跡が発見されている^(注10)。寺院・集落・瓦窯がセットになって確認された例は全国的にも少なく、7世紀から8世紀の京北町のようなすを知る貴重な資料といえる。

平安時代に入ると、弓削川流域に弓削庄、大堰川流域に山国庄がそれぞれ形成され、都への木材の供給地として発展していく。特に、山国庄は明治時代初頭にいたるまで、天皇家直轄の禁裏御料所として大きな位置を占めていたことが知られる^(注11)。塔遺跡の発掘調査では、緑釉陶器なども出土しており、調査地域と山国庄との関連も指摘されている^(注12)。中世になると、明智光秀の築城した周山城跡とともに、今回の調査地に隣接し、1993年に調査された上中城跡などがあげられる。上中城跡は調査の結果、掻き上げ土塁を持ち、周囲に箱堀形式の堀をめぐらす、中世前期に築城された館城であることが判明している^(注13)。

以上見てきたように、京北町では、弥生時代には集落が成立し、大堰川水系を介して若狭・近江地域や山城地域などと交渉を持ちながら、集落は拡大・発展していく。さらに古代から、交通の要衝であると同時に、中央へ丹波の材木を供給する一翼を担ってきており、古くから一定の生産基盤を有し、中央と密接な関係を持ちながら、独自の発展をとげてきた地域といえよう。

(竹下士郎)

3. 調査の概要

今回の調査では、農道をはさんで南側の約1,000㎡を第1トレンチ、北側約500㎡を第2トレンチとして設定し調査を開始したが、第2トレンチの北寄り約300㎡は、重機掘削もままならぬほど湧水が激しく、簡単な土層の確認を行うのみにとどまった。この地点では、表土の下に暗黒灰褐色の軟弱な粘質土が約1m堆積しており、さらにその下には砂礫を多く含む白濁色の粘土が厚く堆積していた。以上のことから、第2トレンチでは、現水田の畦畔で区画された南側約200㎡

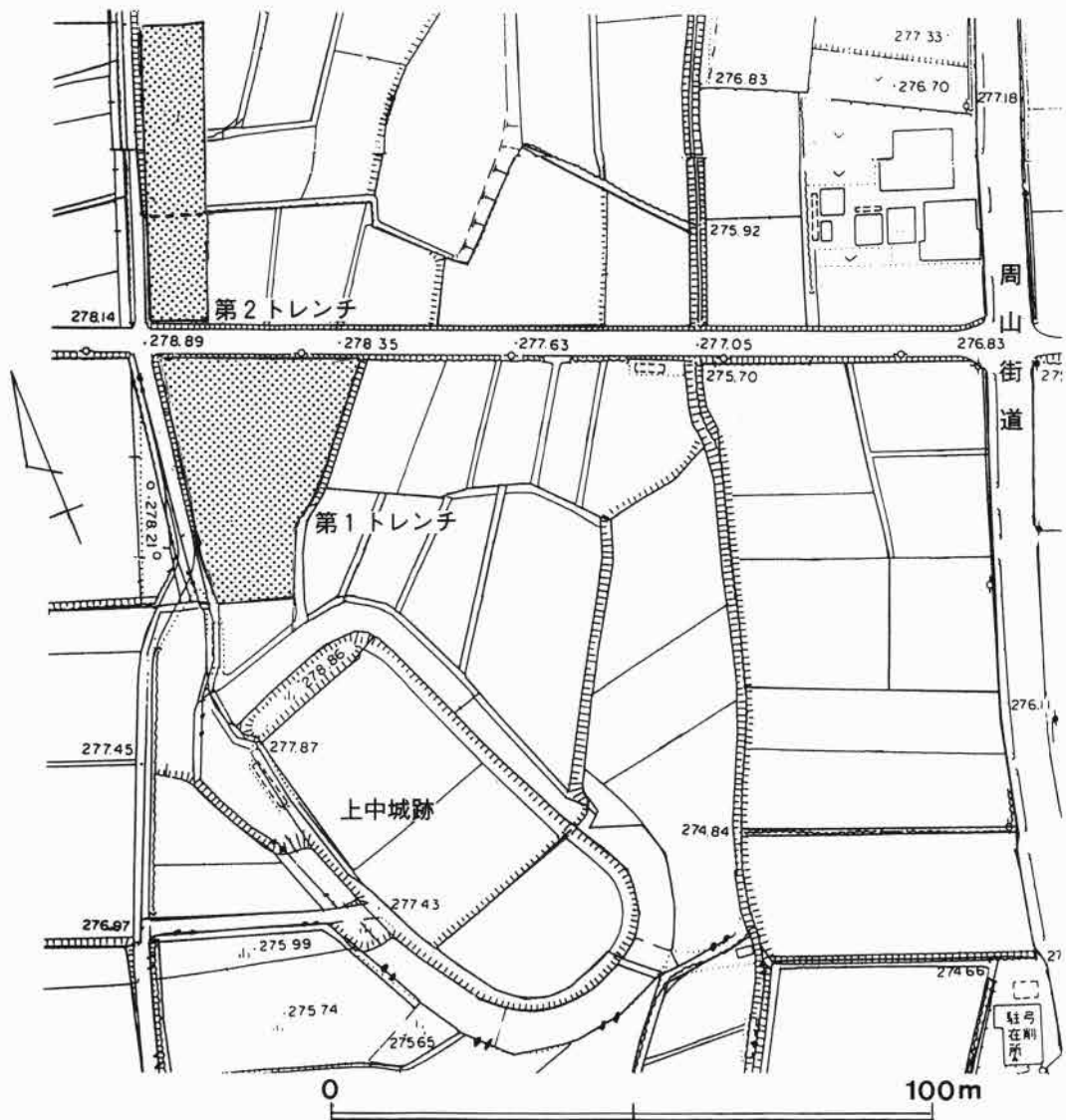
で遺構の検出作業を行うこととした。

調査は、表土(耕作土)を重機により除去した後、人力による掘削並びに遺構検出作業を行い、第1トレンチのほぼ全面と第2トレンチの南側では、表土除去後すぐに遺構面を確認することができた。第1トレンチの南側約1/3では、耕作土直下で5cm大の礫を多く含む暗黄茶褐色の地山面がみられ、ここでの検出遺構はこの地山面を掘り込んでいる。第1トレンチの北側の約2/3と第2トレンチでは、耕作土直下に暗茶褐色粘質土が見られ、ここで多くの遺構や遺物を検出した。この暗茶褐色粘質土の下には白濁色あるいは濁黄白色の粘土が堆積している。

なお、両トレンチともに耕作土直下に昭和初期に造られた暗渠があり、拳大から人頭大の川原石が充填されていた。

(1)検出遺構(第24図)

第1トレンチでは、竪穴式住居跡3基、掘立柱建物跡1棟のほか、溝状遺構、不整土抗、ピット群を、また第2トレンチでは、竪穴式住居跡1基を検出した。



第23図 トレンチ配置図



第24図 調査地遺構平面図

竪穴式住居跡 S H07(第25図)

第1トレンチ北端で検出した推定直径約8.0m、検出面から床面まで約0.25mを測る円形住居跡で、住居跡の北側半分は現在の農道直下にあるため未検出である。埋土は、暗黒灰褐色の粘質土で、床面に近い部分はやや淡い色調となる。この埋土を除去すると、濁黄白色の粘土となる。住居跡内には柱を据えたと思われるピットのほか、壁面下には一部周壁溝が掘り込まれている。住居跡内で検出したピットは6か所あり、そのうち最大のもは直径20cm・深さ35cmを測る。周壁溝は、住居跡の西側と東端で検出しており、最大幅15cm・深さ7cmを測る。床面直上には、弥生時代後期末と考えられる壺、甕、鉢などの土器(第30・31図3～17)が出土した。

竪穴式住居跡 S H08(第25図)

第1トレンチ中央部西端で検出した一辺約4mの方形住居跡で、床面ではピットのほか一部周壁溝を検出した。耕作土直下で検出したが、上部の削平がいちじるしく、輪郭は不明瞭で、検出面から床面までは最深部で10cm・平均約5cmであった。埋土は、黒灰褐色粘質土である。周壁溝は、住居跡の西辺で約1.5m分を、南・東辺部分でわずかに検出したにすぎない。この溝は、最大幅15cm・深さ5cmを測る。この住居跡に伴うと考えられる土器は微細片が多く、時代は特定できないが、その規模や形からおそらく竪穴式住居跡 S H09と同時期に形成されたものであろう。

土坑 S K17(第25図)

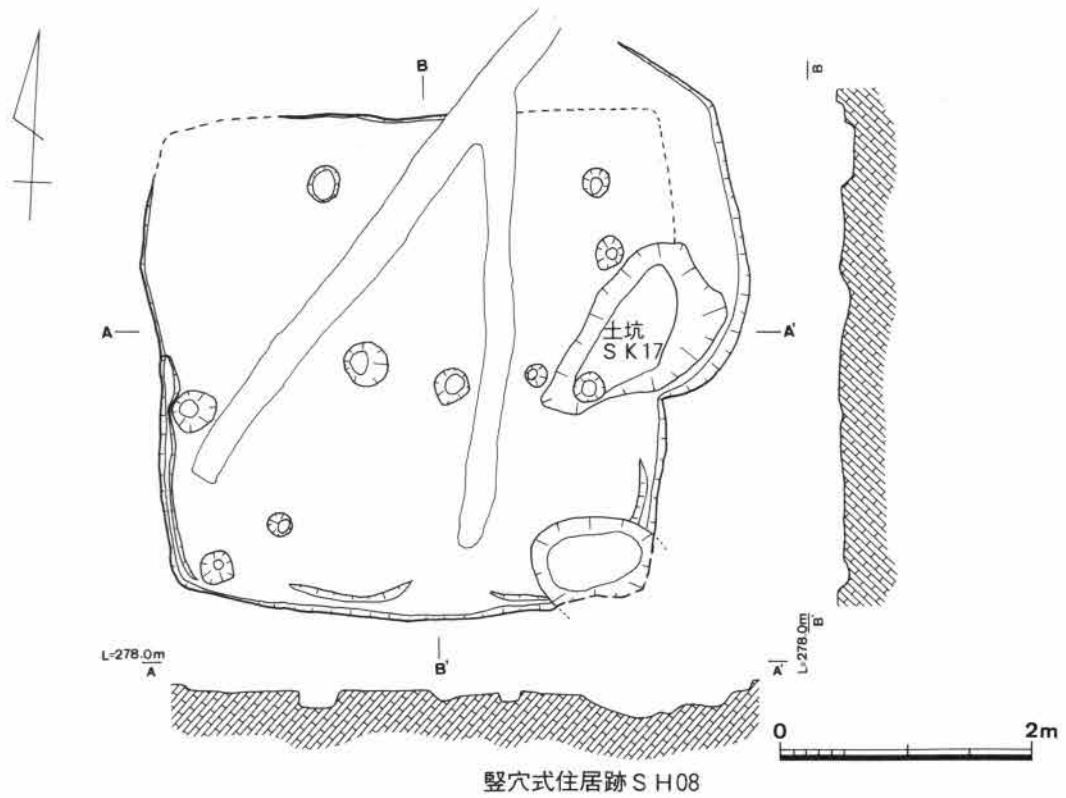
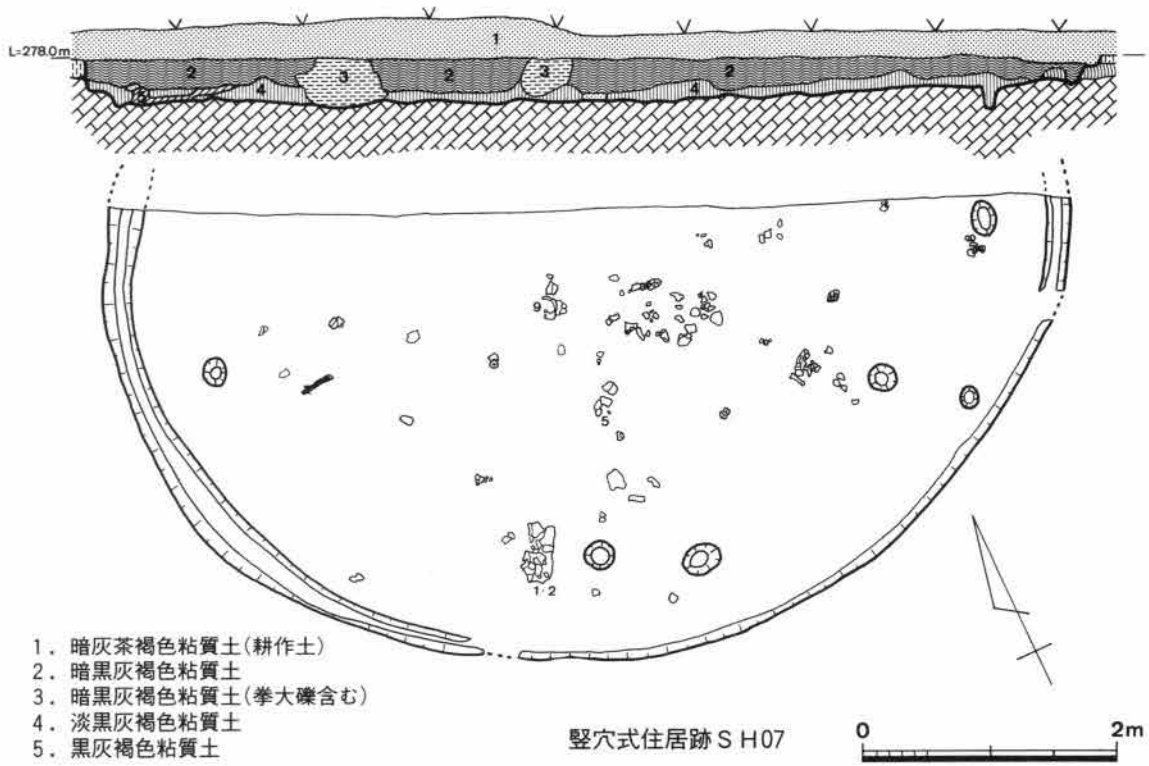
竪穴式住居跡 S H08の東端には、その下層に長軸1.8m・短軸0.9m・深さ0.2mを測る不整形な土坑 S K17がある。この土坑 S K17の埋土は、濁黒黄褐色を呈しており、堆積状況や出土遺物(第31図18～20)から、竪穴式住居跡 S H08よりも古く、竪穴式住居跡 S H07と同時期の遺構と考えられる。

竪穴式住居跡 S H09(第26図)

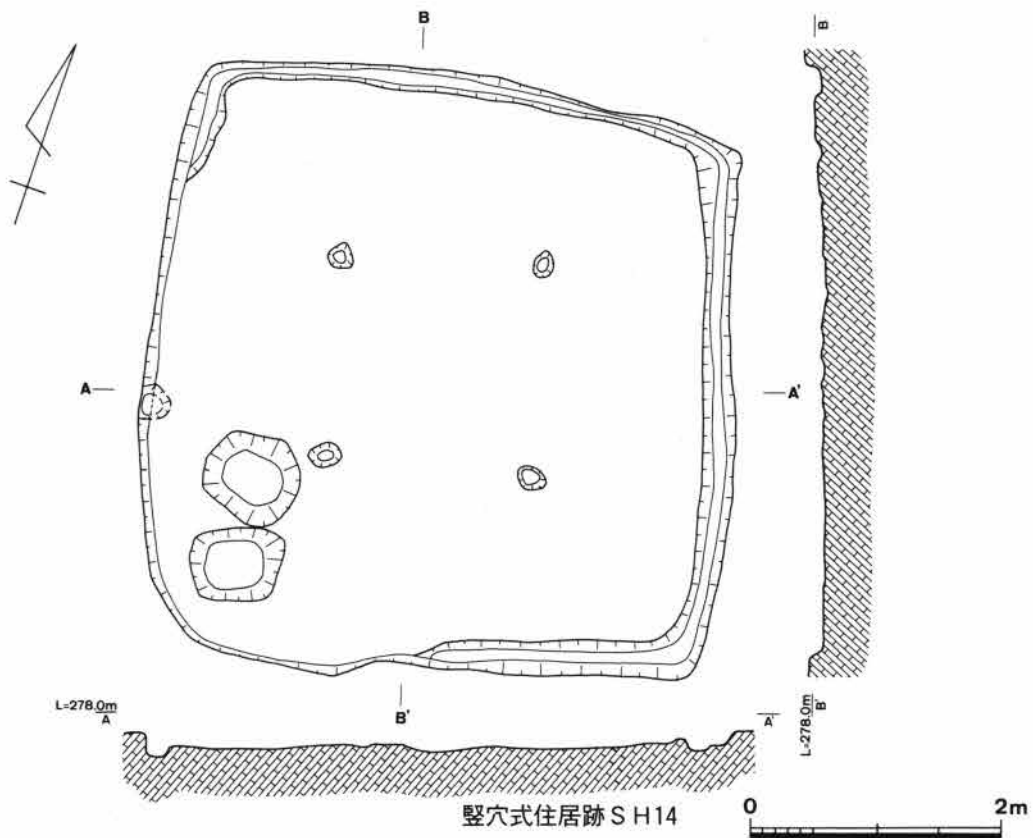
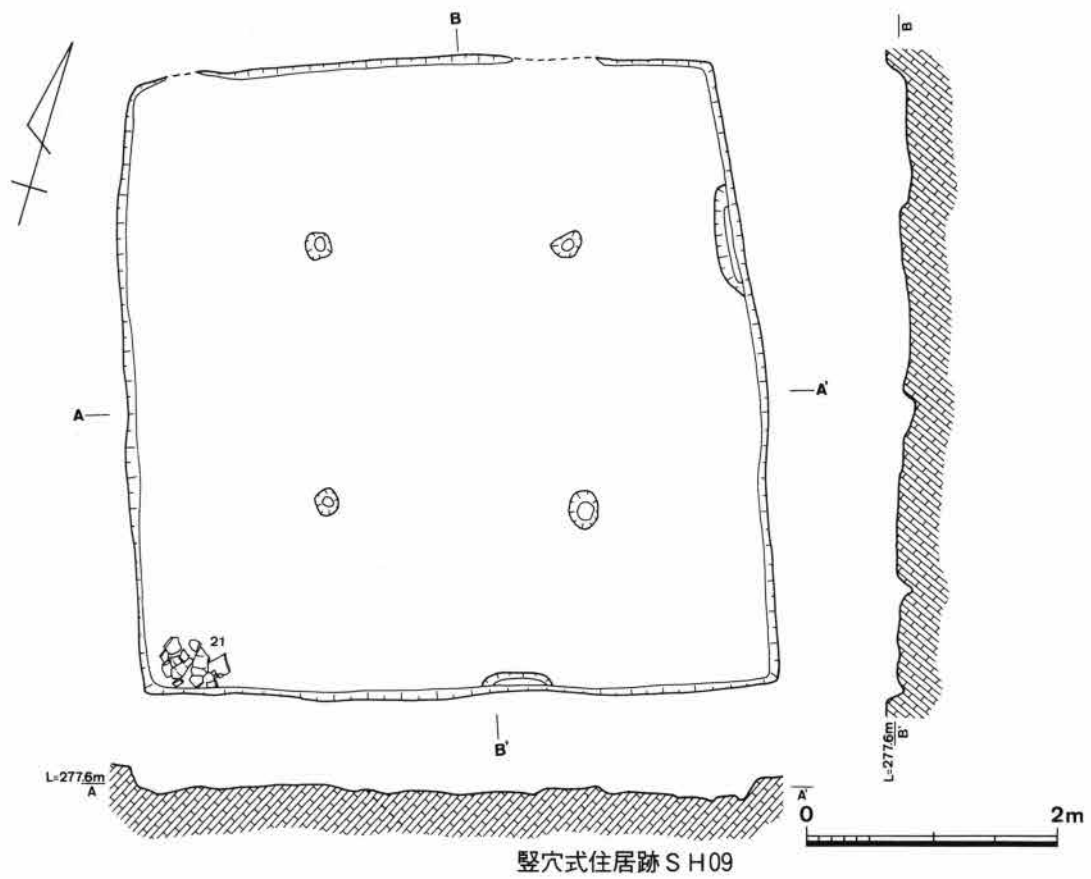
第1トレンチの中央で検出した一辺約5mの方形住居跡で、古墳時代後期のものと考えられる。床面には柱を据えたと思われる4か所のピットがある。検出面から床面までは10～15cmの深さで、床面の南角で土器(第31図21～25)が比較的まとまって出土した。埋土は、竪穴式住居跡 S H08と同様の黒灰褐色粘質土であった。住居跡に関わる柱穴と考えられるピットは直径15～20cm、深さは最深で26cmを測る。南辺と東辺で周壁溝と考えられる幅15～20cm・深さ5～6cmの溝を確認したが、いずれも長さは60cmほどである。

竪穴式住居跡 S H14(第26図)

第2トレンチ中央で検出した一辺約4.5mの方形住居跡で、床面には4か所のピットや周壁溝、貯蔵穴を検出した。この住居跡も古墳時代後期と考えられる。耕作土直下で検出し、輪郭も明瞭であったが、上部の削平が大きく、検出面から床面までは8～10cmであった。4か所のピットは直径20～25cm・最深部で35cmを測る。周壁溝は、最大幅15cm・深さ8cmの断面「U」字状の溝である。この住居跡の南西部には、深さ20～21cm・長辺約75cm・短辺約60cmで、隅丸方形を呈する落ち込みを2か所確認した。この2か所は連続しており、両方とも埋土は住居跡床面直上の埋土と同様の暗黒茶褐色粘質土である。遺物は含まれておらず、住居に伴う貯蔵穴であると考えられる。



第25図 豎穴式住居跡実測図(1) 1/60



第26図 豎穴式住居跡実測図(2) 1/60

土坑SK12(第27図)

トレンチの中央部やや北西寄りで検出した長軸約5m・短軸約2mを測る不整形な土坑である。内部の北側と南側にやや深い落ち込みがあり、最深部は検出面から約40cmを測る。暗黒茶褐色の埋土で、出土遺物(第31図26~29)から竪穴式住居跡SH07と同時代に形成されたものと考えられる。

溝SD01(第28図)

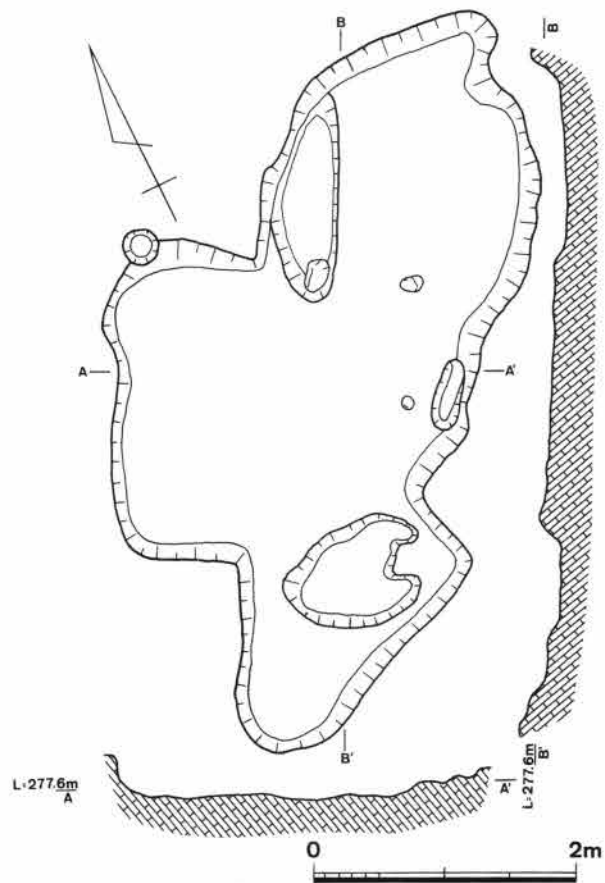
第1トレンチを南北に縦断するようのびる上面幅約1m・深さ約0.6mの断面が逆台形状をした溝で、検出全長約50mを測る。溝は、調査地の南端で「L」字状に屈曲しており、北流したと思われる。溝内から、奈良時代の土師器、須恵器(第32図33~36)が出土した。

溝SD02

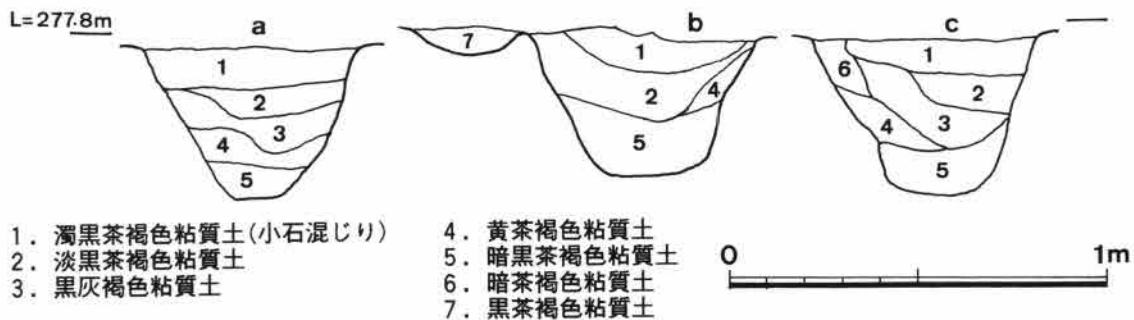
溝SD01と同じように「L」字状に屈曲している溝で、第1トレンチ南端で検出した。上面幅約50cm・深さ約10cmを測る。検出全長は約10mである。この溝は、北方への連なりは確認できなかったが、調査地南端で溝SD01と接している。また、この溝SD02は、溝SD01との切り合い関係から溝SD01よりも古く、出土遺物から見て、竪穴式住居跡SH08・SH09・SH14などと同時期の遺構と思われる。

溝SD03

第1トレンチの北東から中央部にかけてのびる上面幅約25cm・深さ15cmを測る溝で、検出全長は約20mである。南方への連なりは確認できなかった。出土遺物は、微細片が少量で、須恵器が含まれている。



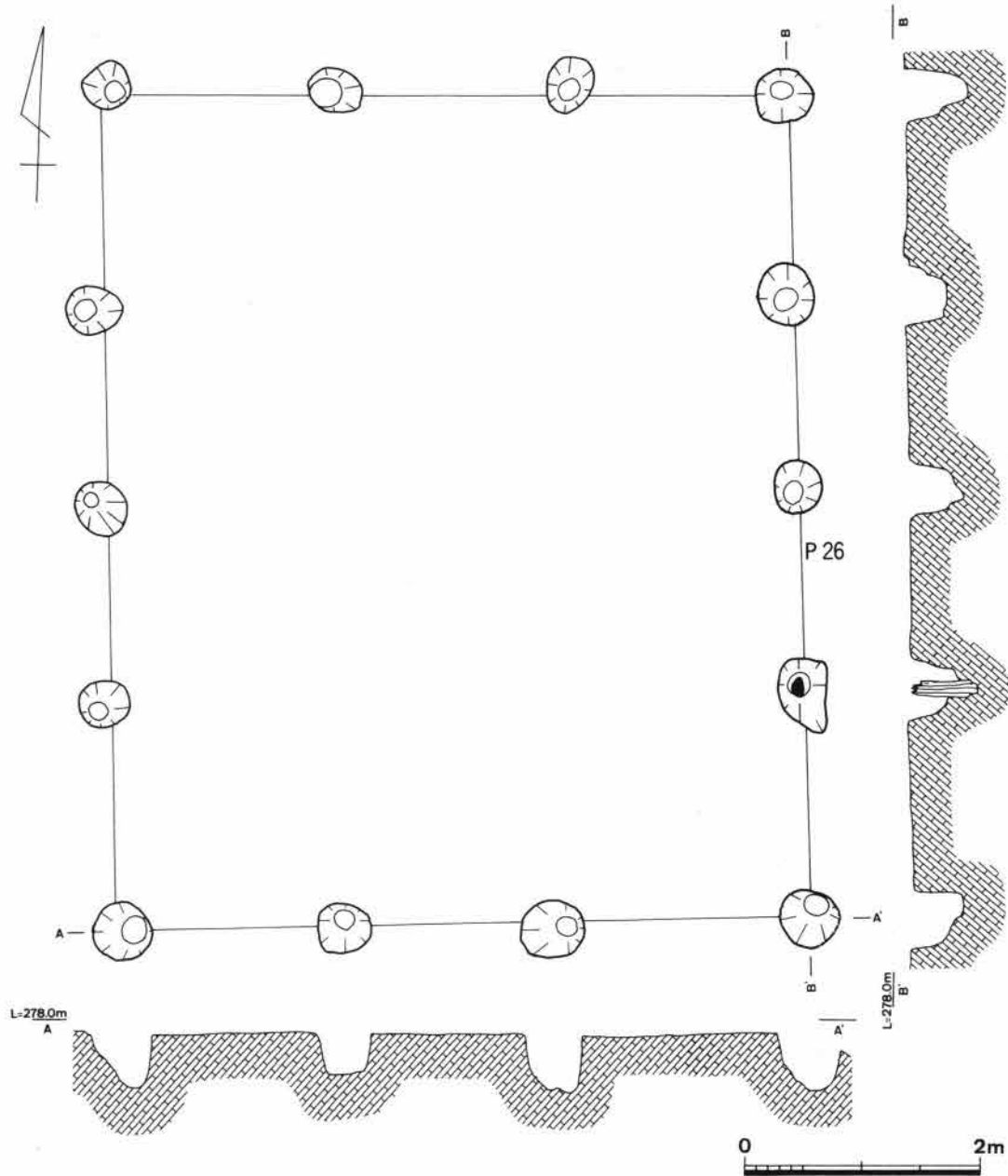
第27図 土坑SK12実測図



- 1. 濁黒茶褐色粘質土(小石混じり)
- 2. 淡黒茶褐色粘質土
- 3. 黒灰褐色粘質土

- 4. 黄茶褐色粘質土
- 5. 暗黒茶褐色粘質土
- 6. 暗茶褐色粘質土
- 7. 黒茶褐色粘質土

第28図 溝SD01土層断面図



第29図 掘立柱建物跡 S B 10実測図(1/60)

掘立柱建物跡 S B 10(第29図)

第1トレンチ北東部で検出した東西3間・南北4間の建物跡で、柱間は平均約1.8mを測る。主軸はほぼ北を向く。各柱穴は直径約45cm・深さ約50cmを測り、一部には柱そのものが残っていた。柱穴(P 26)からは奈良時代の土器(第31図32)が出土した。

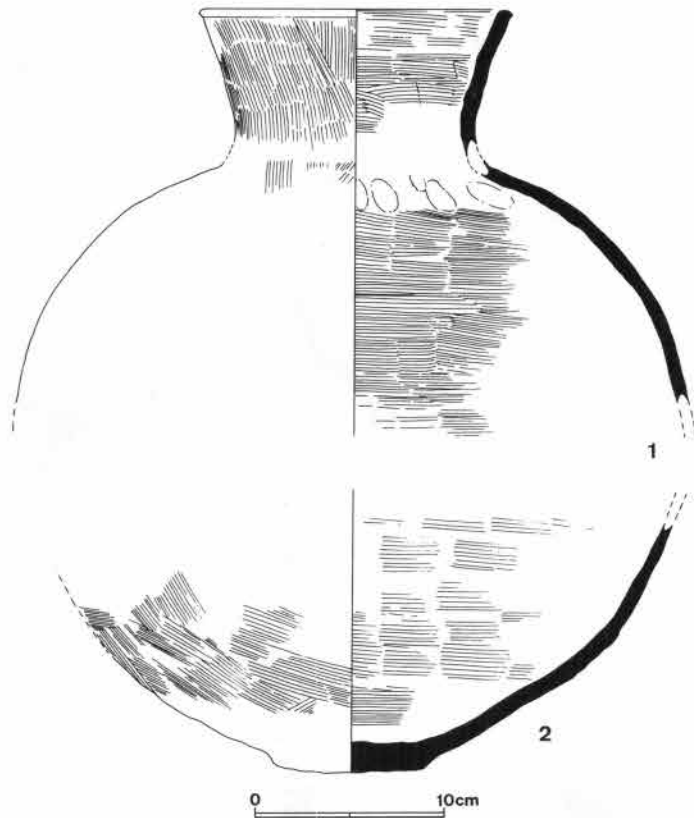
(竹下士郎)

(2)出土遺物(第30～32図)

各竪穴式住居跡・溝状遺構内から土師器・須恵器などが出土した。

竪穴式住居跡 S H 07からは、壺・甕・高杯・鉢などが出土した。壺1は、球形の体部で口縁部は直立ぎみに立ち上がる。口径は約16cmで、外面には縦ハケ、内面には横ハケの調整を施す。肩部内面にも横ハケを施している。壺2は、突出ぎみの平底を持ち、内外面ともに不整方向のハケ

で調整を施している。壺1・2ともに5mm大の小石を含む胎土で、淡黄褐色を呈する。甕3・4は、単純「く」の字形を呈し、口縁端部を内側に肥厚させる3と、外方にわずかに肥厚する4がある。甕5は、口頸部が「く」の字形に屈曲したのち、斜め上方に短く立ち上がる複合口縁形を呈し、口縁部外面には2条の不明瞭な擬凹線文がめぐる。甕6は体部片で、内面にはいねいなヘラ削り調整を施す。壺9・10は、二重口縁形を呈する。鉢7は、なで肩の体部で、口縁部が短くわずかに外反する。甕8は、球形の体部で、口縁部は斜め上方に立ち上がる。台付鉢16は、浅い椀状を呈し、裾開き



第30図 出土遺物実測図(1)
竪穴式住居跡SH07出土

の短い脚部がつく。鉢17は、浅い椀状を呈し、口縁端部が丸みをもっておわる。鉢11は、皿状の体部で、口縁部が斜め上方に長く立ち上がる。高杯13~15は、脚部片である。

竪穴式住居跡SH08の下層にある土坑SK17からは、高杯18・19及び器台20が出土した。高杯18は、浅い皿状を呈し、19のような脚部がつくと思われる。器台20は、斜め上方に短くのびる受け部と裾開きの脚部がついている。

竪穴式住居跡SH09からは、土師器の甕21・高杯25、須恵器の杯身22・高杯23が出土した。甕21は、ナデ肩の体部で、口縁部は単純「く」の字形に外反する。体部外面は、縦方向のハケ、内面はヘラ削り調整を施す。杯身22は内傾気味に短く立ち上がる受け部を持ち、23は脚部が欠損しているが高杯と思われる、いずれもやや深い椀状を呈し、内傾気味の短いかえりがついている。

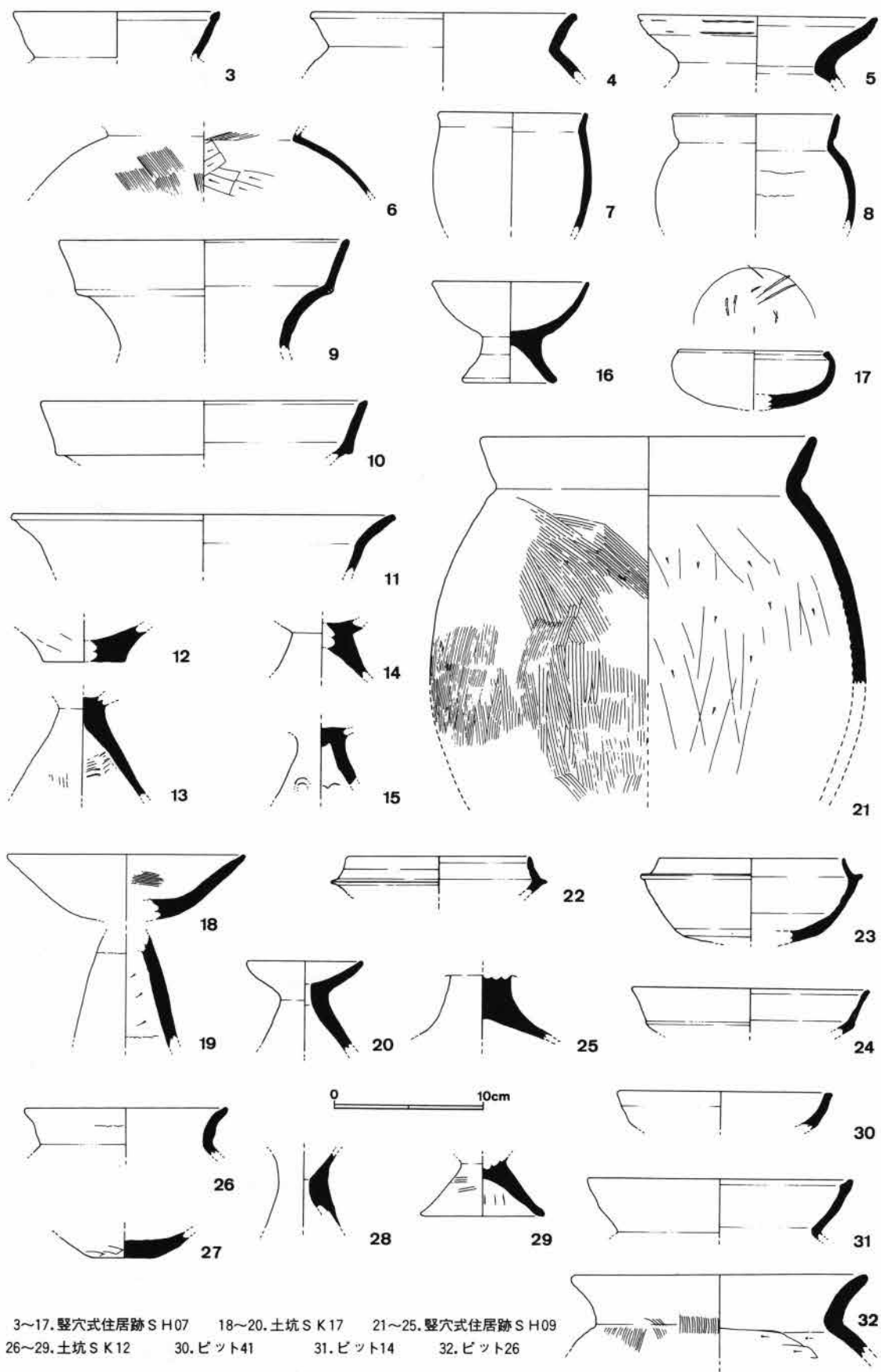
土坑SK12からは、土師器の甕26・27と高杯28・29が出土した。

ピットからは、土師器の甕30・31・32が出土しており、31は口縁端部が肥厚しており、古墳時代前期に、32は器壁の厚さ及び調整から奈良時代に比定できる。

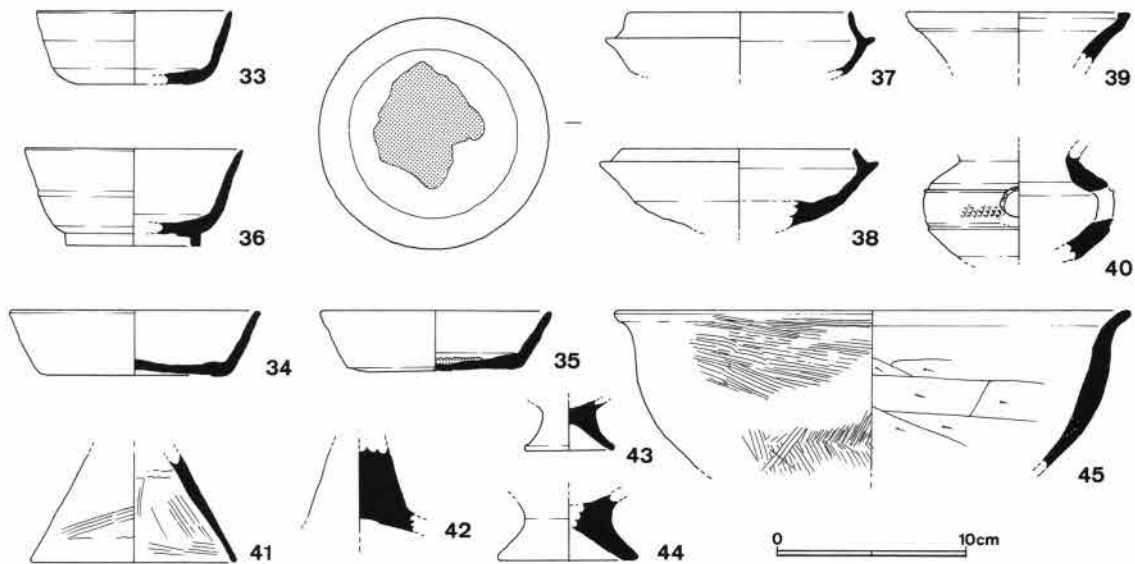
溝SD01からは、須恵器の杯A33・34・35と杯B36が出土しており、35の内面には漆が付着していた。

その他、包含層から、古墳時代前期の土師器41~44や、古墳時代後期の須恵器37~40、奈良時代の鉢45が出土している。

(石井清司)



第31図 出土遺物実測図(2)



第32図 出土遺物実測図(3)
33~36. 溝S D01 37~45. 包含層

4. まとめ

平成6年度に京北町教育委員会が実施した試掘調査と、本年に当調査研究センターが実施した発掘調査の結果、この地域で遺跡の存在が明らかとなった。

この遺跡では、弥生時代後期末に円形住居を主体とした集落が形成され、古墳時代を通じて存続したと考えられる。今回の調査地内では、3基の方形住居跡を検出することとなったが、いずれもその規模や形・出土遺物などから古墳時代後期のものと考えられ、古墳時代後期には集落の広がりを見出すことができる。

今回の調査では、古墳時代後期以後の約200年間を埋める資料を見いだすことはできなかったが、奈良時代には掘立柱建物が造られる。今回検出した掘立柱建物跡は、3間×4間と小規模で、数点の土器以外には他の遺物も見いだせなかったため、官衙的施設とは考えがたく、一般的な集落の中の1棟と見られる。また、第1・第2トレンチともに数多くのピット群がみられるが、それぞれの時代性や性格を示す資料の数は少ない。しかし、今回の調査でも包含層から瓦器碗片や中国製と見られる白磁片が出土しており、また調査地の南東に上中城跡が隣接することから、ピットの中のいくつかは中世のものとなる可能性がある。

今回の調査地の北端では、非常に軟弱な粘質土と湧水が激しかったこと、またほ場整備に関わる事前のボーリング調査の結果などから、調査地の北側の部分には流路状あるいは池状の地形があったことが予想できる。第1トレンチを縦断する溝S D01は、この地形に接続する可能性も高く、奈良時代の集落をめぐる排水施設と考えることもできよう。

以上のように、今回の調査では、弓削川右岸に立地した弥生時代後期から奈良時代にかけて断続的に続く集落遺跡の存在が明らかとなり、さらに京北町教委の試掘調査の結果ともあわせると、平安時代から中世にいたるまでのこの地域における歴史の一端をうかがうことができた。また、調査地の南西500mに所在する上中遺跡も、弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡であり、

周辺に見られる多くの古墳群ともあわせて考えると、この地域周辺における集落はかなりの規模になることも予想され、京北町の歴史を研究する上で貴重な資料を得ることができたといえる。

(竹下士郎)

注1 調査参加者(順不同・敬称略)

磯部吉子・市野コマツ・市野千代子・太田一夫・太田秀子・大町光次・大前キミ代・黒田すま子・高乗節子・古家宗四郎・多富勝美・勝山 勇・筒井春美・西村康夫・間嶋文子・福田とき子・牧野松郎・牧野艶子・保田寛一・吉田 敏・吉田君江・丸橋 渡・芦生 清・谷口剛文・下西 諭・岩本早緒理・小滝初代・松下道子・山中道代・森川敦子・関口睦美・田中美恵子・井上 聡・松元順代・山内 雅・井内美智子・井内由美・柿谷悦子

注2 平良泰久ほか「周山瓦窯跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』 京都府教育委員会) 1979、宇野隆夫編『周山瓦窯跡発掘調査報告書』 京都大学考古学研究室・京北町教育委員会 1982

注3 奥村清一郎『愛宕山古墳発掘調査概報』(京都府京北町埋蔵文化財調査報告書第2集 京北町教育委員会) 1983

注4 増田孝彦「上中遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984、同「上中遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985、同「上中遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986、岡崎研一「上中遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987、同「上中遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988、野島 永「上中遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注5 小池 寛「塔遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注6 森 浩一「周山1号墳」(『日本考古学協会年報』27 日本考古学協会) 1976

注7 前掲注3

注8 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」『考古学雑誌』45-2 1959

注9 宇野隆夫編『周山瓦窯跡発掘調査報告書』 京都大学考古学研究室・京北町教育委員会 1982

注10 小池 寛「祇園谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注11 京北町誌編纂委員会編『京北町誌』 京北町 1975

注12 前掲注5

注13 人魯 亨『上中城跡発掘調査概報』(京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 京北町教育委員会) 1994、同『上中城跡第2次発掘調査概報』(京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 京北町教育委員会) 1995

4. 中海道遺跡第34次発掘調査概要 (3NNANK-34)

1. はじめに

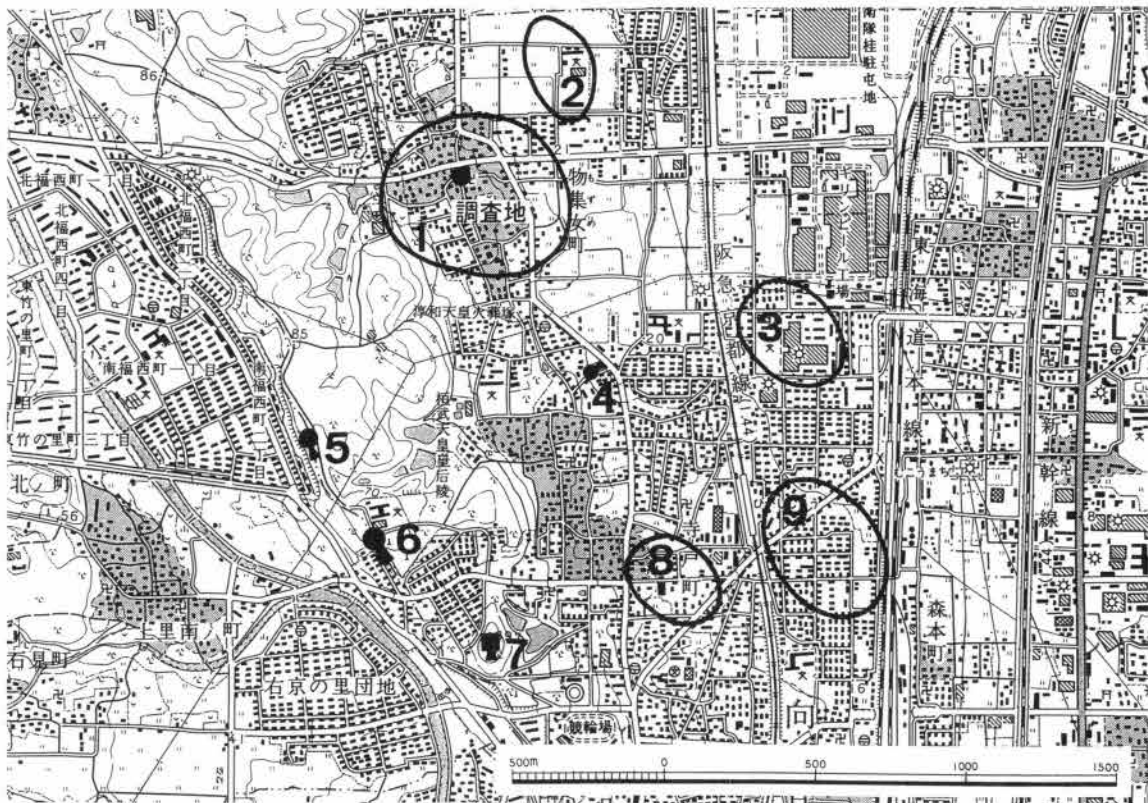
この調査は、久世北茶屋広域幹道アクセス街路整備工事に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、向日市物集女町御所海道地内に所在する。

現地調査は、調査第2課調査第3係長辻本和美、同主任調査員引原茂治、同調査員奈良康正が担当した。調査期間は、平成7年9月27日から11月21日までで、調査面積は290m²である。

発掘調査を進めるにあたり、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、学生諸氏の協力を得た。^(注1)記して感謝したい。なお、調査に係る費用は、京都府乙訓土木事務所が負担した。

2. 位置と環境

中海道遺跡は、向日市域の北端に位置しており、東西約600m・南北約500mにわたる広がりを持つと考えられている。調査地の200mほど北東には縄文時代晩期から鎌倉時代にかけて集落が



第33図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|----------|----------|----------|------------|-----------|
| 1. 中海道遺跡 | 2. 西ノ岡遺跡 | 3. 修理式遺跡 | 4. 物集女車塚古墳 | 5. 寺戸大塚古墳 |
| 6. 妙見山古墳 | 7. 五塚原古墳 | 8. 殿長遺跡 | 9. 渋川遺跡 | |

形成された西ノ岡遺跡が所在する。また、東へ800mほどの地点には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡の検出された修理式遺跡が、南東へ1kmほど下がれば、有舌尖頭器や翼状破片の検出された殿長遺跡や、縄文時代の集落跡である洪川遺跡が所在する。調査地のすぐ南側には山城地域を代表する前期古墳である寺戸大塚古墳、妙見山古墳、五塚原古墳や、後期古墳である物集女車塚古墳が所在する。

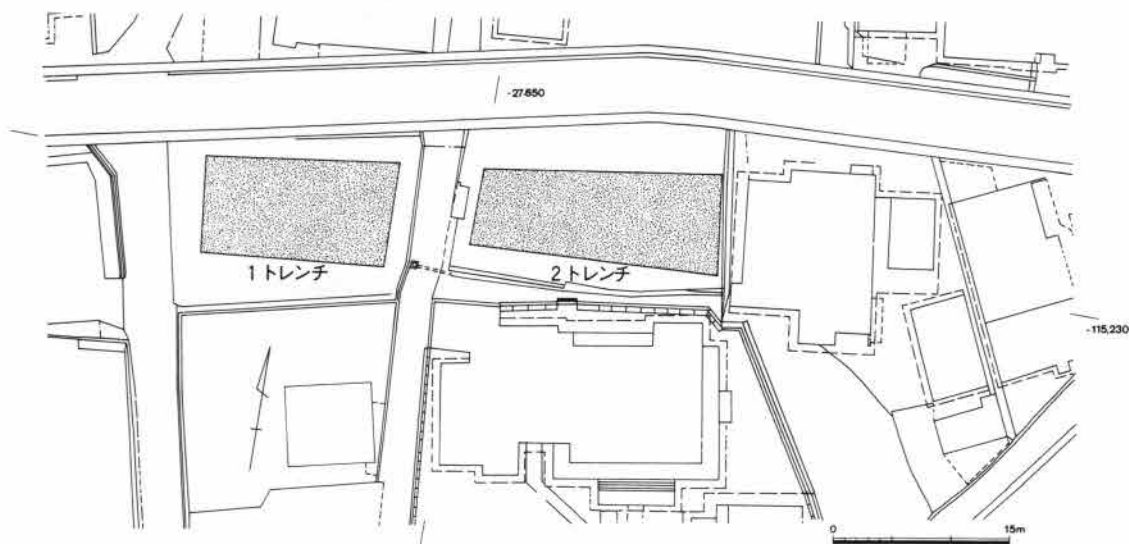
中海道遺跡では、これまで33次にわたって発掘調査が実施されている。過去の調査では、第1次調査^(注2)において、溝状遺構から弥生時代末期の良好な一括資料が得られており、この時からすでに近江系・東海系などの外来系土器の存在が指摘されている。また、第3次調査^(注3)では、完形の韓式系土器が出土しており、これは渡来人の存在を予想させるものである。今回の調査地点から北東へ150mほどの地点で実施された第32次調査^(注4)では、陸橋状に一部を掘り残した方形溝に区画された四面廂建物跡などが検出されており、これらは、庄内期における「周辺地域を統轄した首長の政治拠点の中枢施設」と解釈されている。当調査研究センターでも、今回の調査地から東へ約100mの地点で第17次調査^(注5)を実施しており、今回が2度目の調査に当たる。

3. 調査の概要

調査対象地は、東西に走る街路に沿った細長い形状をしており、直交する道によって分断される。そのため、トレンチを二つ設定し、西側を1トレンチ、東側を2トレンチとした(第34図)。

周辺地形は、西へと向かって上がる緩斜面をなし、調査地の現在の標高は29.8~31.5mを測る。

基本層序は、1トレンチでは現地表面下1m弱は盛り土層である。近代に宅地利用された際になされたと考えられ、その盛り土直下で中・近世の遺構面を検出した。さらに、その下、20~60cmほどの面で、遺跡地盤に掘り込まれた弥生時代後期の遺構面を検出した。また、2トレンチでは、現地表面から60~90cmほど下まで1トレンチと同様に盛り土層となり、その下で2~21(第37図)までの堆積を認めたが、遺物ならびに遺構の検出はほとんどできなかった。



第34図 調査トレンチ配置図

4. 検出遺構

a. 1 トレンチ下層(第35図)

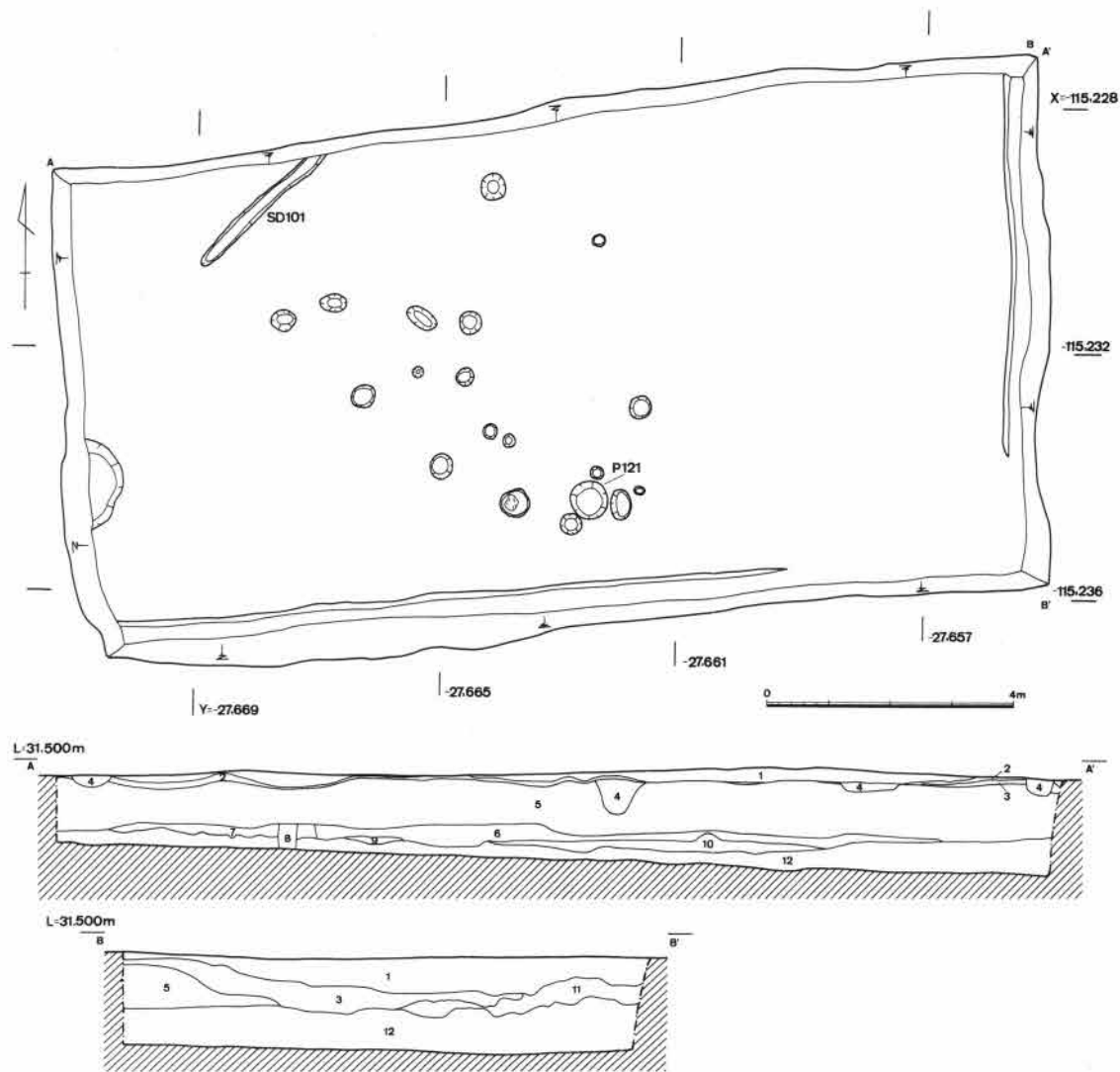
SD101は、北東から南西方向にのびる溝である。幅約25cm・深さ約5~10cmを測り、北東方向に向かってわずかに深くなる。弥生時代の遺構と考えられる。

P121は、中央部やや南寄りで検出された土坑である。直径約60cmの円形を呈し、深さ約30cmを測る。これも、弥生時代の遺構と考えられる。

b. 1 トレンチ上層(第36図)

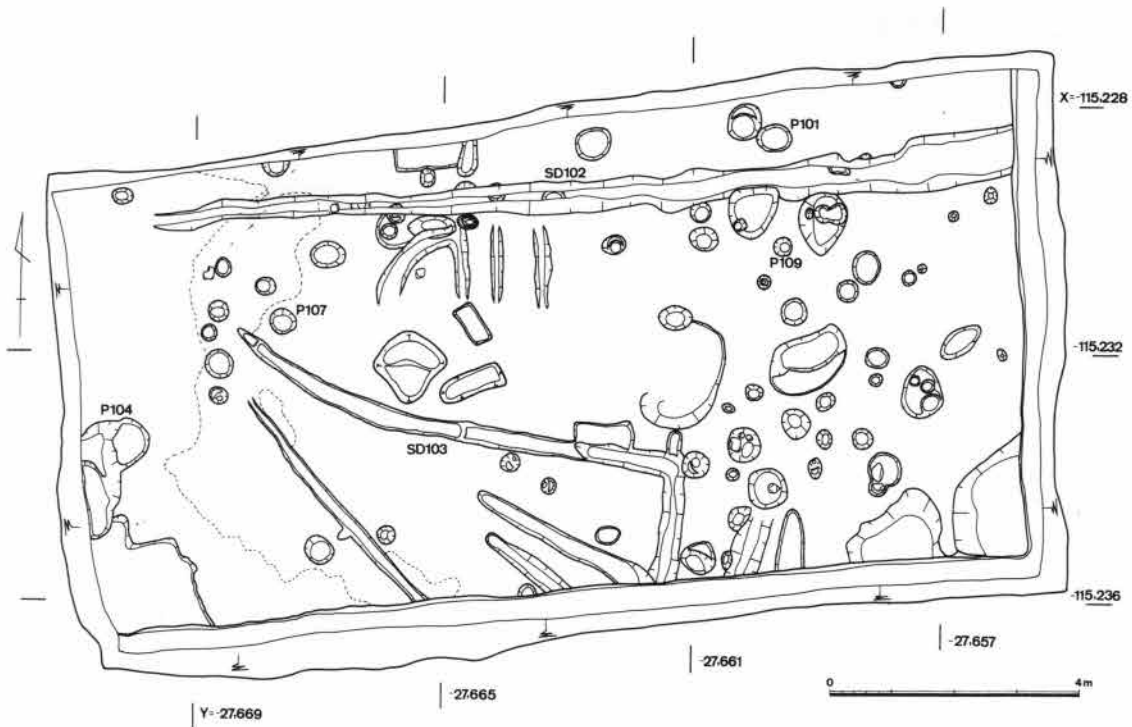
SD102は、北側を横断する形で検出した溝である。幅約20~80cm・深さ約5~20cmを測り、西から東へと傾斜しており、西端では消滅している。

SD103は、中央南寄りで検出した溝である。幅約15~40cm・深さ約3~30cmを測り、東西方向にのびた東端で南へとほぼ直角に曲がり、調査区外へと続く。近世の遺構と考えられる。



第35図 1 トレンチ遺構実測図(下層遺構)

- | | | | | |
|-----------|------------|---------|------------|------------------|
| 1. 黄色土 | 2. 黒褐色土 | 3. 暗褐色土 | 4. 攪乱 | 5. 暗褐色土 |
| 6. 暗赤褐色土 | 7. 明黄褐色砂質土 | 8. 暗褐色土 | 9. 明黄褐色砂質土 | 10. 明黄褐色砂質土(礫混入) |
| 11. 暗赤褐色土 | 12. 暗褐色砂質土 | | | |



第36図 1 トレンチ遺構実測図(上層遺構)

P101は、SD102の北側で検出した土坑である。長軸50cm・短軸40cmの楕円形を呈し、深さは約25cmを測る。中世の遺構と考えられる。

P104は、西壁際で検出した土坑である。一部が調査区外にかかるが、長軸1m以上・短軸80cmの楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。

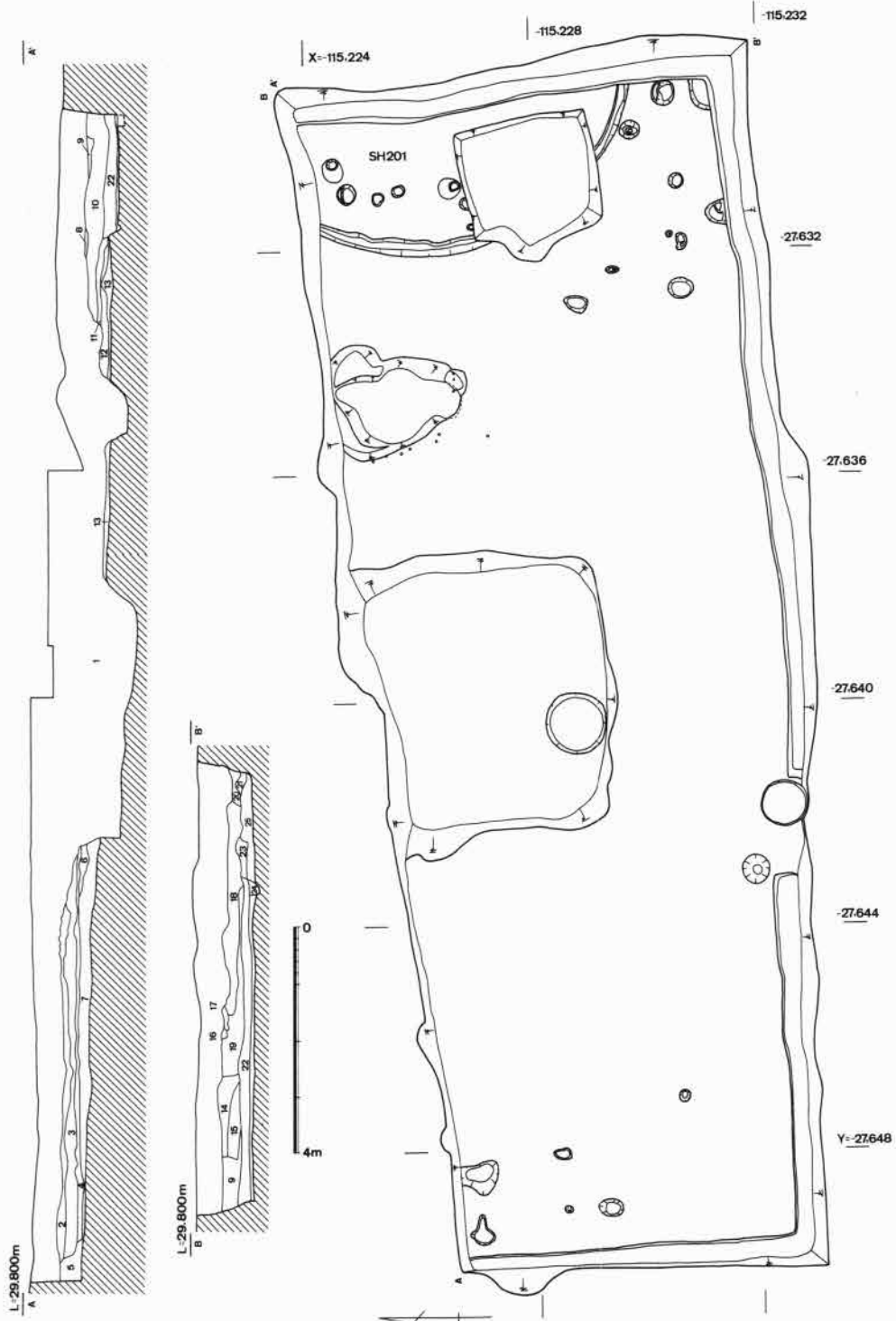
P107は、やや西に寄った、SD103の北側で検出した土坑である。直径40cmの円形を呈し、深さは約20cmを測る。

P109は、SD102の南側で検出した土坑である。直径30cmの円形を呈し、深さは約20cmを測る。

P101・104・107・109は、中世の遺構と考えられる。

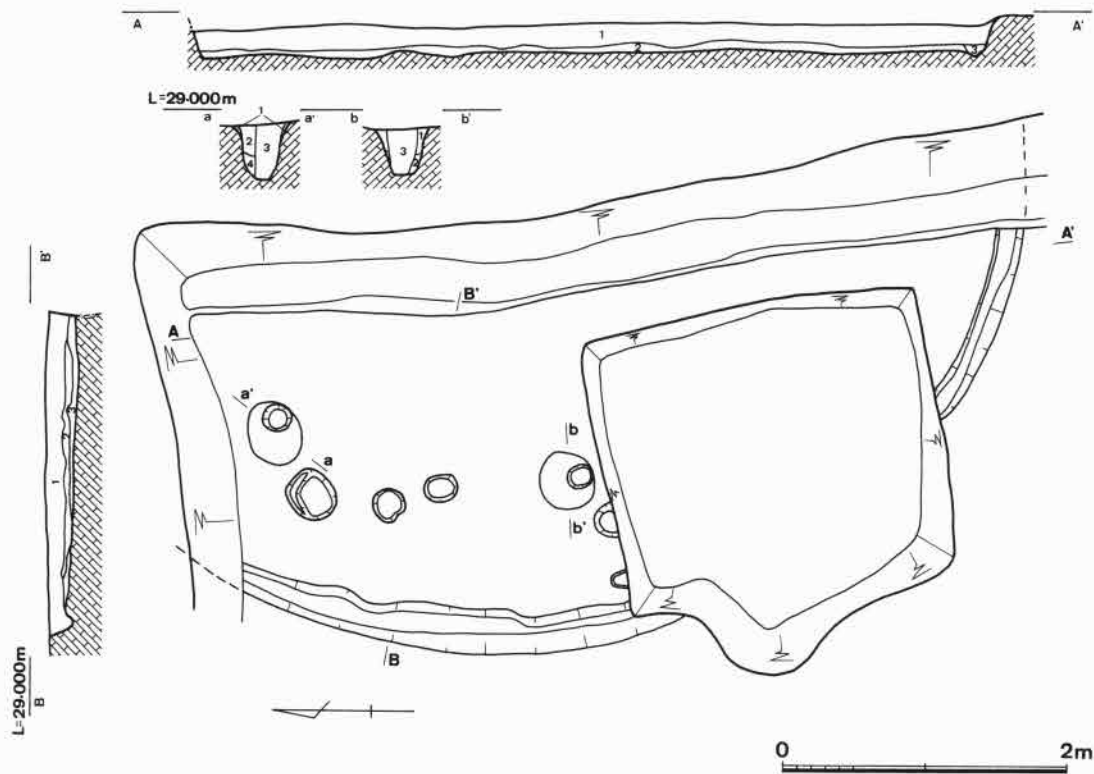
c. 2 トレンチ(第37図)

SH201は、東端部で検出した竪穴式住居跡である。検出地点は、調査対象地内で最も標高が低くなる地点であり、そのために削平を免れたと考えられる。調査区内には、全体の1/5がかかる程度であったが、直径8mの円形を呈すると推察される。南半部を攪乱によって大きく掘り込まれているが、検出面からは深さ約20cmを残し、周壁溝と柱穴2つを検出した。周壁溝は上面幅約15cm、床面からの深さ約5cmを測る。また、床面全体には貼り床と考えられる硬く締まった黄褐色土の堆積が認められた。柱穴の掘形は、直径約40cmの円形を呈し、深さは35~40cmを測る。柱材は、直径20cmと推測される。弥生時代の遺構と考えられる。



第37図 2トレンチ遺構実測図

- | | | | | |
|--------------------|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 盛り土・攪乱 | 2. 暗褐色土 | 3. 暗黄褐色土 | 4. 暗灰褐色土 | 5. 黒褐色土 |
| 6. 暗褐色砂質土 | 7. 明褐色土 | 8. 黒褐色土 | 9. 暗褐色土 | 10. 暗黄褐色土 |
| 11. 暗褐色土(礫混入) | 12. 暗灰褐色土 | 13. 明灰褐色土 | 14. 黒色砂質土 | 15. 暗褐色土 |
| 16. 暗灰色砂質土 | 17. 暗灰褐色砂質土 | 18. 暗褐色土 | 19. 暗褐色土 | 20. 灰褐色土 |
| 21. 黒褐色土 | 22. 明灰褐色土 | 23. 暗褐色土 | 24. 明黄褐色土 | |
| 25. 暗褐色土(黄色ブロック混入) | | | | |



第38図 竪穴式住居跡 S H 201実測図

A-A'、B-B' : 1. 暗褐色粘質土 2. 黄褐色粘質土 3. 暗褐色粘質土
 a-a'、b-b' : 1. 黄褐色粘質土 2. 暗褐色土 3. 黒褐色土 4. 暗褐色粘質土

5. 出土遺物(第39図)

a. 弥生土器(1~5)

1は、高杯であるが、脚柱部以下を欠損する。復原口径は23.4cmを測り、杯部上半が、やや内湾する。内面には横方向の、外面には斜め方向のナデを施す。S D101から出土した。

2は、甕である。口縁部付近のみであるが、復原口径16.4cmを測る。器表面の風化が激しく、調整は不明である。口縁部は受け口状を呈し、外面に刺突文を施す。S D101から出土した。

3は、小型の甕である。頸部から上のみ出土であるが、復原口径は12.2cmを測る。口縁部は、受け口状を呈し、外面に刺突文を施す。内外面ともに横方向にナデを施す。P 121から出土した。

4は、小型の壺である。頸部から上を欠損しており、底径3.2cm・最大径13.8cm・残存高11cmを測る。外面には、タテ方向に細かなミガキを施している。S H 201から出土した。

5は、小型の鉢である。復原口径12cm・器高11cm・底径3.2cmを測る。内外面ともに下2/3は左上方へと上がるハケ目調整が施され、外面肩部から内面頸部にかけては横方向にナデを施す。内面頸部下には指頭圧痕が残る。1トレンチ中央部にわずかに残った包含層からの出土である。

b. 土師器(6・9~12)

6は、小型の甕である。底部を欠損しており、復原口径は15cmを測る。口頸部はわずかに外傾しながら直立し、端部は丸く納めている。口頸部は、内外面ともに横方向のナデ、体部は風化が

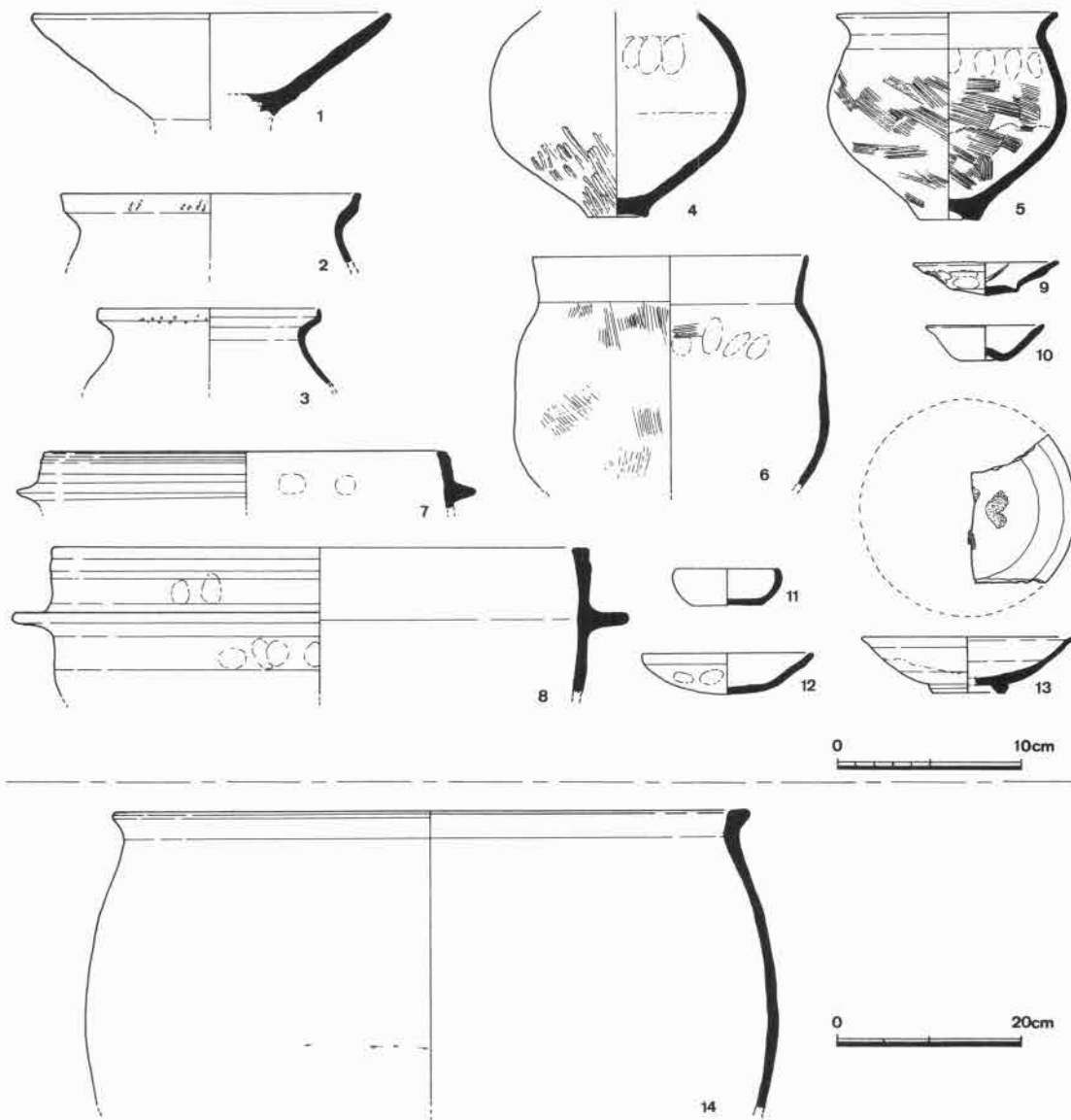
激しくはっきりとはしないが、外面にはハケ目、内面には一部に指頭圧痕が残る。S D102から出土した。

9は、皿である。口径8.1cm・器高1.9cmを測る。ほぼ完形である。粗い作りで、内面及び外面上半は横方向にナデており、体部下半には強く指頭圧痕が残る。P109から出土した。

10は、小型の皿である。口径6.5cm・器高1.6cmを測るが、一部を欠損している。底面が内側へと突出する。P101から出土した。

11は、小型の皿である。口径5.4cm・器高2cmを測る。ヘラ切りによる平底を呈し、口縁部にむかって内湾している。内外面に煤の付着が見られる。S D103から出土した。

12は、皿である。口径9.2cm・器高2.2cmを測り、ほぼ完形である。内面と口縁部外面にはナデを施しており、外面には指頭圧痕が残る。S D103から出土した。



第39図 出土遺物実測図

c. 瓦質土器(7・8)

7は、羽釜である。復原口径は22cmを測り、内外面ともに黒色を呈する。鏝は、小さく三角形を呈し、口縁部は上端でやや内湾している。P104から出土した。

8は、羽釜である。復原口径は29.4cmを測り、外面のみが黒色を呈する。P107から出土した。

d. その他(13・14)

13は、磁器の皿である。削り出しの高台を有し、口径11.8cm・器高3cm・高台径4cmを測る。外面下半には釉を施さない。唐津系と考えられる。SD103から出土した。

14は、大型の甕である。瓦質であり、復原口径は70cmを測る。SD103から出土した。

6. 小 結

今回の調査によって、弥生時代、中世、近世の遺構、ならびに遺物を検出した。出土した遺物の総量は、整理箱に2箱ほどであったが、図化し得たのは14点のみであった。

近世の遺構は、SD103である。埋土には卵大から拳大の礫が混じっていた。調査区外へとのびるため、全容は不明であるが、宅地に伴う区画溝の類いと考えられる。

中世の遺構は、東西方向にのびるSD102と、P101・104・107・109の4基のピットである。SD102出土の小型の甕は、時期的にさかのぼるものと考えられるが、溝底付近から瓦器片が出土しており、遺構の時期はここまで下がるものと考えられる。また、P101出土の皿はいわゆる「ヘソ皿」で、14～15世紀のものと考えられ、P109の出土遺物は16世紀頃に比定できる。P104・P107出土の瓦質の羽釜も、ほぼこの時期幅の中で考えて差し支えないであろう。

弥生時代の遺構は、SD101・P121・SH201である。SD101は、残存状況は良好と言えず、出土遺物も少なかったものの、口縁部が受け口状を呈する近江系の甕が含まれており、P121からも同様に近江系の甕が出土した。これらは、中海道遺跡において、全出土土器中に占める近江系をも含めた外来系土器の比率が高いという性格を補強する資料である。また、SH201は、円形を呈するものの、弥生時代後期の遺物が出土している。この時期の竪穴式住居跡は、方形と円形のもの併存していたと考えられるが、今後の調査による類例の増加を待ちたい。

また、調査最終段階において、縄文時代晩期の遺物を検出すべく遺跡地盤の部分的な掘り下げを行ったが、この時期の遺物は確認できなかった。

(奈良康正)

注1 山田一郎、松原一哉、小島浩之、山田恵子、福島正和、小原志奈子、荻野富紗子、井上 聡(順不同)

注2 金村允人・高橋美久二・森 毅「中海道遺跡発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集 向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1979

注3 國下多美樹・中塚 良「中海道遺跡(第2・3・4・6次)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集 向日市教育委員会) 1984

注4 『中海道遺跡第32次』現地説明会資料 (財)向日市埋蔵文化財センター 1995 から

注5 中川和哉「中海道遺跡第17次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

5. 長岡京跡右京第498次発掘調査概要

(7ANKNZ-8地区)

1. はじめに

今回の調査地は、京都府長岡京市天神1丁目に所在する。推定長岡京跡右京六条三坊六・七・八町(旧右京五条三坊五・六町、六条三坊八町)に位置する。また、六条条間小路(旧五条大路)及び六条条間北小路(旧五条条間南小路)が含まれる。

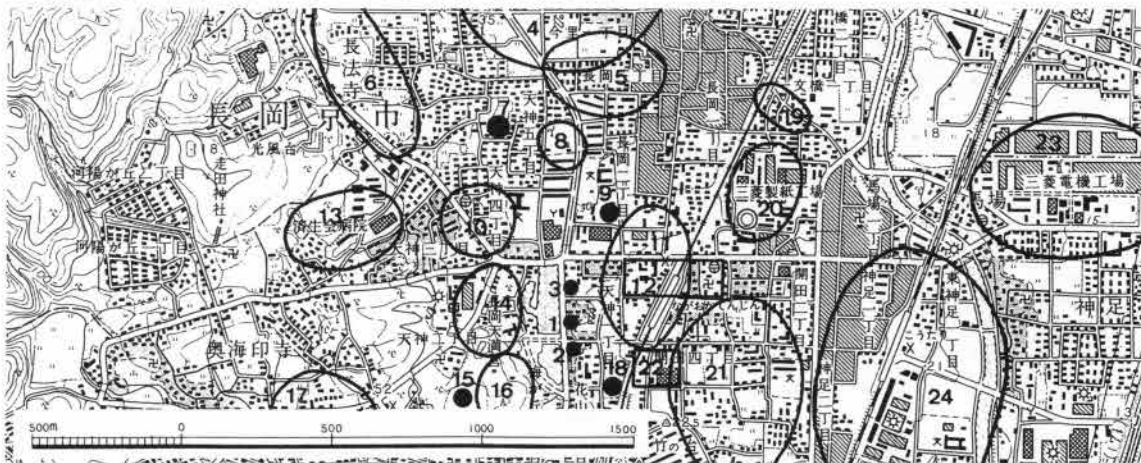
今回の調査は、石見下海印寺線広域幹線アクセス街路整備工事に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。この事業に伴う調査は、過去数年度にわたって断続的に予定路線上で実施している。なお、今回の調査に係わる経費は、全額京都府乙訓土木事務所が負担した。

調査にあたって、京都府教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、(財)向日市埋蔵文化財センター、大山崎町教育委員会などの関係諸機関からご協力いただいた。また、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏には現地でご指導いただいた。感謝申し上げたい。調査作業においては、^(注1)周辺地域在住の有志の方々及び各大学の学生の方々に協力していただいた。重ねて感謝したい。

調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美、同主任調査員引原茂治、同調査員奈良康正である。調査面積は、約610m²である。

2. 位置と環境

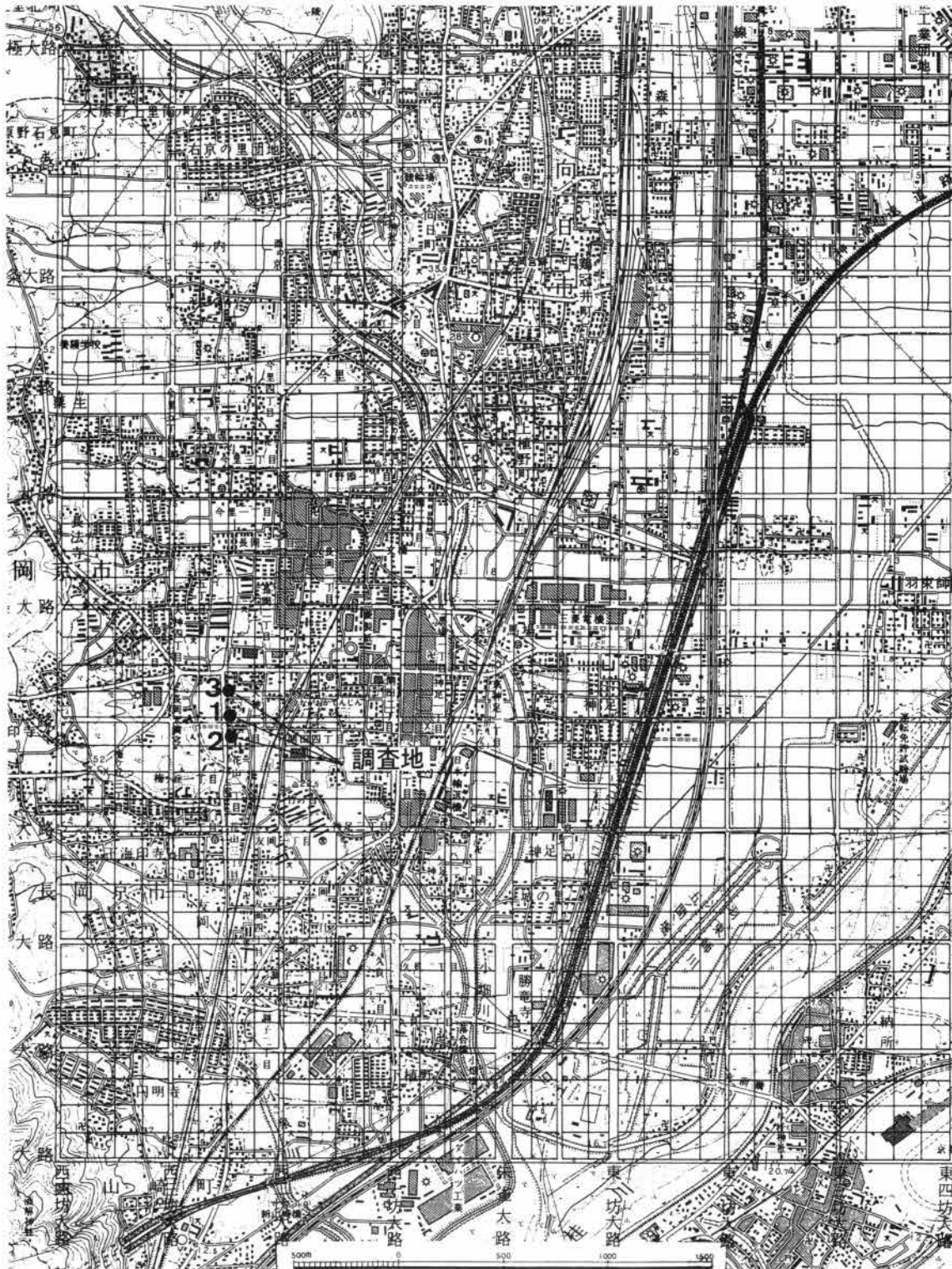
長岡京跡は、京都市、向日市、長岡京市、大山崎町の3市1町にわたる広がりをもっており、



第40図 周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-------------|------------|
| 1・2・3. 調査地 | 4. 今里遺跡 | 5. 陶器町遺跡 | 6. 長法寺遺跡 | 7. 今里大塚古墳 |
| 8. 宇津久志古墳群 | 9. 小池下遺跡 | 10. 東代遺跡 | 11. 開田城ノ内遺跡 | 12. 開田城跡 |
| 13. 谷田瓦窯跡群 | 14. 西陣町遺跡 | 15. 天神山古墳 | 16. 天神山遺跡 | 17. 下海印寺遺跡 |
| 18. 十三遺跡 | 19. 明星野遺跡 | 20. 開田古墳群 | 21. 開田遺跡 | 22. 和泉殿跡 |
| 23. 馬場遺跡 | 24. 神足遺跡 | | | |

今回の調査は、右京での第498次調査にあたる。調査対象地周辺では、東側においては、一括投棄された炉壁集積遺構が検出された右京第109次調査^(注2)や、密集した炉跡が検出された右京第441・447次調査^(注3)が行われており、大規模な官営鑄造工房の存在が想定されており、同時に弥生時代後期から古墳時代にわたる集落跡も検出されている。また、弥生時代から中世にかけての集落跡で



第41図 調査地位置図(1/25,000)

ある開田城ノ内遺跡や中世城館跡である開田城跡がある。

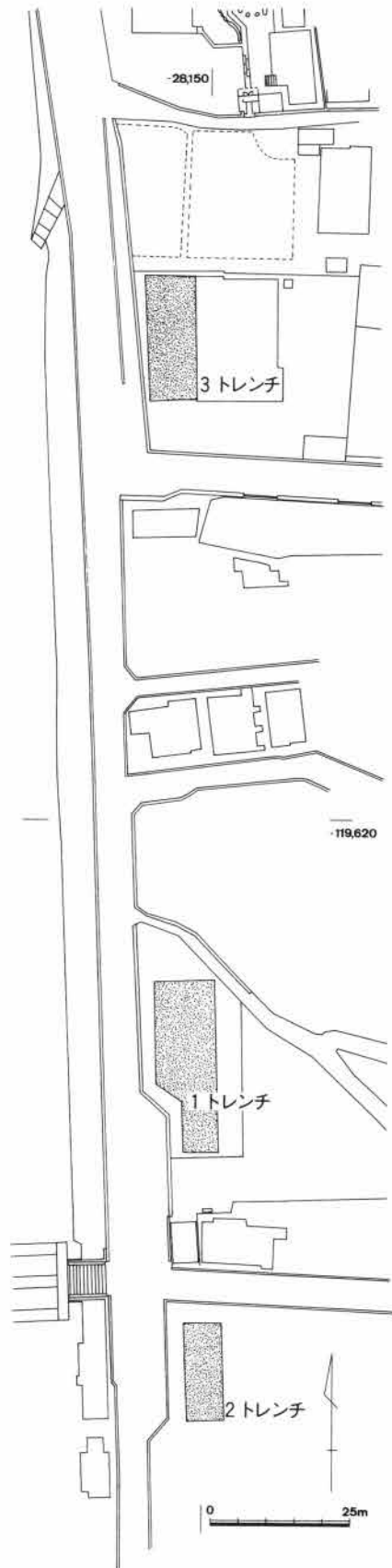
西側には、平安時代の墳墓が確認された西陣町遺跡がある。南側には縄文後・晩期の土器が出土した十三遺跡(右京第203次調査^(注4))が広がり、北方にはナイフ形石器が採取された小池下遺跡^(注5)が所在する。

当調査研究センターでも、これまで数次にわたって府道の整備事業に伴う発掘調査を実施しており、1トレンチの北側には右京第440次調査^(注6)の3トレンチがある。また、2トレンチの南側には右京第474次調査^(注7)の2トレンチが、そして、3トレンチの北側には右京第411次調査^(注8)のCトレンチ、南側には右京第440次調査^(注9)の1トレンチがそれぞれ位置している。

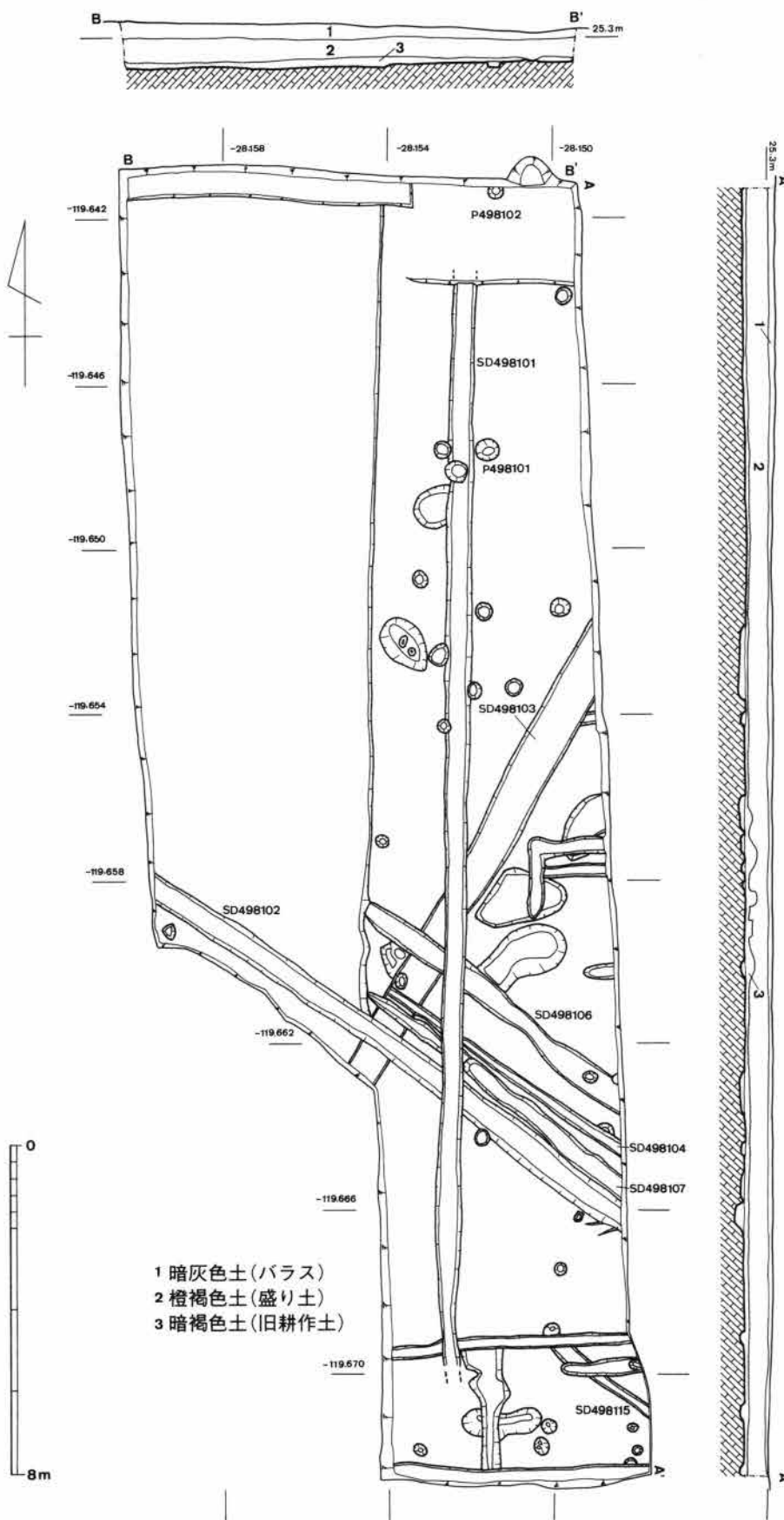
3. 調査経過

今年度の調査は、平成7年6月5日から開始した。調査地は、府道石見下海印寺線と開田神足線の交差点東側、開田神足線を挟んで南北に位置する。北側を1トレンチ、南側を2トレンチと呼称する。まず、重機掘削により盛り土及び旧耕土を除去し、その後人手で精査・遺構掘削を行った。1トレンチでは古墳時代前期の溝状遺構などを、2トレンチでは長岡京期の掘立柱建物跡などを検出した。また両トレンチの間には六条条間小路(旧五条大路)が想定されており、その側溝などの検出にも努めたが、調査範囲内には存在しなかった。この部分の調査は、8月11日に終了した。なお、7月25日に関係者説明会を行った。

その後、予定路線上のファミリーレストランが移転したため、追加調査の依頼を受け、11月6日から調査を再開した。調査地は、1トレンチの北側約90mに位置する。3トレンチと呼称する。重機掘削の後、人手で精査・遺構掘削を行った。このトレンチでは、主に中世の井戸・掘立柱建物跡などの遺構を検出した。トレンチ南側には六条条間北小路(旧五条条間南小路)が想定されているが、調査範囲内には存在しなかった。そのほか、長岡京に関連する遺構はほとんど検出されず、長岡京廃都後に削平されたと考えられる。この調査は、12月22日に終了した。



第42図 調査トレンチ配置図



第43図 1トレンチ遺構実測図

4. 検出遺構

今回の調査では、古墳時代前期から中世にかけての遺構を検出した。遺構の分布状況はあまり密ではない。また、後世の削平などのためか、断片的なものが多い。

(1) 1トレンチ

層序は、盛り土及び旧耕土の下が地山となる。かなり削平を受けていると考えられ、遺構は、地山面から検出した。

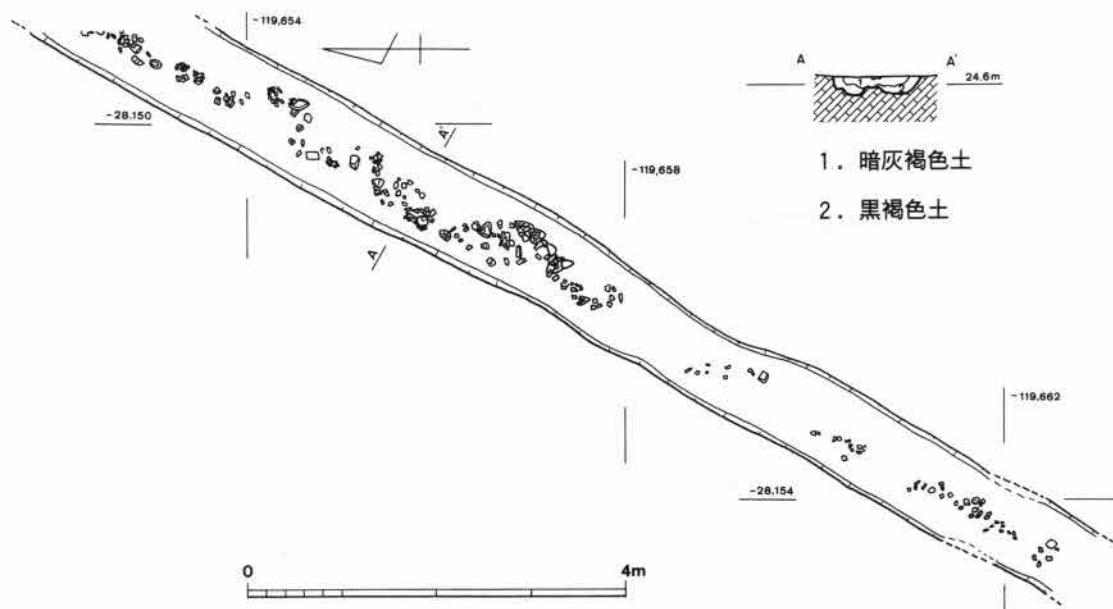
溝 S D 498101 調査地を南北に縦貫しており、幅約60cm・深さ約12cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、東壁はゆるやかに、西壁はやや急激な立ち上がりを呈する。肥前系染付磁器片などが出土しており、近世以降の溝と考えられる。

溝 S D 498102 北西から南東方向にのびている。幅約50～80cm・深さ約4～20cmを測り、北西方向に向かって徐々に浅くなる。遺物はほとんど出土せず、遺構の時期は不明であるが、溝中央部やや東寄りです D 498101 に切られている。

溝 S D 498103 北東から南西方向にのびている。幅約0.8～1m・深さ約7～15cmを測り、南西方向に向かって徐々に深くなる。南に寄った地点で S D 498101、498102、498104、498106、498107 に切られており、今回検出した遺構のうちで最も古いものと考えられる。底面は凹凸が激しく、多数の土器が出土した。古墳時代の溝と考えられるが、須恵器は含まれていなかった。また、埋土中からナイフ形石器が出土した。

溝 S D 498104 北西から南東方向へのびており、S D 498102 とほぼ平行している。幅約30cm・深さ約5cmを測り、北西方向へ向かって浅くなる。S D 498101 に切られた後、S D 498103 を切って横断し、その先で消滅する。

溝 S D 498106 北西から南東方向へのびており、S D 498104 と平行する。幅約60cm・深さ約3cmを測り、東西方向へ向かってわずかではあるが浅くなる。また、標高が5cmほど低くなる調査



第44図 S D 498103実測図

地西半では、削平されたと考えられ、その延長は検出できなかった。

溝 S D 498107 北西から南東方向へのびており、幅約40cm・深さ約2～10cmを測る。南東方向に向かって徐々に深くなり、S D 498101と交差する付近で一段深くなる。また、南東端部では S D 498102に南肩を切られている。

溝 S D 498115 北西から南東方向へのびており、幅約20cm・深さ約4cmを測るが、残存状況が悪く、北西方向へ3mほどの地点で消滅する。北側約4mのS D 498102と平行する。

ピット P 498101 S D 498101の東側に接する状況で検出した。長軸60cm・短軸50cmの楕円形を呈し、深さは約15cmを測る。

ピット P 498102 調査地北東隅で検出した。直径約30cmの円形を呈し、深さは約10cmを測る。口縁を上に向けた状態で土師皿が出土した。

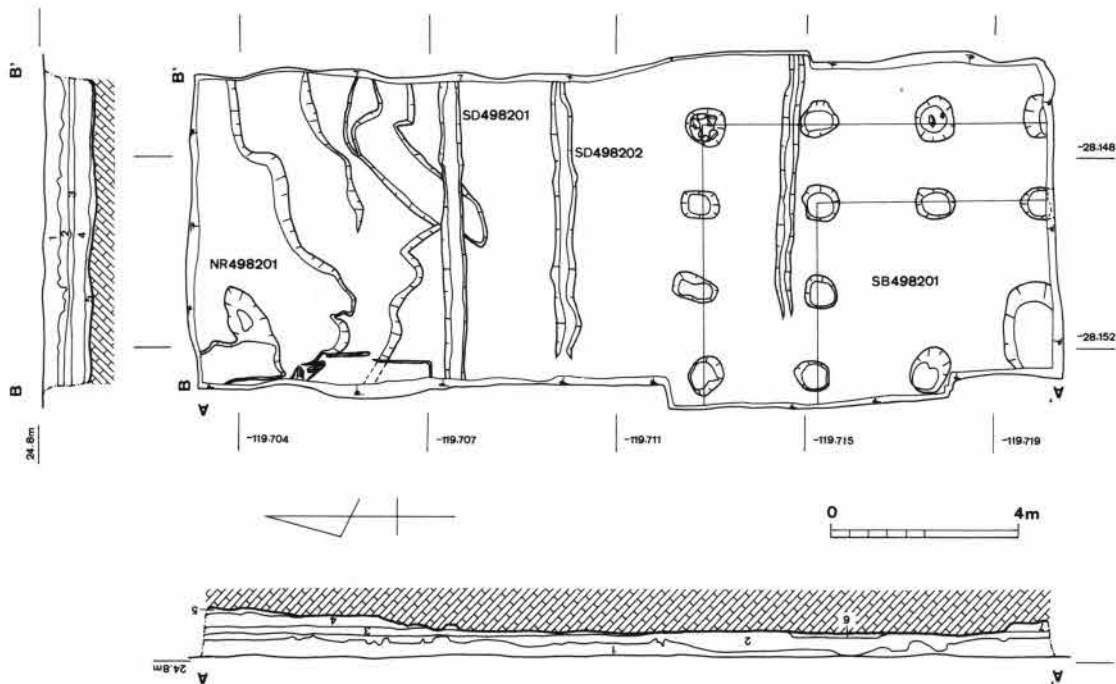
(2) 2 トレンチ

層序は、盛り土及び旧耕土の下に固く締まった薄い礫層がある。この礫層からは瓦器の小片などが出土しており、中世頃の整地層と考えられる。その下層が地山となる。

溝 S D 498201 東西方向に調査地を横断し、幅約40cm・深さ約10cmを測る。東端から土師皿が出土している。

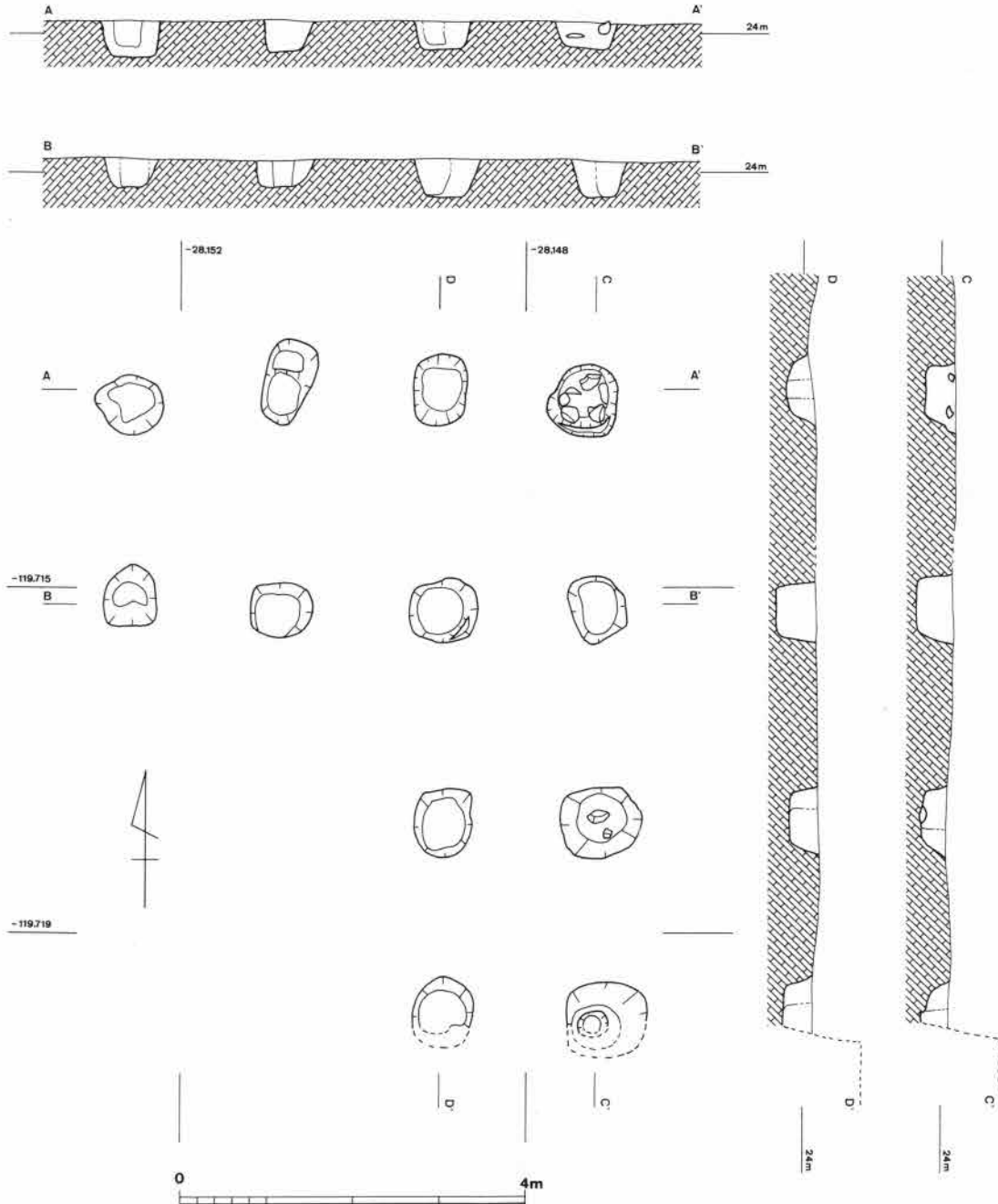
溝 S D 498202 東西方向に調査地を横断する。S D 498201とほぼ同規模で、幅約40cm・深さ約10cmを測る。中央やや東寄りの地点から、長岡京期の土師器高杯が出土した。

自然流路 N R 498201 調査地北側で検出した。北に向かってゆるやかに落ち込んでおり、砂質土、粘質土が堆積している。埋土から古墳時代後期～長岡京期の遺物が出土した。



第45図 2 トレンチ遺構実測図

- | | | | |
|--------------|---------------|------------|-----------|
| 1. 橙褐色土(盛り土) | 2. 暗褐色土(旧耕作土) | 3. 明灰褐色砂質土 | 4. 黒褐色粘質土 |
| 5. 暗灰褐色砂質土 | 6. 灰褐色砂質土 | | |



第46図 S B 498201実測図

掘立柱建物跡 S B 498201 調査地南半部で検出した。建物跡の西及び南側は調査地外へ展開するものとみられ、全体の規模は不明である。身舎は2間×2間以上とみられ、少なくとも北・東面には廂を持つ。柱の心々間隔は、東西が1.8m(6尺)、南北が2.4m(8尺)を測る。柱の掘形は、ほぼ隅丸方形を呈し、一辺は約60~80cmを測る。検出面からの深さは約30~50cmである。

(3) 3 トレンチ

層序は、厚さ約60~70cmの盛り土下に旧耕土があり、その下が地山になる。部分的に地山上に礫層が薄く残っている部分がある。かなり削平を受けていると考えられ、ほとんどの遺構は地山面から検出した。

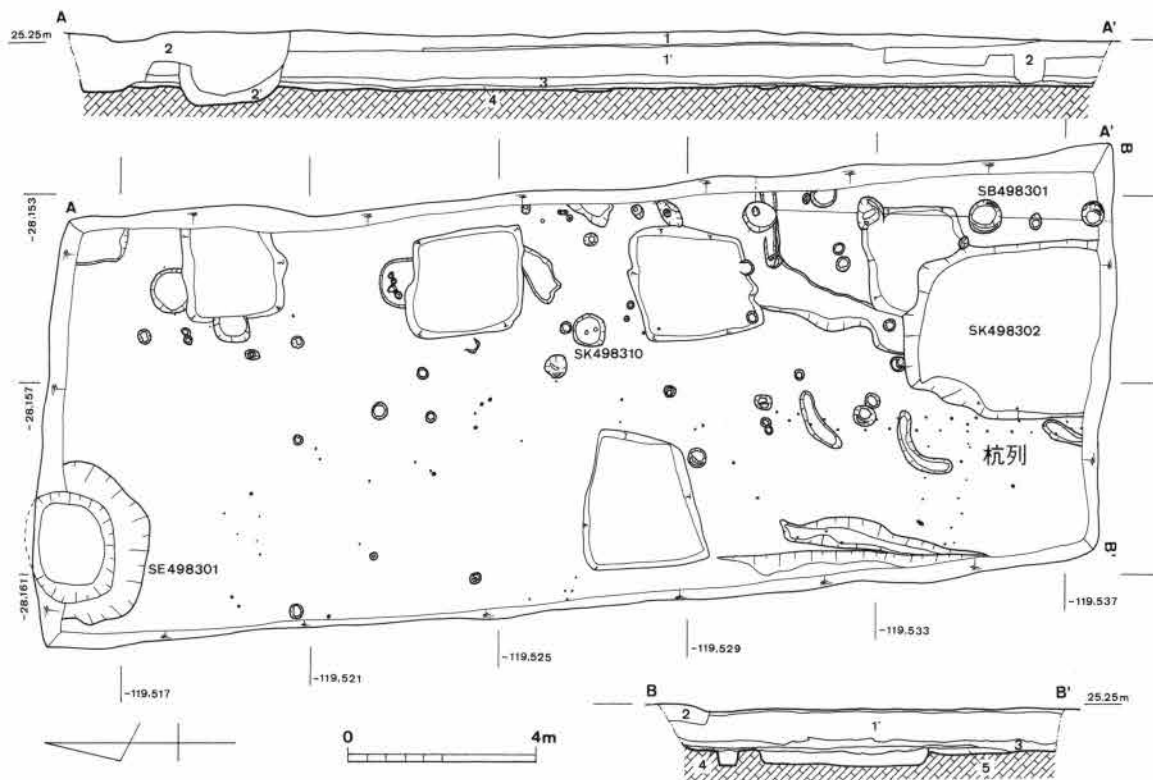
土坑 S K 498310 調査地のほぼ中央で検出した。直径約40cmの円形土坑である。11世紀後半頃の土師皿などが出土した。

井戸 S E 498301 調査地の北西隅で検出した。掘形は、検出面では直径約3.4mの円形状を呈するが、深さ約0.5mで1.8m×2.2mの長方形になる。深さは約3mである。井戸枠などは残っていなかった。埋土から、瓦器椀・土師皿・剣頭文軒平瓦などが出土した。これらの遺物は、ほぼ13世紀中葉頃のものと思われる。なお、埋土の堆積状況については、掘削途中で崩落したため、詳細は不明である。

掘立柱建物跡 S B 498301 調査地南東隅で検出した。南北方向に4個の柱穴が並ぶ。柱間は約2.4mである。この建物跡は、調査地の東及び南側に展開すると考えられ、全容は不明である。柱穴から、中世のものと考えられる須恵質甕の小片が出土した。

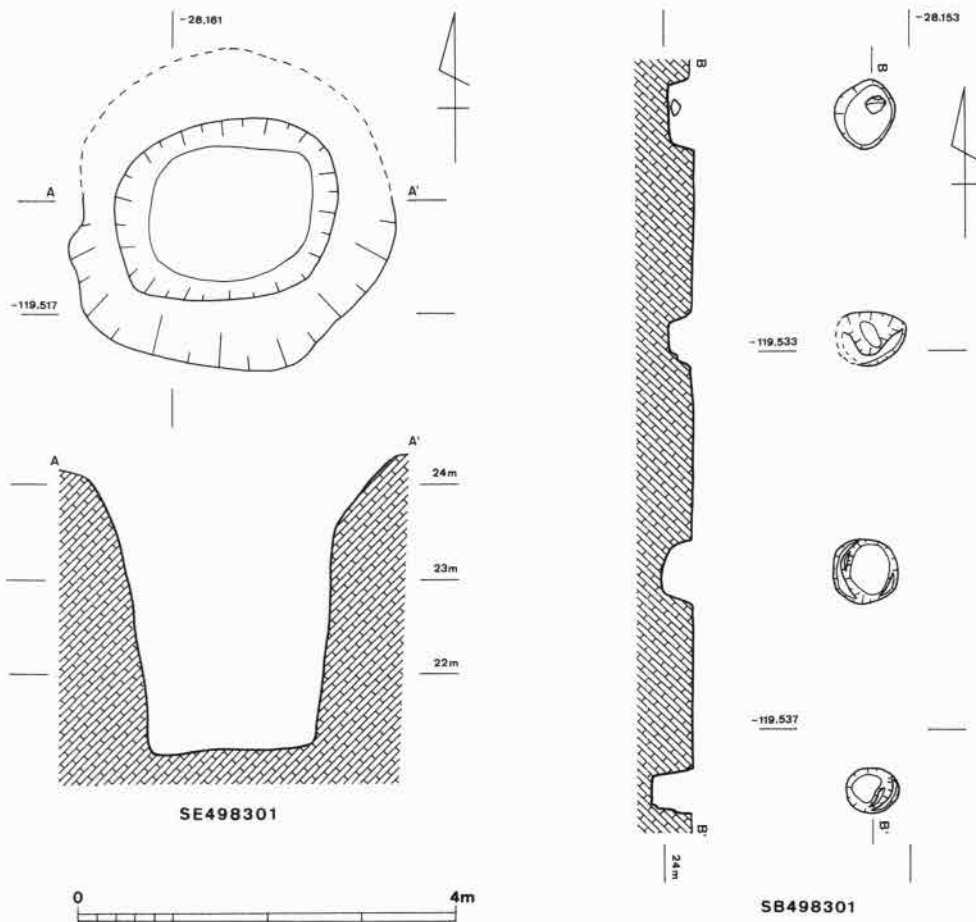
杭列 調査地南側で検出した。南北方向と東西方向のものがある。南北方向のものは、2列の杭列が約30cm間隔でほぼ平行する。東西方向のものも、2列の杭列が約70cm間隔でほぼ平行し、東側で南北方向のものと交差する。南北方向のものは、掘立柱建物跡とほぼ方向がそろっており、同時期の可能性も考えられる。

このトレンチで検出した遺構は、ほとんど中世に属すると考えられる。長岡京期の遺構については、廃都後の改変などにより削平されて残存していないとみられる。なお、1トレンチでナイフ形石器が出土したため、グリッド状に地山を掘削したが、旧石器時代に関連する遺物などは出土しなかった。



第47図 3トレンチ遺構実測図

1・1'. 橙褐色土(盛り土) 2. 攪乱 3. 暗褐色土 4. 暗赤褐色土 5. 明赤褐色土



第48図 S E498301・S B498301実測図

5. 出土遺物

今回の調査では、旧石器時代から中世に至る時期の遺物が出土した。1トレンチでは主として古墳時代前期・長岡京期の遺物及びナイフ形石器、2トレンチでは古墳時代後期・長岡京期を中心とする遺物、3トレンチでは中世の遺物が出土している。

(1) 1トレンチ出土遺物

a. 溝S D498103出土遺物

土師器甕1～4は、いずれも頸部から上のみの破片である。口縁端部をつまみ出しにより肥厚させる典型的な布留甕である。1は、口径16cmを測り、他のものに比べてやや大型である。2は口径15cm、3は口径12.4cm、4は口径13cmを測る。3のみ内湾せず、直線的にのび上がっている。

土師器壺5は、底部のみの破片である。平底を呈し、底径は5cmを測る。土師器高杯6は、風化が著しく調整も不明である。残存高は3.8cm、脚底径は6.2cmである。

石器13は、国府型のナイフ形石器である。いわゆる後期旧石器に属するであろう。

b. ピットP 498101出土遺物

須恵器壺9は、小形で、貼り付け高台を持つ。高台径は3.8cmである。須恵器壺10は、平底で肩の張ったものである。底径は11.7cmである。

土馬8は、胴部から頸部にかけての一部分とみられる。軒平瓦11は、均整唐草文瓦で、顎を持つ。焼成は不良で、断面は淡褐色を呈する。

c. その他の遺物

須恵器椀7は、削り出し高台で、見込みに陰刻花文を施す。溝S D498101出土である。土師器皿12は、剝落のため調整は不明である。口径16cm・器高2.4cmを測る。ピットP498102からの出土である。

(2) 2 トレンチ出土遺物

a. 自然流路N R498201出土遺物

須恵器杯蓋14～18は、天井部から口縁部が丸味を持って下るもので、稜はほとんどなくなる。口縁端部は丸く終わり、口径も小さくなる傾向がみられる。陶邑編年のⅡ期、TK209期に併行するとみられる。14は口径14cm・器高3.8cm、15は口径12.8cm・器高3.8cm、16は口径12.2cm・器高3.6cm、17は口径12.3cm・器高3.8cm、18は口径11.1cm・器高2.9cmを測る。

須恵器杯身19～23は、口縁部の立ち上がりが低く、口径も小さくなる傾向がみられる。年代観は、杯蓋と同様と考えられる。19は口径14.2cm・器高3.8cm、20は口径13.5cm・器高4.1cm、21は口径14cm・器高3.5cm、22は口径13.4cm・器高3.5cm、23は口径11.3cm・器高3.4cmを測る。

須恵器高杯25～27は、低脚のものである。杯部の形状は、杯蓋とほぼ同様である。25は口径13.2cm・脚径7cm・器高5.7cm、26は脚径8.7cm、27は脚径7.6cmを測る。須恵器甕24は、肩部から上の部分のみで、口径は18cmを測る。

須恵器杯28は、高台をもたないもので、口径12.4cm・器高3.6cmを測る。

土師器皿30は、外面下半部から底部にかけてヘラケズリ調整される。口径15.9cm・器高2.8cmを測る。

緑釉陶器32は、削り出しの玉璧高台をもち、内外面ともに施釉する。器胎は軟質である。高台径8.6cmを測る。

b. その他の遺物

土師器皿29は、外面下半部から底部にかけてヘラケズリ調整される。口径15.6cm・器高2.7cmを測る。溝S D498201から出土した。

土師器高杯31は、脚柱が7面に面取りされる。脚径12cmを測る。溝S D498202から出土した。

(3) 3 トレンチ出土遺物

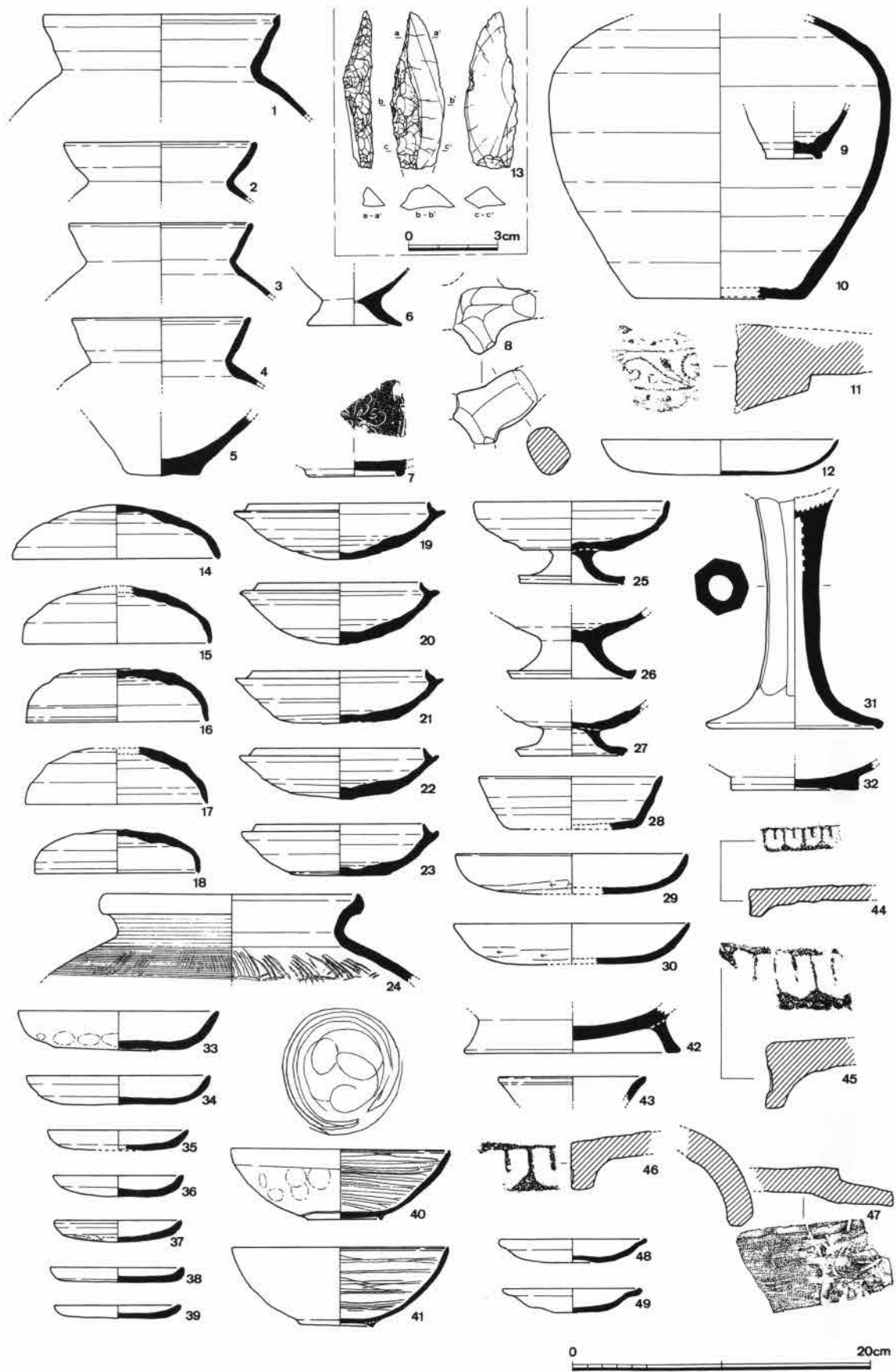
a. 井戸S E498301出土遺物

土師皿33・34は、底部から口縁部が丸みをもって立ち上がり、口径はほぼ12～13cmである。内面及び外面口縁端部をナデ調整する。

土師皿35～37は、形態・調整は上記と同様である。口径はやや小さく、9cm前後である。

土師皿38・39は、平たい底部から口縁部がわずかに立ち上がる扁平な形態である。口径はほぼ9cm前後である。

瓦器椀40・41は、内面にまばらなミガキが施される。外面にはミガキはみられない。内面口縁



第49図 出土遺物実測図

端部に沈線がめぐる。口径は14.6～14.8cmである。

須恵器42は、葉壺の底部か。やや古い時期の遺物とも考えられる。青磁皿43は、口縁端部が外反するが、小片のため詳細は不明である。口径は約10cm前後と考えられる。

軒平瓦44～46は、剣頭文を持ち、折り曲げ技法で瓦当を作る。44は、小形で、厨子などに使用された特殊なものとも考えられる。丸瓦47は、内面に布目が残る。端部はすすどく面取りされる。

b. 土坑 S K 498310出土遺物

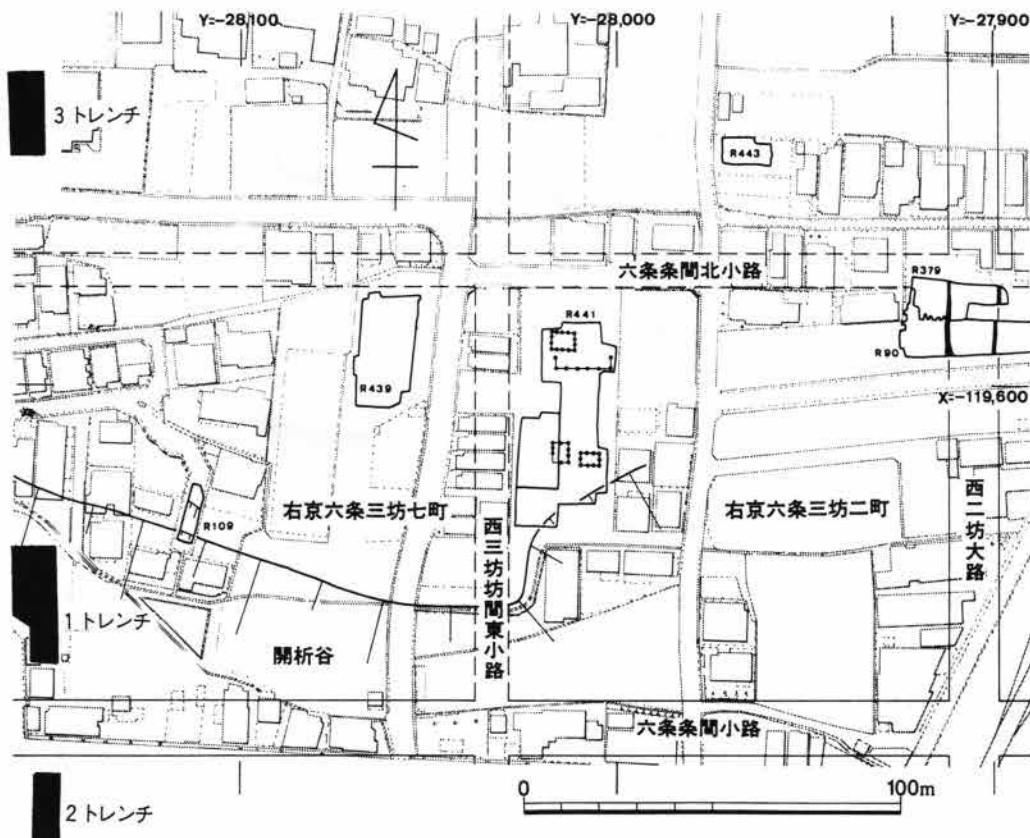
土師皿48・49は、口縁部が屈曲するもので、端部を丸く折り返す。いわゆる「て」の字状口縁の皿で、口径は9.5cm前後である。11世紀後半頃のものと考えられる。

6. 小 結

今回の調査では、調査範囲や後世の削平などの関係上、長岡京の条坊に関係すると考えられる遺構は確認できなかった。

今回検出した長岡京関連の遺構としては、2トレンチの掘立柱建物跡 S B 498201があり、この北側約3mの地点で検出した東西方向の溝 S D 498202からは、長岡京期の遺物が出土した。この2者は、平行の位置関係にあることから、S D 498202は S B 498201に関連する施設と考えられる。

このトレンチの南側に隣接する右京第474次調査の2トレンチでも同時期と考えられる建物跡



第50図 条坊及び周辺調査地関連図
注3 文献挿図に加筆

を検出している。この建物跡は、柱穴内に礎板がある総柱建物で、倉庫と考えられている。今回検出した建物跡は、廂付きの建物であり、柱穴内に礎板は持たない。それぞれ、機能は異なる建物であったと見られるが、位置的には同一宅地内の建物と考えられる。

1 トレンチで検出した南西方向に直線的にのびる溝 S D498103からは、主として布留式併行期の遺物が出土している。同時に第 V 様式と考えられる弥生土器がいっしょに出土しているが、須恵器は一点も出土しなかった。このことから、この溝は、古墳時代前期を中心とする時期に機能していたと考えられる。検出面からの深さは10cm前後と残りも悪く、周囲に関連する遺構が見られないことから、その性格は不明である。

このトレンチの北東側約100mの地点で行われた右京第439次調査では、弥生時代後期の溝と掘立柱建物跡が検出されている。これらは、どちらも北東から南西へと主軸が通り、溝 S D498103 とほぼ同じ傾きを呈する。東側約200mの地点で行われた右京第441・447次調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡 1 基、古墳時代前期のものが 6 基と、後期のもの 1 基が検出されており、集落を形成していたと考えられる。今回の調査で検出した溝 S D498103は、これらに関連すると考えられる。

3 トレンチでは、主として中世の遺構を検出した。このトレンチの南北に隣接する地点でも中世の遺構が確認されており、中世集落の一端を示すといえよう。今回の調査では、剣頭文軒平瓦が出土した。右京第411次調査でも剣頭文軒平瓦が出土しているが、どのようなところに使用されたかについては不明である。右京第440次調査では中世墓が検出されており、屋敷墓の可能性が指摘されている。今回は、厨子などに使用された可能性も考えられる小形の軒平瓦も出土しており、周辺に寺院もしくは有力者の屋敷地に伴う持仏堂などがあったことも予想される。

今回の調査では、製鉄に関連すると考えられる遺構・遺物は検出されなかった。

なお、今回出土したナイフ形石器は、乙訓地域における数少ない旧石器資料に重要な一例を加えたといえる。

(引原茂治・奈良康正)

注 1 調査参加者

赤司 紫・荻野富紗子・小原志奈子・勝山紀子・可児直典・國重佐夜子・小島浩之・小玉 亨・寺尾貴美子・西川悦子・福島正和・松原一哉・丸谷はま子・山田一郎・山田恵子

注 2 小田桐淳「右京第109次(7ANKNZ地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983

注 3 小田桐淳「長岡京跡右京第447次(7ANKNZ-6地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第32冊長岡京市教育委員会) 1994

注 4 木村泰彦・奥村暁美「右京第203次(7ANKJS地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987

注 5 中尾秀正「昭和52～55年度長岡京市内立会調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第12冊長岡京市教育委員会) 1984

- 注6 石尾政信「長岡京跡右京第440次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注7 野島 永「長岡京跡右京第474次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注8 石尾政信「長岡京跡右京第411次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注9 注6に同じ。
- 注10 注7に同じ。
- 注11 原 秀樹「右京第439次(7ANKNZ-3地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1995
- 注12 注3に同じ。
- 注13 注8に同じ。
- 注14 注6に同じ。

6. 植物園北遺跡第16次発掘調査概要

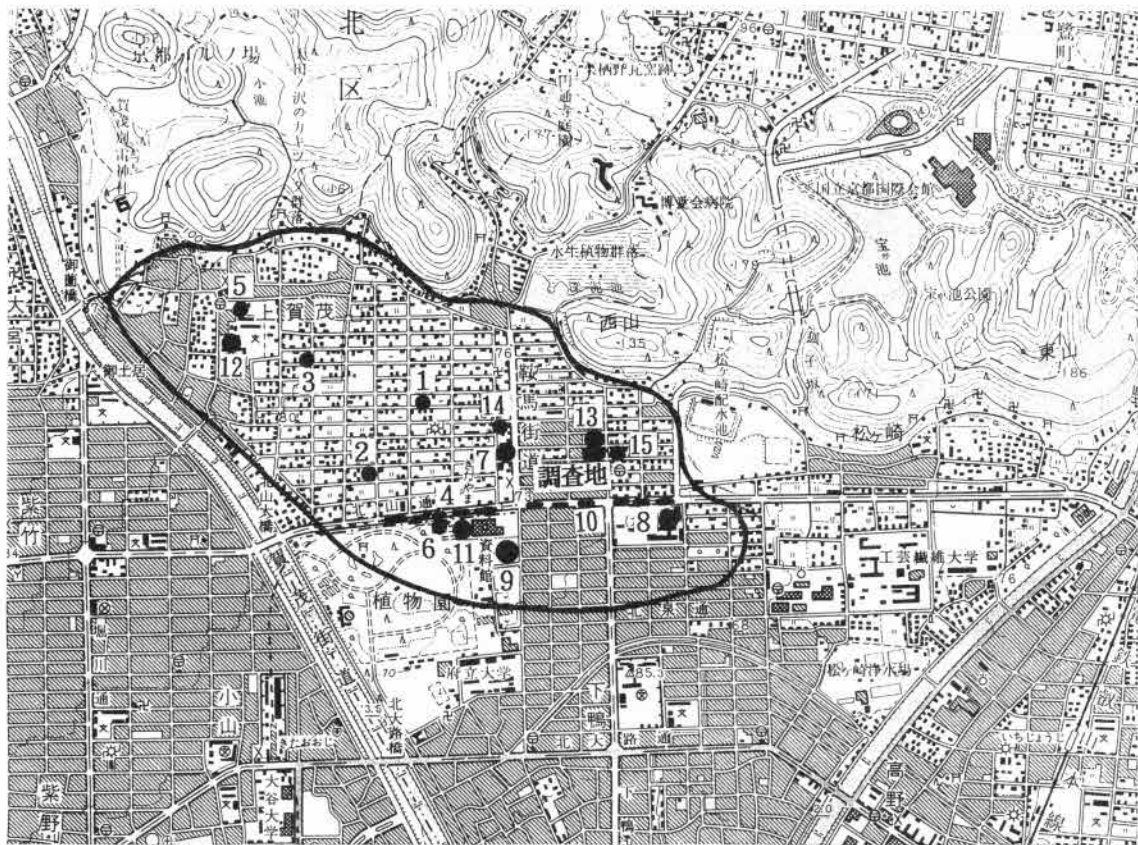
1. はじめに

植物園北遺跡は、賀茂川と高野川に挟まれた扇状地に広がる弥生時代から古墳時代の北山城地域最大級の集落遺跡である。遺跡の範囲は、京都府立植物園の北側を中心とした、上賀茂神社からノートルダム女子大学の東側まで、東西約2km・南北約1kmに及ぶと推定されている。

この発掘調査は、京都府の公舎整備工事に伴うもので、京都府出納管理局の依頼を受けて実施した。今回の第16次調査地は、京都市左京区下鴨北芝町に所在する。

現地調査は、平成7(1995)年4月19日に開始し、同年8月18日に終了した。調査面積は約860m²である。7月28日には、現地説明会を行い、50余名の参加者があった。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美、同主任調査員引原茂治、同主査調査員石尾政信、同調査員奈良康正が担当した。

発掘調査にあたり、京都府出納管理局、財団法人京都市埋蔵文化財研究所をはじめ、関係諸機関の方々から多くの御協力を得た。調査期間中には、長谷川行孝氏・馬瀬智光氏(京都市埋蔵文



第51図 調査地位置図(1/25,000) 数字は、各調査次数地点

化財センター)、久世康博氏(京都市埋蔵文化財研究所)などから多くの御教示をいただいた。また、京都大学大学院生の杉本厚典氏をはじめ、多数の方々には調査に調査補助員・整理員として参加していただいた。

基準点測量と空中写真撮影はそれぞれ委託して行った。特に、基準点は、京都市内の計測を精力的に進めている(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

遺構平面図には国土座標を表示した。また、その他の図面上の北は、すべて座標北を示す。本概要の執筆は主として石尾政信が行い、出土遺物は杉本厚典が担当した。

なお、本調査にかかる経費は、全額、京都府が負担した。

2. 植物園北遺跡のこれまでの調査

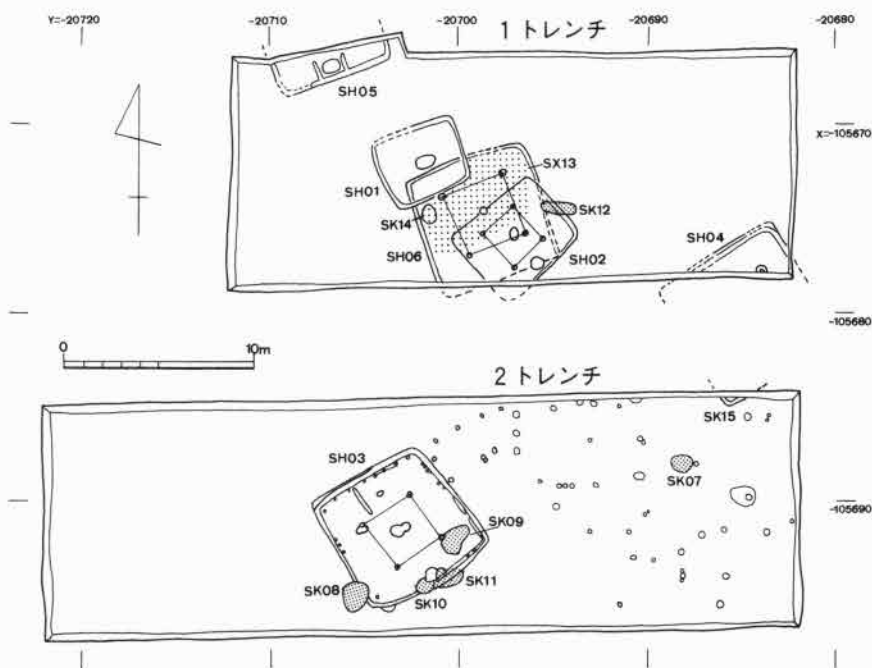
植物園北遺跡は、昭和54(1979)年から3年間に及ぶ、京都市の公共下水道工事に伴う立会調査で、弥生時代から古墳時代の住居跡や土坑、平安時代以降の遺構などが見付き、賀茂川左岸の植物園北方に広がる集落遺跡と推定されるようになった。その後、これまでに15回の調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代を中心とした集落遺跡であることが判明している。

これまでの調査で、弥生時代後期以前の時期の遺構としては、縄文時代晩期の埋甕が4次・9次調査で検出され、また弥生時代前期の土坑が検出されている程度である。

遺跡推定範囲の北西にあたる第3次調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡2基・古墳時代前期の竪穴式住居跡2基などが、また、第5次調査では、古墳時代前期の竪穴式住居跡2基・古墳時代後期の竪穴式住居跡8基が、第12次調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡3基などが検出されている。一方、遺跡南部にあたる第9次調査では、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴式住居跡

3基・奈良～平安時代の掘立柱建物跡などが検出されている。

今回の調査地から西方約300mの地点で行われた第7次調査では、古墳時代前期の竪穴式住居跡9基・平安時代後期の掘立柱建物跡など、南東約300m地点での第8次調査では、弥生時代後期



第52図 遺構平面図

～古墳時代前期の竪穴式住居跡7基・古墳時代後期の竪穴式住居跡3基などが検出されている。

当調査研究センターが平成5(1993)年に調査した北隣りの第13次調査^(IF9)では、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡5基・土坑や掘立柱建物跡が、東隣りの第15次調査^(IF10)では、古墳時代前期の竪穴式住居跡1基などが検出されている。これらのことから、今回の調査地でも弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡などの存在が予想された。

3. 調査概要

調査は、改築される公舎建物範囲に合わせて東西方向のトレンチを南北に2本設定し、攪乱や盛り土を重機で除去した後、人力掘削及び精査を繰り返して遺構検出に努めた。トレンチは、北を第1トレンチ、南を第2トレンチと呼称する。第1トレンチの最も浅い西北端では、遺物包含層がほとんどみられず、現地表から30cm下で遺構を検出した。南部では、遺物包含層が薄く堆積するが、第1トレンチのほとんどは、表土直下で遺構検出面である灰褐色～黄褐色土や同色系の砂礫層となる。第2トレンチでは表土の下に旧耕作土があり、その下に茶褐色土・暗褐色土の遺物包含層がみられる。遺構は、遺物包含層を除去した淡褐色～黄褐色土層面で検出した。

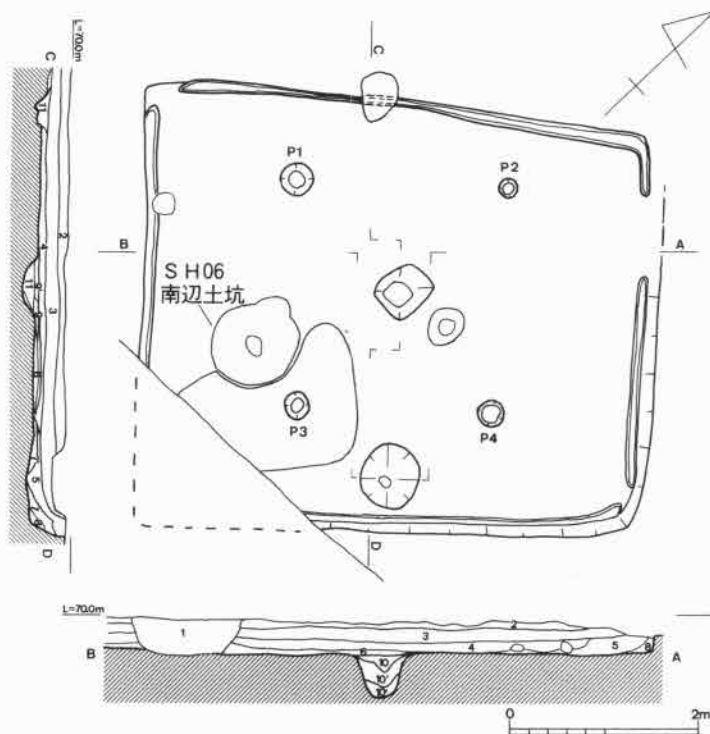
遺構検出面は、改築前の建物基礎や浄化槽及び埋設管などで寸断されていたが、竪穴式住居跡5基、竪穴式住居跡内の集石遺構、土坑及び土器溜まり、柱穴群などを検出した。竪穴式住居跡や土坑及び土器溜まりからまとめて土器などの遺物が出土した。

以下に時代の古いものから記述する。

4. 検出遺構

① 弥生時代終末～古墳時代初期の遺構

竪穴式住居跡2(SH02)
第1トレンチで検出した東西約5.4m・南北約4.6mを測る長方形の住居跡である。住居跡の主軸は約N-40°-Wである。住居跡は、黄褐色土を掘り込み、側壁は最も残りがよい部分で約40cmを測り、壁



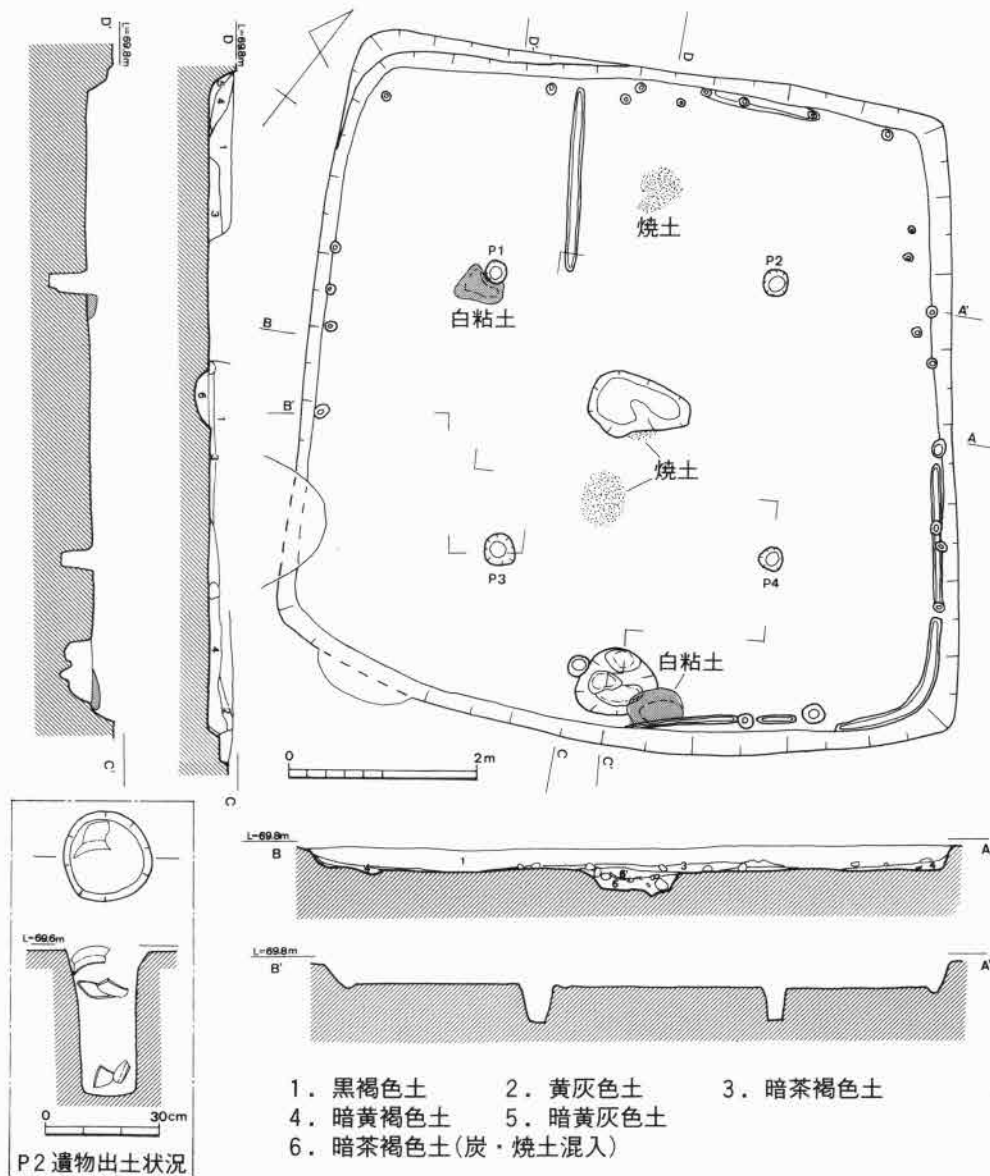
第53図 竪穴式住居跡2(SH02)実測図

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. 攪乱 | 7. 暗黒褐色粘質土 |
| 2. 茶褐色土 | 8. 黄褐色粘質土(黒褐色土混じり) |
| 3. 黒褐色土 | 9. 黒褐色粘砂土 |
| 4. 黄褐色土(黒褐色土混じり) | 10. 黒褐色粘質土 |
| 5. 黒褐色粘質土 | 11. 黒褐色粘質土(炭・焼土混じり) |
| 6. 黒褐色粘質土(黄褐色土混じり) | |

際には、浅く周壁溝が残存していた。住居跡床面の中央部と南辺から土坑を確認した。中央土坑では、埋土に炭や焼土が混入していた。住居の主柱穴は4か所確認され、深さは、床面から30～40cmを測る。

竪穴式住居跡の埋没過程は、住居跡6が住居跡2の大半と重複して設けられていたため、明らかにすることができなかった。ただ、住居跡2の床面で、主柱穴P3周辺の浅い窪みが、淡黄褐色粘質土で覆われ、この粘質土を除去した後はじめて主柱穴の輪郭が現れた。これは、主柱の抜き取り後に埋め戻し、住居跡6を設ける際に平坦にしたと考えられる。遺物としては、南辺土坑と柱穴から土器片が出土したが、その他確実にこの住居跡に伴うものと特定できるものはない。

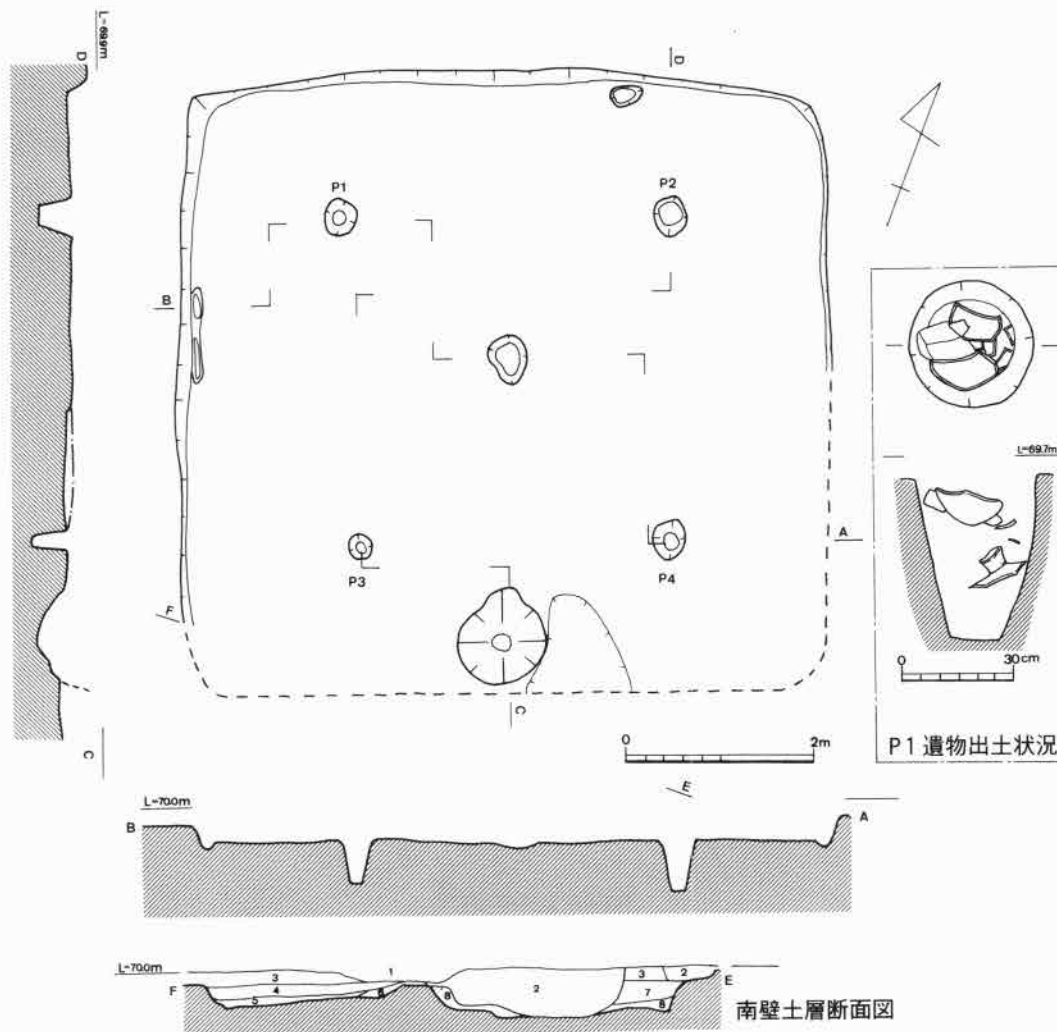
竪穴式住居跡3(SH03) 第2トレンチで検出した、東西約6.9m・南北約7.0mを測る大型の竪穴式住居跡である。平面形態は、北辺の長さが6.2mで、東西両辺がやや南に開き台形状を呈するものの、やや隅丸方形の住居跡である。住居跡の主軸は約N-31°-Wである。住居跡は、



第54図 竪穴式住居跡3(SH03)実測図

淡褐色～黄褐色土を掘り込み、側壁は20～30cmを測る。壁際には、周壁溝が部分的に残存していた。周壁溝は5cm程度と浅く、周壁溝の中をはじめ周壁に沿って径10cm以下の小坑を検出した。住居跡床面の中央と南辺で土坑を確認した。中央土坑では、拳大の石と炭や焼土が残存していた。焼土は3か所で確認し、そのうち中央土坑の南方のものとはよく焼きしまっていた。中央土坑の周辺では、多量の焼土や灰に炭化物が混じる。住居跡の主柱穴は4か所で、各々直径25～35cm、床面からの深さ30～40cmを測る。柱穴P3・4では、柱穴を塞ぐように石を置く。柱穴P1の周囲には白色粘土がめぐらされており、主柱の保持に関連する構造物として注目される。この白色粘土は、南辺土坑と周壁溝が接する場所にも置かれていた。

住居跡床面は、砂粒を含む淡黄褐色土で、一部に下層の砂礫層が露出しているが、貼り床などは認められなかった。住居跡の埋土は、黄褐色土が混じる黒褐色土が主体で、その下に暗茶褐色土・暗黄褐色土が堆積する。住居跡の南辺では、黒褐色土を掘り込んだ古墳時代前期の土器溜まりを検出した。



第55図 竪穴式住居跡6 (SH06)実測図

- | | | | |
|-----------|--------------------|-----------|------------------|
| 1. 盛り土 | 2. 攪乱 | 3. 暗灰褐色土 | 4. 黒褐色土 |
| 5. 黒褐色粘質土 | 6. 黄褐色粘質土(黒褐色土混じり) | 7. 黒褐色粘砂土 | 8. 黄灰色土(黒褐色土混じり) |

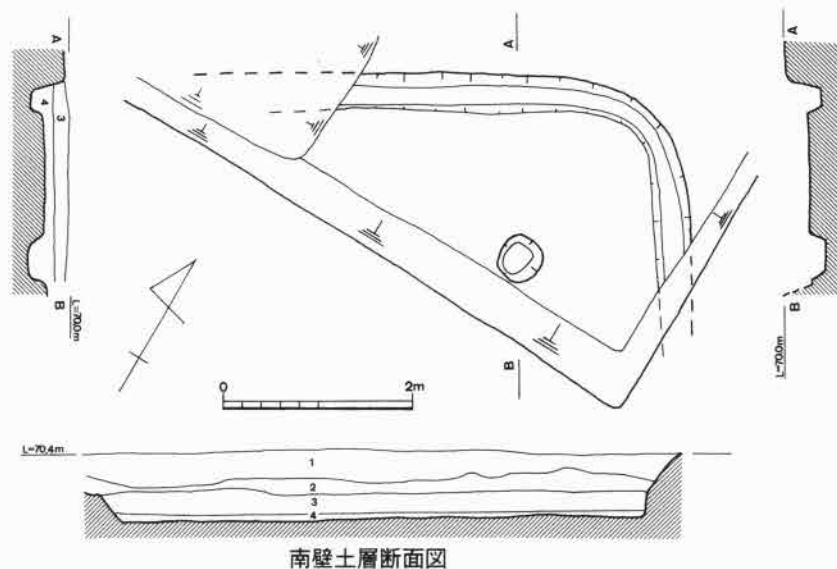
出土遺物は土器のみで、埋土内のほか、柱穴・中央土坑・南辺土坑の屋内諸施設のほか、床面上及びやや遊離した状態で出土した。柱穴P 2からは、高杯と甕が重なって出土した。主柱を抜き取った後、柱穴を埋め戻した時に投棄されたと判断される。土器は、磨滅が認められないことから、混入の可能性は低い。また、床面直上で出土した土器の中でも、鉢は、焼土面から若干遊離して検出され、土器自身も赤く変色していた。

竪穴式住居跡 4 (SH04) 第1トレンチ南東隅で検出した、東西3.8m以上・南北2.2m以上を測る隅丸方形の住居跡である。住居跡の主軸は約N-32°-Wで、住居跡3とほぼ平行している。住居跡は、小礫を含む黄褐色土と下層の礫層を掘り込み、側壁は約35cmを測る。壁際では、幅約25cm・深さ約15cmの周壁溝を検出した。柱穴は1か所しか確認できなかったが、4本主柱と推測できる。住居跡の埋土は、礫を含む黒褐色土で、少量の土器が出土したのみである。第2トレンチの北端で検出した土坑15(SK15)が住居跡4の一部と推測すると、東西南北とも約7mの規模と考えられる。

竪穴式住居跡 6 (SH06) 第1トレンチ中央で検出した、東西6.8m・南北5.4m以上を測る隅丸方形の住居跡である。住居跡の主軸は約N-20°-Wである。側壁は20~30cmを測り、壁際の一部に周壁溝が残存していた。床面では、中央土坑・南辺土坑と4か所の支柱穴を検出した。中央土坑は、深さ6cm程度と浅く、灰や炭化物は顕著ではなかった。南辺土坑は、直径85cm前後・深さ30cmを測り、遺物はほとんど見られない。支柱穴は、各々床面から35~50cmを測る。住居跡の北半分は、地盤に拳大の礫を多く含み、床面に凹凸がみられたが、貼り床のような構造は認められない。

竪穴式住居跡2で述べたように、竪穴式住居跡6が竪穴式住居跡2に先行すると考えたが、竪穴式住居跡6の中央土坑と支柱穴P 3が竪穴式住居跡2の周壁溝を切った状態で検出されたため、竪穴式住居跡2が竪穴式住居跡6に先行することが確実にされた。

住居跡の埋土は、北半と南半で大きく様相が異なる。南半では黒褐色粘質土・黄褐色土の上に黄褐色土が混じる黒褐色土が堆積するのに対し、北半は、暗黒褐色土が堆積した後、径20cm以上の大礫を含む礫群が住居跡の検出面ま



第56図 竪穴式住居跡4 (SH04)実測図

1. 攪乱・盛り土 2. 灰褐色土(旧耕土) 3. 黒褐色土 4. 黒褐色粘質土



第57図 集石遺構(S X13)実測図

で積み重なっていた。これを集石遺構と呼ぶ。

出土遺物はすべて土器で、集石内や住居跡南半の埋土中のものが多い。そのほか、支柱穴P1から甕と高杯の一部が出土した。これらの土器には、ほとんど磨滅がみられない。

集石遺構(S X13・S K14) 竪穴式住居跡6の北半を覆う礫の集積である。西側と東側の2か所で堆積密度が高く、その中間は疎らな傾向が見られる。北西部分では、南北約1.5m・東西約0.9mの範囲に多くの土器が集積していた。この土器堆積は、床面直上から集石検出面まで達していたが、明確な掘形の輪郭は見られなかった。そのため、これらの土器群は、集石の堆積過程でこの場所にまとめられたものと考えられる(土器溜まりS K14と呼称)。このS K14出土土器には、壺や器台が多く、集石遺構出土土器は、煤の付着や、赤く変色したようすで、火にかけられた痕跡をとどめる土器はほとんど認められなかった。

今回の調査地の地盤には、礫層の部分と細砂～シルト層の部分がみられ、たとえば礫層の場所で竪穴式住居を掘削すれば必然的に多くの礫石を排出することになる。このような集石遺構は、第13次調査の竪穴式住居跡3からも検出されている。この集石遺構が人為的な積み上げか、単なる投棄かが問題になる。この集石が人為的なものならば、石の面をそろえたり輪郭を整える傾向が現れるが、そうした傾向は認められなかった。一方、集石の表面部分には、チャートや頁岩の割れた礫が点在し、これらのいくつかは互いに接合した。これらの割れた礫石は、石が相互に衝突したことから生じると推測された。そこで、割れた石の分布を検討したところ、礫の堆積が密な場所に割れた石が多く見られ、逆に土砂に覆われた場所では割れた石がほとんど認められなかった。おそらく、これらの集石は、その多くが投棄されたもので、積み上げられた可能性は低いと考えられる。集石遺構出土の遺物は、すべてが土器で、角閃石を含む庄内式の甕の破片が数点認められる程度である。

柱穴群は、第2トレンチの東半部で検出された。この場所の地盤は、シルト層(粘砂土)で竪穴式住居が掘削しやすいにもかかわらず、竪穴式住居は設けられず、その代わりに多くの柱穴が点在していた。掘立柱建物跡と判断できるような柱穴の配列は見られないが、竪穴式住居跡3に平行または直交する柱穴が確認された。柵列のようなものが存在した可能性が考えられる。いくつかの柱穴から少量の土器が出土しており、これらの土器は、弥生時代終末～古墳時代初頭の時期が考えられる。

②古墳時代前期の遺構

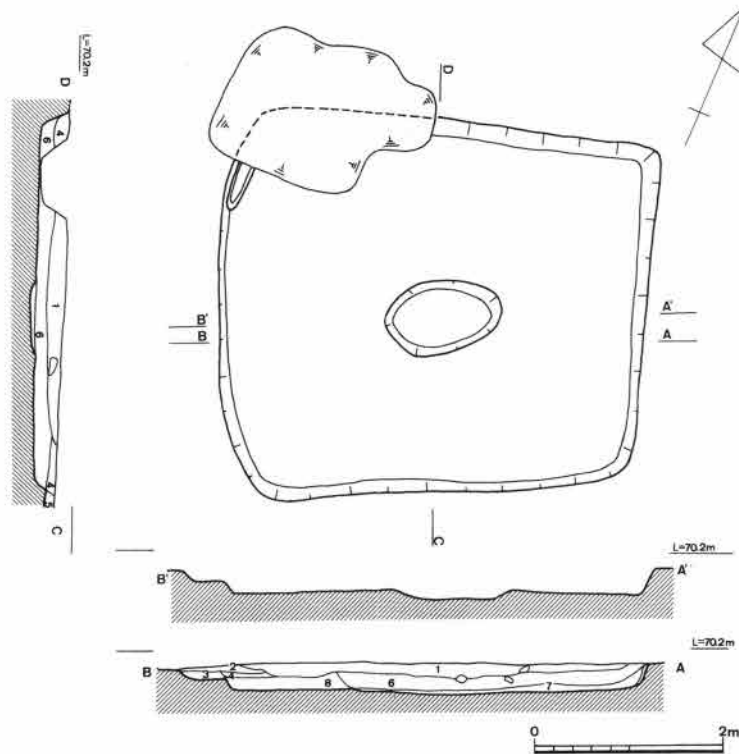
竪穴式住居跡1(S H01) 第1トレンチで検出した東西約4.5m・南北約4.0mを測る隅丸方形の住居跡である。住居跡の主軸はほぼN-19°-W振れている。住居跡は、大礫の密度が高い砂礫層の基盤を掘削しており、側壁高は、25～30cm残存する。中央部の床面で東西約1.2m・南北約0.8m・深さ約0.1mの浅い土坑を検出したが、土器類の出土はみられなかった。支柱穴は確認できなかった。植物園北遺跡第7次調査で検出されている支柱穴を持たないタイプの竪穴式住居跡と考えられる。

この住居跡は、土砂と大量の土器片で埋まっていた。住居が廃棄された後、一時に投棄された

のであろう。土器には土師器の小形丸底壺・高杯・壺・甕などがあり、小形丸底壺には、竪穴式住居跡5出土のものと接合する個体がみられた。

竪穴式住居跡5 (SH05) 第1トレンチ北西端で検出した一辺約6.4mを測る隅丸方形の住居跡である。住居跡の主軸はほぼN-20°-W振れている。住居跡は、細礫～大礫が分布する砂礫層の基盤を掘削しており、側壁は、15～20cmが残存する。住居跡の床面で幅10～20cm・深さ5cm前後を測る側壁溝が検出され、側壁溝に直交する2条の浅い溝と溝に挟まれて土坑が確認された。南辺土坑は、長径約1m・短径約0.6m・深さ約0.3mを測る。土坑の上面から埋土全体にわたって土師器高杯・壺・甕などが出土した。住居跡は、ほぼ黒褐色土で埋まっていた。

土坑7 (SK07) 第2トレンチの東部で検出した直径約1mを測る円形の土坑である。ほぼ垂

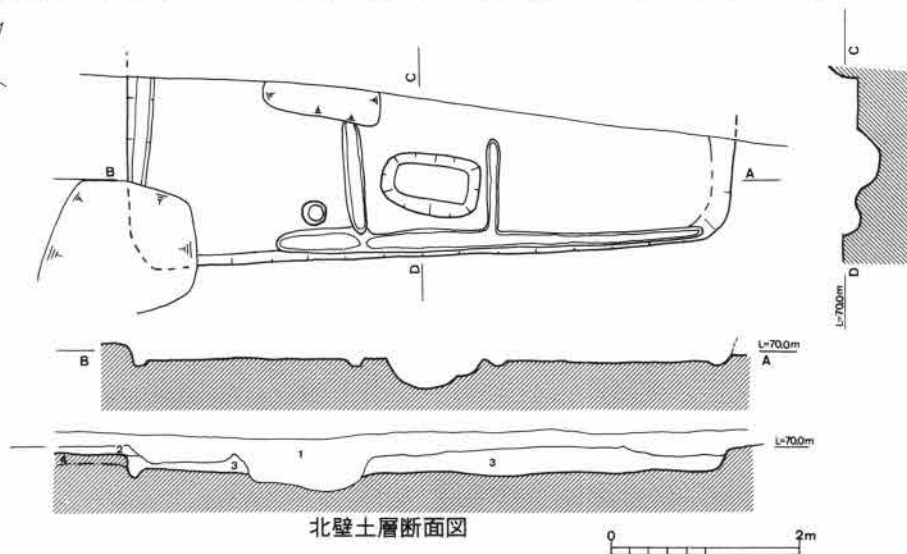


第58図 竪穴式住居跡1 (SH01)実測図

- 1. 暗黒褐色土 2. 黒褐色土 3. 黄褐色土 4. 茶褐色砂質土
- 5. 暗茶褐色土 6. 暗黒色土 7. 黄褐色粘砂土
- 8. 黄褐色粘砂土(暗黒色土混じり)

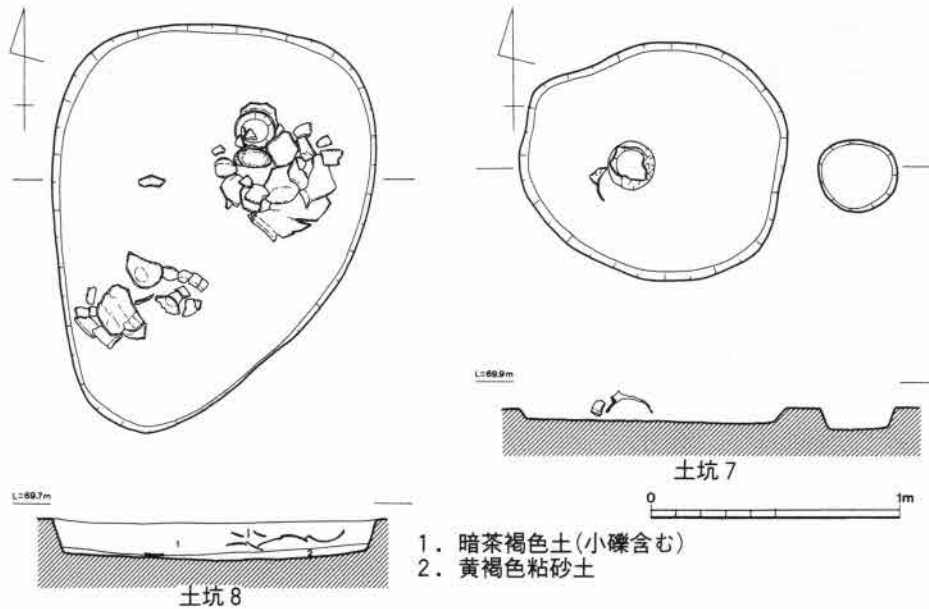
れ、側壁溝に直交する2条の浅い溝と溝に挟まれて土坑が確認された。南辺土坑は、長径約1m・短径約0.6m・深さ約0.3mを測る。土坑の上面から埋土全体にわたって土師器高杯・壺・甕などが出土した。住居跡は、ほぼ黒褐色土で埋まっていた。

土坑7 (SK07) 第2トレンチの東部で検出した直径約1mを測る円形の土坑である。ほぼ垂



第59図 竪穴式住居跡5 (SH05)実測図

- 1. 攪乱・盛り土 2. 淡褐色土 3. 黒褐色土 4. 黄褐色砂質土



第60図 土坑7(S K07)・8(S K08)実測図

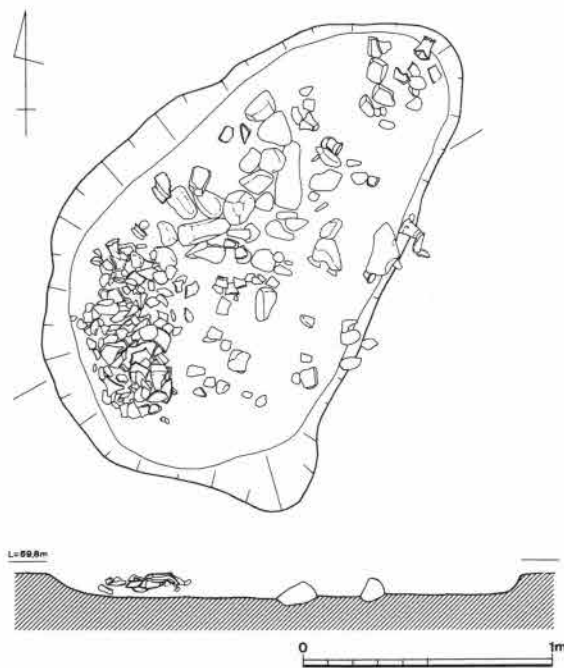
直に掘り窪められている。土坑の埋土は暗茶褐色土で、検出面からの深さは6 cmを測る。土坑底面からやや遊離した状態で甕の上半が出土した。土坑は、もう少し上面から掘削されていたのであろう。

土坑8(S K08) 竪穴式住居跡3の南西隅を切って検出された、東西1.3m・南北1.6mを測る卵形の土坑である。ほぼ垂直に掘られ、埋土は、上層が暗茶褐色土、下層が黄褐色粘砂土で、検出面からの深さ15cmを測る。遺物は、土坑底面またはやや浮いた状態で折り重なって、ほぼ北と南の2群に分かれて出土した。北群の中には、土器に混じって粘土塊が認められた。出土遺物には

土師器高杯・壺・甕などがあり、それらの多くは接合し、ほぼ完形に復原できた。

土坑9(S K09) 竪穴式住居跡3の南東部上層で検出された長径2.1m・短径1.3mの範囲に土器が堆積する土坑である。掘形が不明確で、廃絶した住居跡の窪地に投棄された土器がまとまったものと考えられる。土器とともに拳大の石が多くみられた。出土土器には、土師器高杯・壺・甕があり、完形にはならないが、かなりの破片が接合し、部位がわかる程度に復原が可能である。

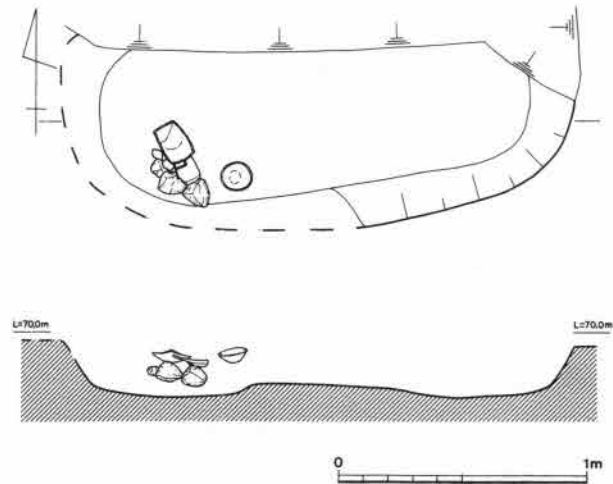
土坑10(S K10) 竪穴式住居跡3の南辺沿いで検出した。直径1 m前後の土器の堆積がある。明確な掘形はなく窪地に投棄されたものであろう。少量の土器が出土した。



第61図 土坑9(S K09)実測図

土坑11(S K11) 土坑10とほぼ同様な
 竪穴式住居跡3の南辺沿いに検出された
 長径1.5m・短径0.8m前後の土坑で、深
 さ10cm程度ある。少量の土器が出土した。

土坑12(S K12) 竪穴式住居跡2・6
 の東辺を切って検出された東西約2m・
 南北0.7m以上・深さ約0.3mを測る長円
 形の土坑である。断面は船底形を呈する。
 土坑内からは、底部外面にヘラ記号をも
 つ鉢をはじめ多数の土器片が出土した。
 土器は、土坑底部から遊離した状態で出
 土し、時期も複数の時代にわたっており、遺構の時期を特定することはできない。



第62図 土坑12(S K12)実測図

(石尾政信)

5. 出土遺物

(1) 弥生時代終末・庄内式併行期の土器

竪穴式住居跡2出土の土器 この遺構に確実に伴う資料は、南辺土坑から出土した小型の鉢(1)である。底部が赤く変色し、火を受けた可能性が高い。

竪穴式住居跡3出土の土器(2~32) 屋内施設出土の資料は2~9である。2・3・5・9は主柱穴P2から、互いに折り重なるようにして出土した。4は南辺土坑から、7・8は中央土坑、6は主柱穴P1からそれぞれ出土した。

2は、甕で口縁外側にナデを入れ、受け口状に口縁を作り出す。胴部外面に粗いハケを施し、内面はナデで仕上げる。3は、受け口状口縁の鉢で、胴部外面にハケの後ナデを施す。底部と胴部の接合痕が明瞭に残る。4は、鉢と考えられ、外面はハケの後、口縁部を横ナデで仕上げる。赤橙・黄橙の二種類の粘土を使用し、頸部の接合痕を境に色が異なる。5・6は器台、7~9は高杯である。高杯の脚柱内面にシボリ痕が残る。8は、縦に二つに割れ、一方が黄橙色で軟質、片方が暗茶褐色で硬く焼けている。後者は二次的に熱を受けた可能性がある。

10~32は、床面直上から埋土にかけて出土した。10は、壺あるいは器台の口縁、30は、器台の口縁と考えられる。11・12は、直口壺の口縁で、内外面をナデで仕上げる。13~20は、小型の甕、鉢である。14・15・20は、硬質で、器壁の芯まで赤橙色を呈し、外面に円形の剝離痕が観察され、二次被熱の可能性がある。19は、4と同様、二種類の粘土を用いる。口縁部は、16~18が受け口状である以外は「く」字形口縁で、端部をナデ調整し、面を持たせる。18の肩部施文帯は、多条沈線と斜列点で、20の肩部は、多条沈線と刺突で構成される。21~24は、甕・鉢などの底部である。25~29は高杯、30~32は器台である。脚柱部内面は、28・29がシボリ痕を持つほか、31にはケズリが、27には横方向の擦痕が観察される。ミガキは、27の脚部外面、30の杯部内外面に用い

られる。30の口縁端面には円形の印刻がめぐらされる。

竪穴式住居跡4出土の土器 凶化可能な資料は、埋土下層出土の二重口縁壺、上層出土の高杯のみである。33は、沈線を一本ずつ口縁外面に施し、口唇部に刻み目を持つ。頸部外面はタテハケ→ナデ、内面はナデ調整する。34は高杯で、内外面をナデで仕上げる。

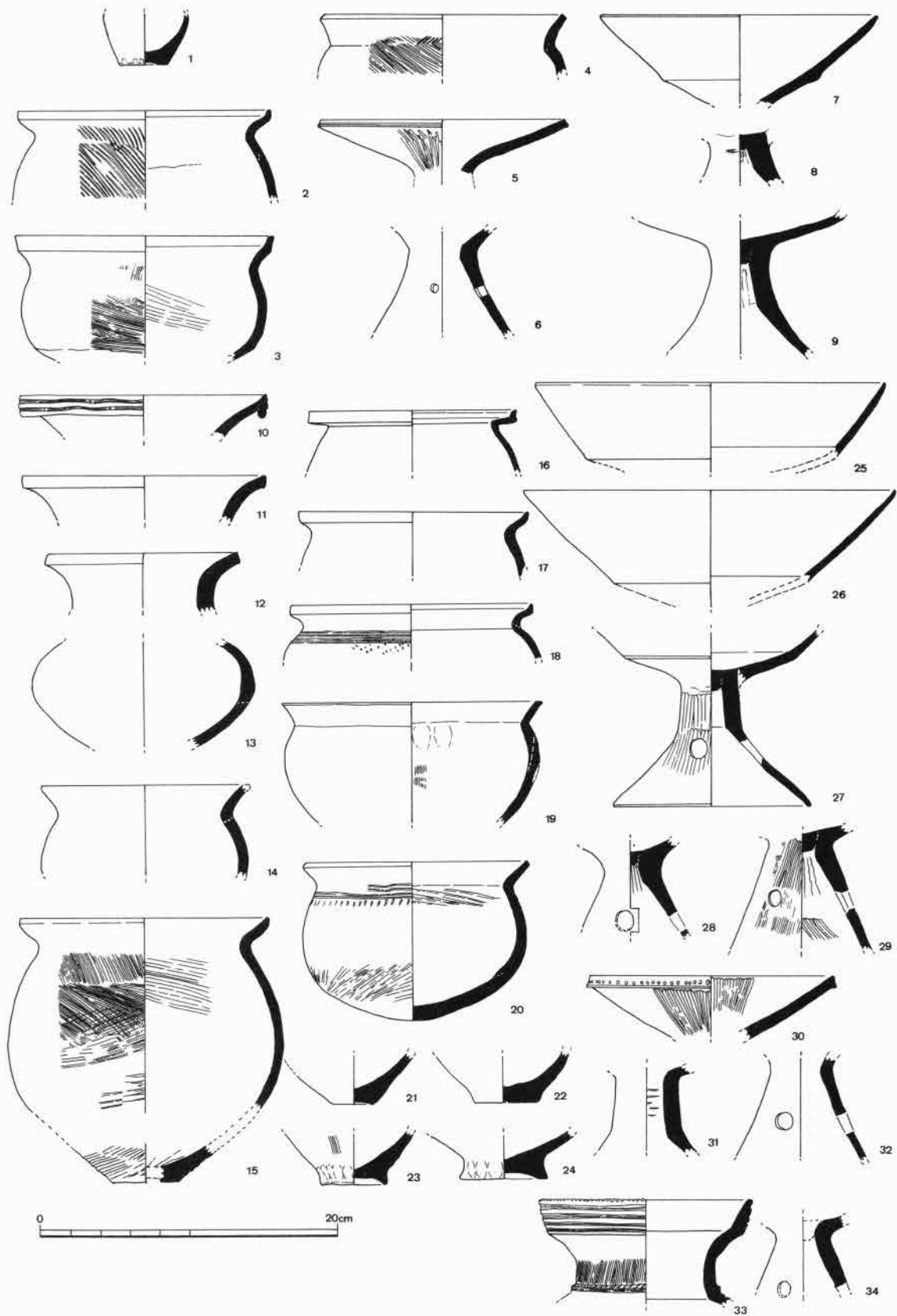
竪穴式住居跡6出土の土器 検出された土器は出土状況から、1)集石遺構以前の遺構、埋土に伴うもの(35~41)、2)集石遺構中の土器溜まりS K14に伴うもの(42~60)、3)S K14以外の集石遺構及び住居埋土に伴うもの(61~79・81・82)、4)不明(80)に区分される。

1)集石遺構以前

主柱穴P1から出土した35・36を除き、集石遺構下層から散漫に出土した。35・36は甕で、35は粗いハケで、36はハケ→ナデで外面が仕上げられる。36は、口縁外側にナデを入れ、面を持たせる。37は、高杯で脚柱内面を横方向にケズリを入れる。39は器台で、脚外面はナデが施される。38・40は鉢で、38は受け口状口縁で、端部はナデを施し、面取りが行われる。外面はハケの後に肩から口縁にかけてナデで器面を整え、肩部に櫛描き直線・波線からなる文様帯をめぐらせる。内面もハケの後、上半をナデで仕上げる。41は、底部の窪みが特徴的である。40は甕の底部で、外面に粗いハケ、内面に細かいハケをそれぞれ施す。

2)土器溜まりS K14に伴うもの

土器は、互いに折り重なって出土した。部分的に集石遺構内の土器と接合するものもあるが、S K14周辺に限られる。42・43は直口壺である。いずれも頸部に突帯を持ち、頸部外面はハケ→ナデ、内面はナデで仕上げる。44は鉢、45は手あぶり形土器である。44は口縁端部にナデをめぐらせ面を持たせている。外面は、粗いハケを横方向に施した後、頸部を細かいタテハケで整え、口縁部にナデを施す。内面はナデで仕上げる。45は、口縁端部が不ぞろいに欠け落ちており、ここに手あぶり形土器の上部構造が接着していたと考えられる。内外ともハケ→ナデ調整である。46・47は、甕と考えられる。46は、胴部をタタキ整形後、粗いハケで調整し、頸から口縁にかけて細かいハケを施す。口縁外側に円形圧痕が見られる。内面はハケで仕上げ、部分的に指オサエが残る。47は外面をハケで、内面をハケ→ナデで仕上げる。口縁部を部分的に欠く。48は高杯、49・50は器台である。いずれも脚外面は研磨され、杯部も内面を中心にミガキが施される。48は脚内部に擦痕、49はケズリが見られる。51は、小型の蓋と考えられる。52~60は、広口壺である。広口壺は、口縁に施文帯を持つもの(52~54・57・58)と持たないもの(60)に分かれ、前者はさらに浮文を持つもの(52~54)、波状文を持つもの(57・58)に区別される。52~56は、上下にやや拡張した口縁に、櫛描き多条沈線を入れ、浮文を貼り、浮文上や口縁の上縁・下縁に刻み目を入れる。胴部はハケ調整後、上半は幅の広いミガキを施す。内面は、胴部をハケで調整し、口縁内面にはヨコミガキを施す。57・58は、口縁端部にナデをめぐらせ面を持たせ、その部分に波状文を入れる。胴部上半はハケ、下半はハケ後、ナデを施し平滑に仕上げる。底部と胴部の接合痕はナデ消されず、明瞭に残る。内面は、ハケ→ナデによって仕上げられる。57は、突帯を欠くが、肩部に文様帯を持つ。また、60は胴部上半と下半が接合しないが、色調・胎土などから同一個体と



第63図 出土土器実測図(1)

1. 竪穴式住居跡 2

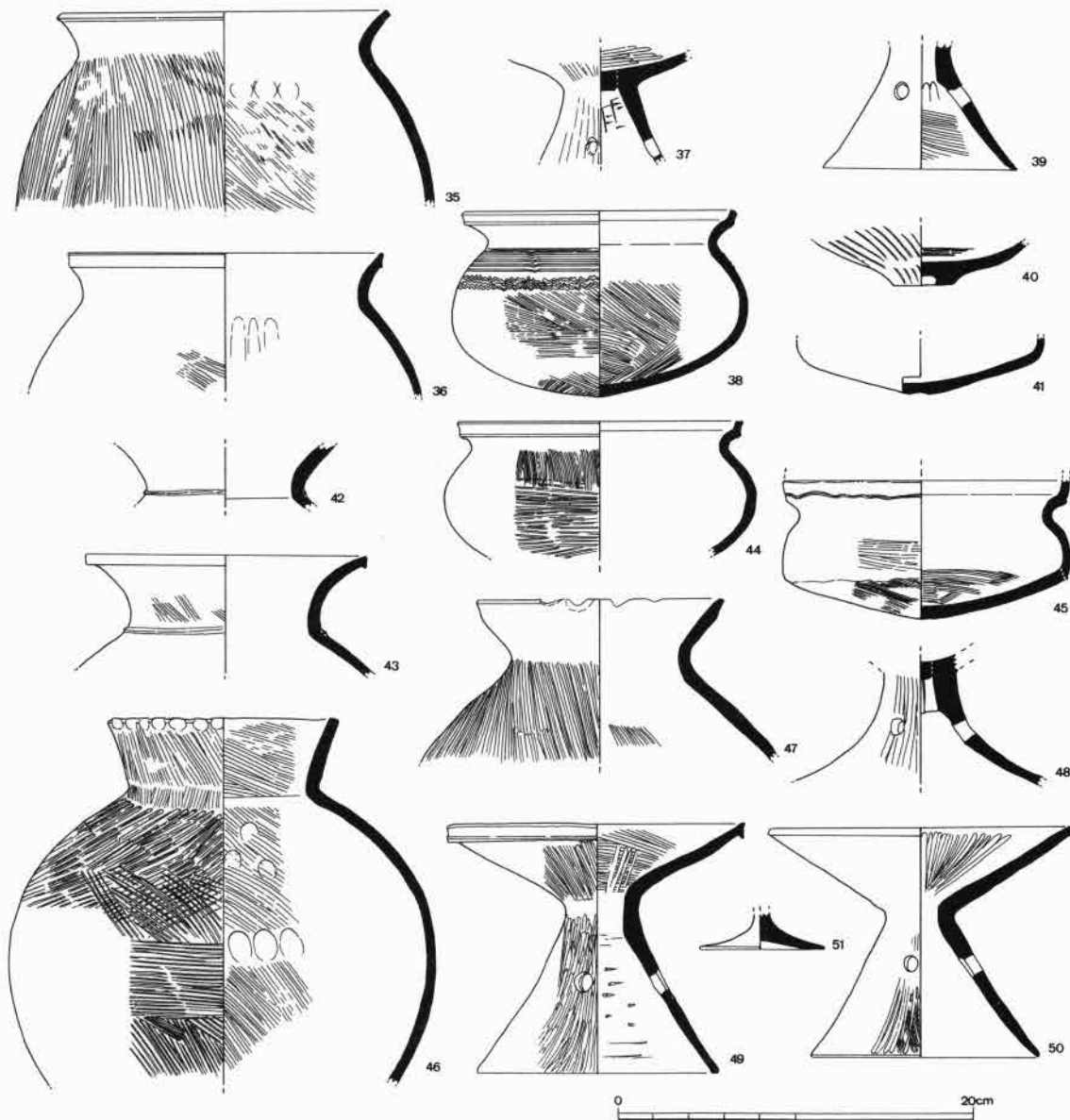
2~32. 竪穴式住居跡 3

33・34. 竪穴式住居跡 4

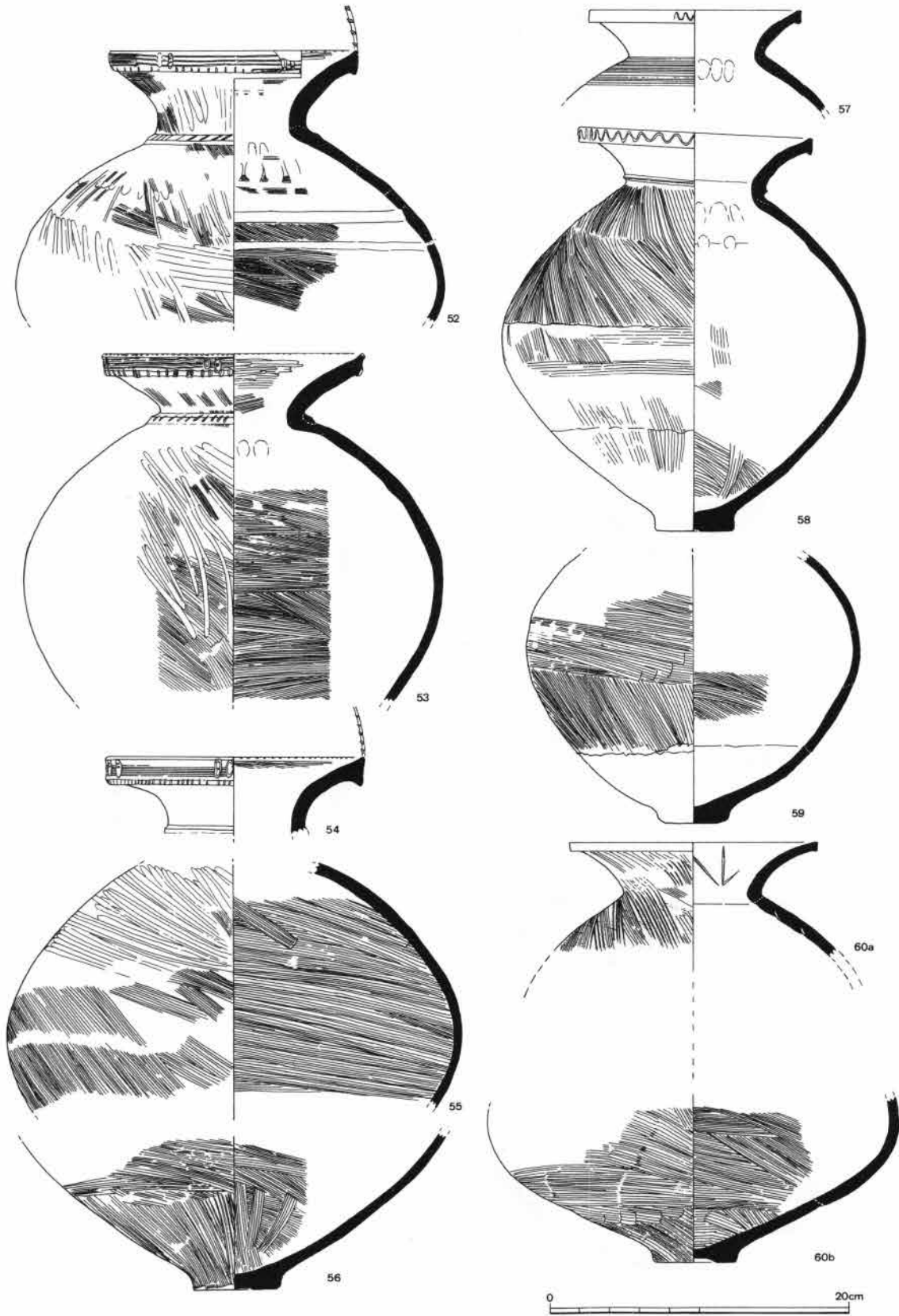
考えられる。底部には一見タタキのような調整が施されるが、この調整の単位にはタタキ技法に特徴的な切りかえしが見られず、ハケのように連続して立ち上がる。また、胴部下半から口縁にかけて粗いハケが施される。胴部内面にはハケ、口縁部にはナデを入れ、口縁内面にヘラ記号状の印刻が認められる。

3) 集石遺構とその上層に伴うもの

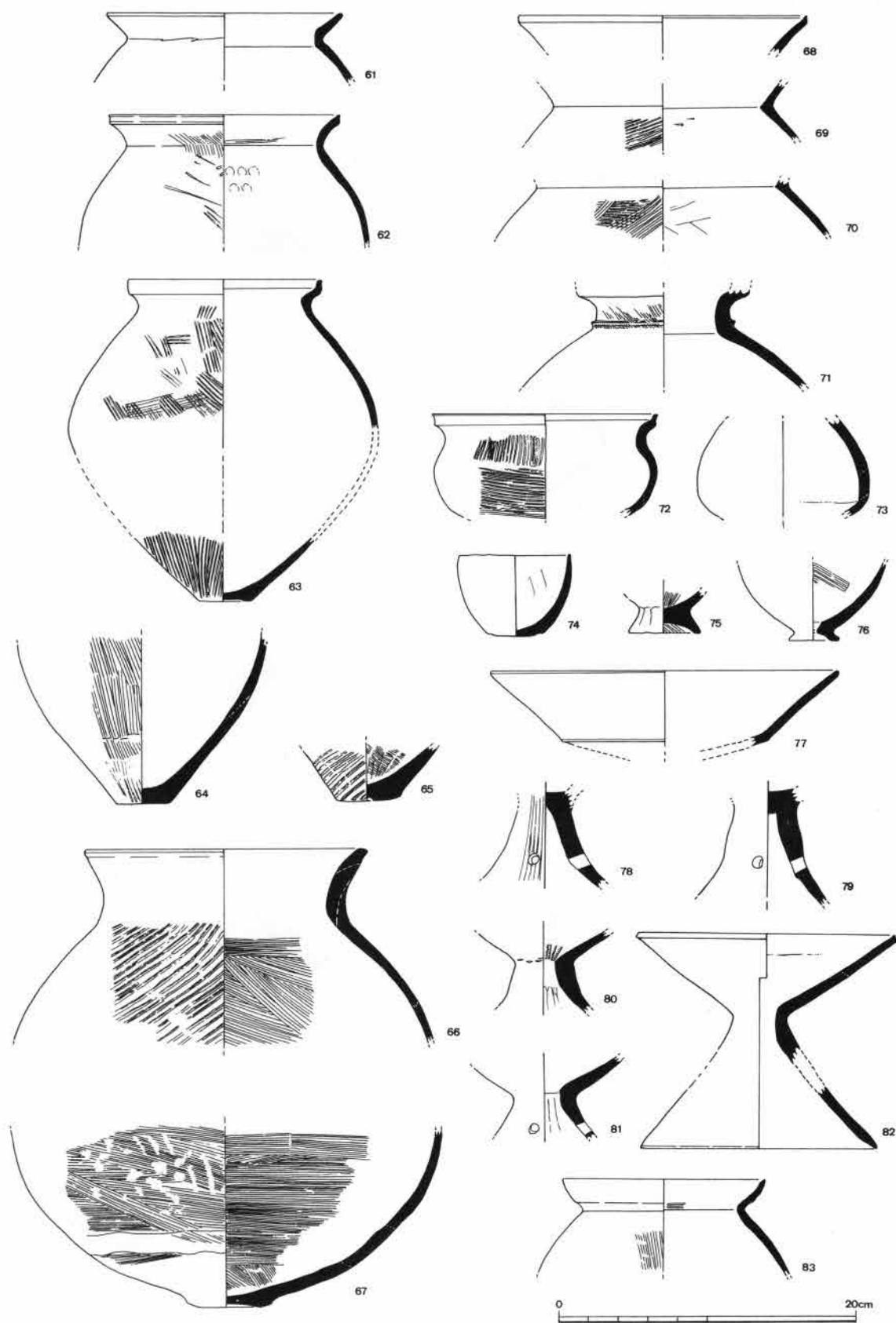
61~79・81・82は、集石遺構及びそこから上に堆積した住居跡埋土内から出土した。61~66・68~70は甕である。口縁「く」の字形(61・62)、受け口(63)、生駒西麓産庄内式甕(61~70)のほか、大型の「く」の字形口縁の甕(66)がある。多様な器面調整が見られる。61~64は、内面調整がナデで共通するものの、外面調整は61がナデ、62がケズリ、63が粗いハケ、64がハケとそれぞれ



第64図 出土土器実測図(2)
35~41. 竪穴式住居跡 6 42~51. 土坑14



第65図 出土土器実測図(3)
52~60. 土坑14

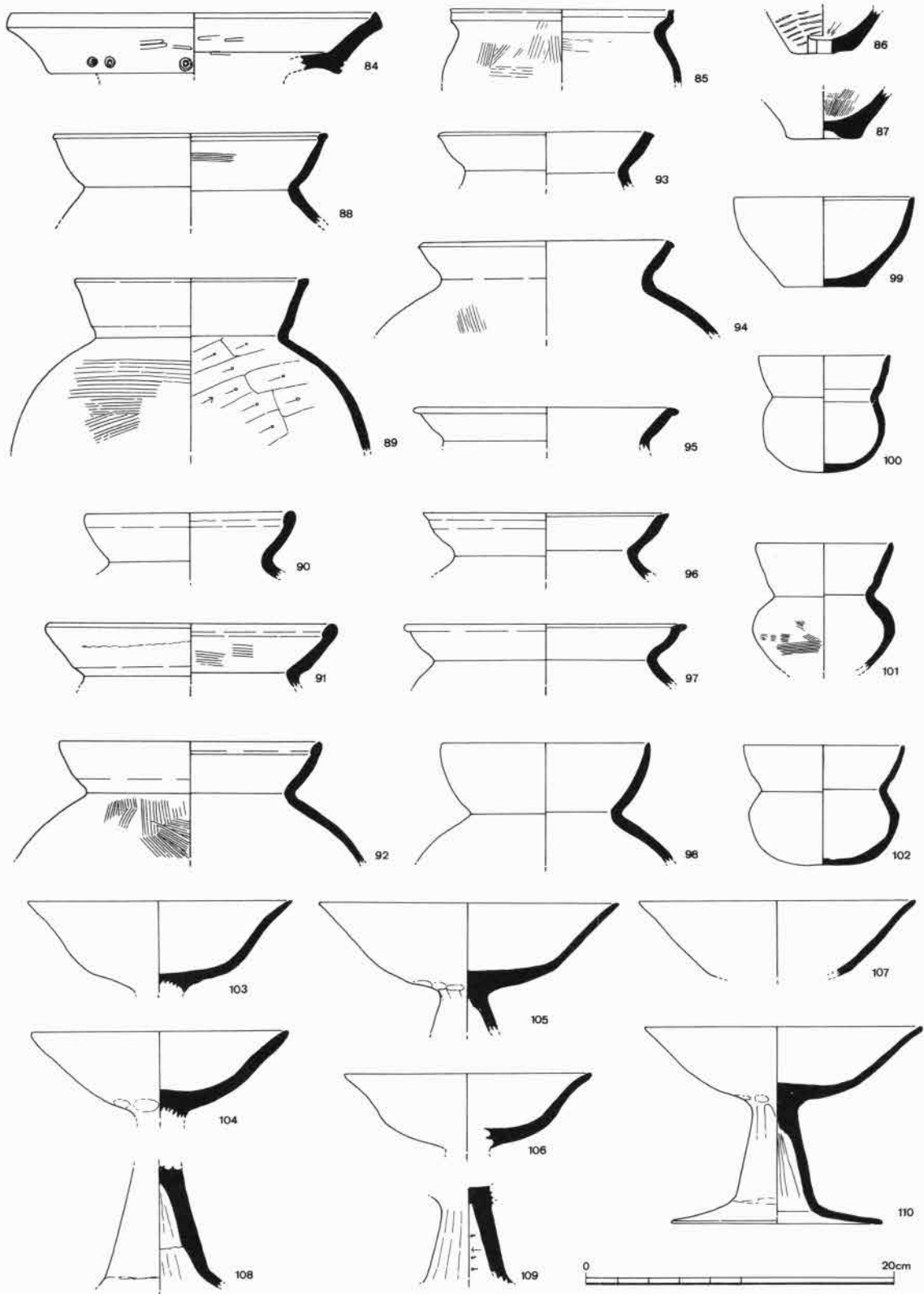


第66図 出土土器実測図(4)

61・62・64～67・71・72・74～78. 集石遺構

63・68～70・73・79・81・82. 竪穴式住居跡6

83. 2トレンチピット内



第67図 出土土器実測図(5)
84~110. 竪穴式住居跡 1

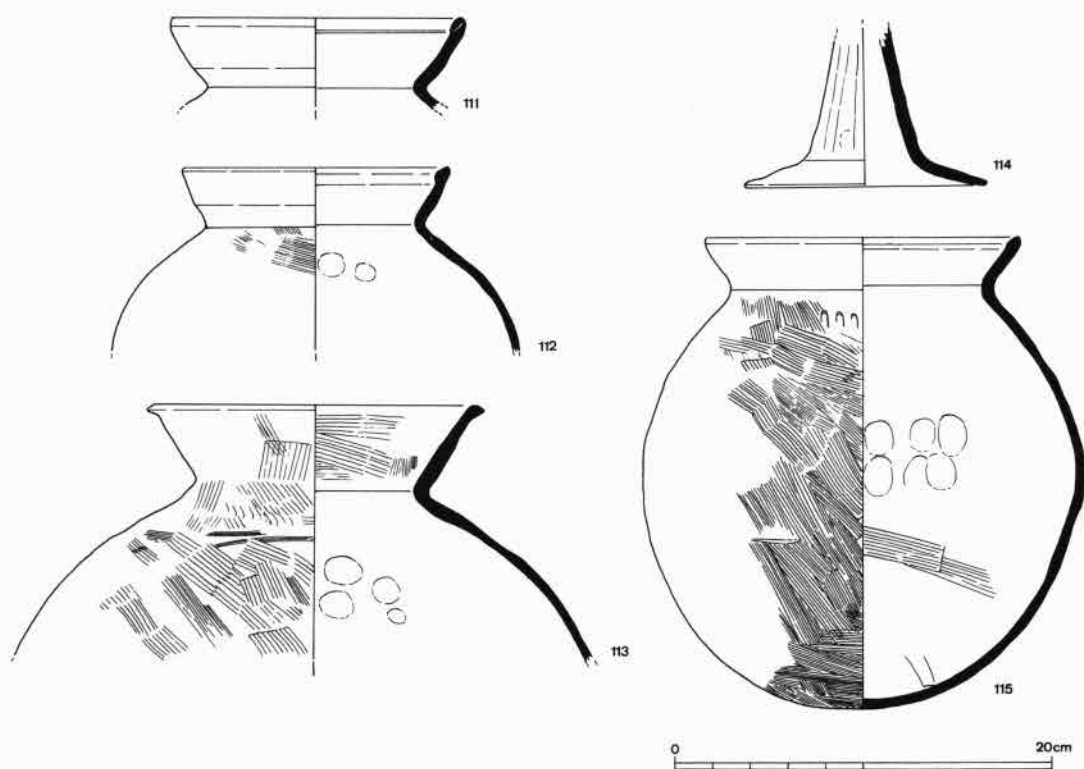
れ異なる。65・66は、外面がタタキで内面がハケで仕上げられる。69・70は、外面を細密タタキで仕上げ、内面は頸部までケズリを入れる。64の底部は赤く変色している。72～76は、鉢類である。72は、受け口状口縁で、胴部を粗いヨコハケ、頸部を粗いタテハケで調整する。胴部最大径位以下には煤が付着する。73は、内外面とも磨滅が著しい。74は、内外面ともナデで仕上げる。75・76は、高台をもつ底部である。高台部分の外面にはオサエが顕著である。73は、底部中央に焼成前の穿孔が入れている。67・71は壺である。67は、内外面ともハケ仕上げで、底部外面付近はナデが施される。底部と胴部の接合痕が明瞭である。71は、口縁を欠くものの、頸部立ち上がり、頸部付け根の突帯、器面調整の諸点で33と類似する。二重口縁壺と考えられる。78・79は高杯、80～82は器台である。外面調整にはミガキ(78)、ナデ(82)が認められる。脚柱内部は、80・81にシボリ痕があるほか、78・79は横方向の擦痕、82にはナデが施される。なお、80は屋内の土壌から出土した可能性もあるが、出土状況の詳細は不明である。

4) 第2 トレンチピット群に伴うもの

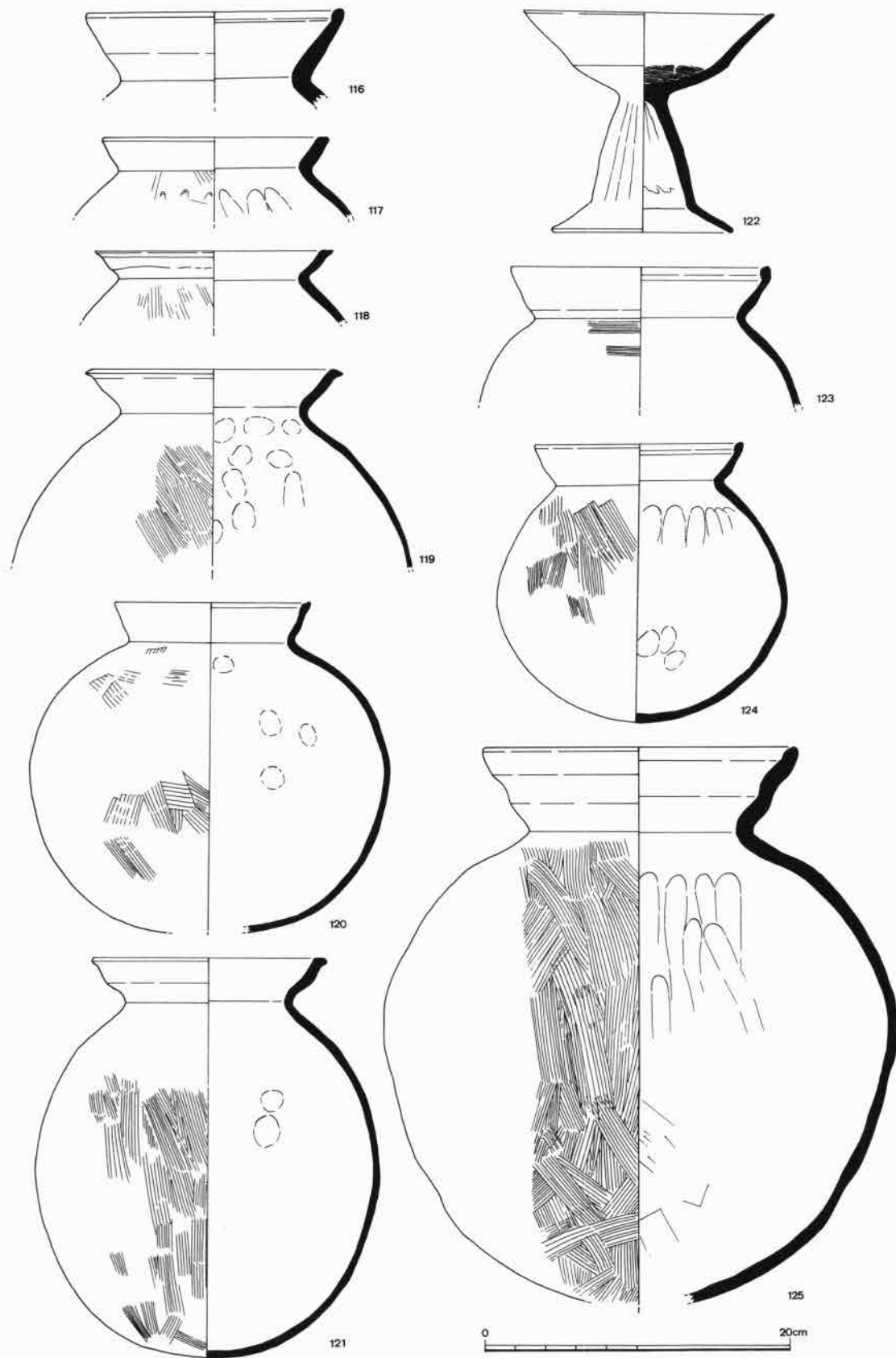
幾つかのピットで土器が数点出土した。図化可能な資料は、83のみである。83は、内湾口縁の甕で、外面はハケ、内面はナデ、口縁部はヨコナデで調整する。

(2) 古墳時代前期の土器

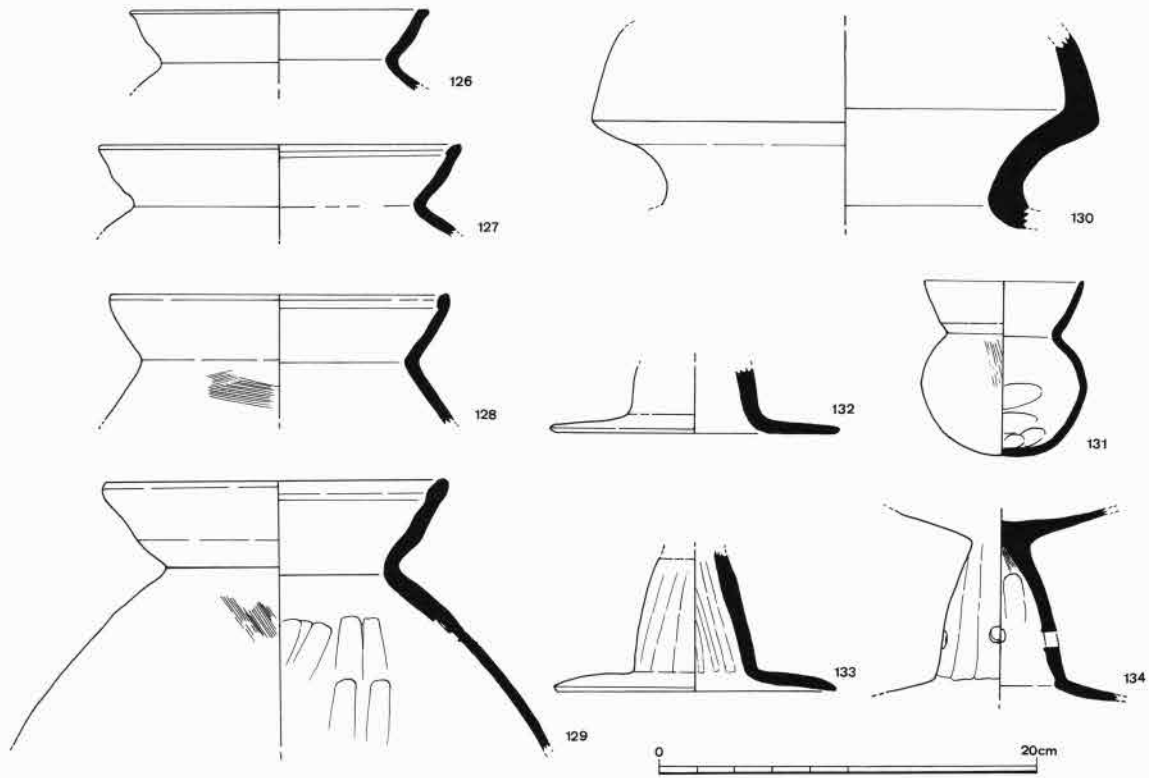
竪穴式住居跡1出土の土器 埋土内に土器堆積層が形成されており、そこから84～110が出土した。84～87は弥生時代終末期、庄内式併行期の土器で、混入と考えられる。84は、二重口縁壺



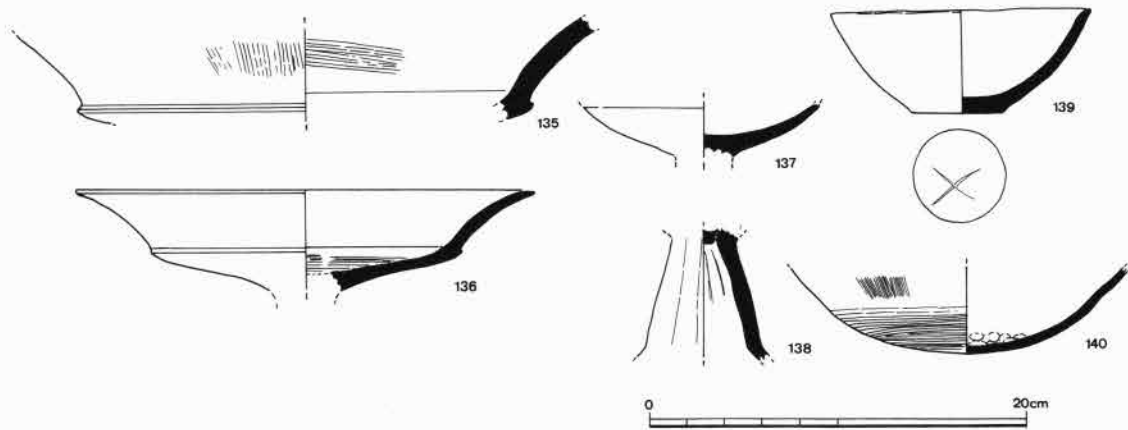
第68図 出土土器実測図(6)
111～115. 竪穴式住居跡5



第69図 出土土器実測図(7)
116. 土坑 7 118~125. 土坑 8



第70図 出土土器実測図(8)
126~134. 土坑9



第71図 出土土器実測図(9)
136~140. 土坑12 135. その他

で内外面とも横方向にミガキを入れる。口縁は、端部がはね上げられており、外面に二つ一組で円形印刻が施される。85は、鉢で受け口状口縁をなす。外面はハケ、内面はナデで仕上げられる。86は、有孔鉢の底部である。外面に粗いタタキが施され、内面はハケ調整後、ていねいにナデが施されている。87は、甕の底部と考えられる。外面はナデ、内面はハケで仕上げられる。

弥生時代終末・庄内式期の甕に比べ、布留式期の甕は差異が少なく、類型化が可能である。口縁端部形態及び口縁部から肩部にかけての調整をもとに、以下のように分類する。

付表1 出土土器観察表

番号	遺構	位置	残存率	器種	法量(cm)	礫	焼成	調	土器の特徴
1	SH02	南辺土坑	80%	鉢	3.2底径	C	硬	橙-黄橙	底部赤変(被熱?)
2	SH03	主柱穴P2	1/5	甕	(17.2)口径	B	硬	にぶ黄橙	外面粗いハケ
3	SH03	主柱穴P2	2/5	鉢	(17.2)口径	B	比硬	灰黄	底-胴接合痕
4	SH03	南辺土坑	1/6	甕	(16.8)口径	B	比硬	赤橙・黄橙	二種類の粘土使用
5	SH03	主柱穴P2	1/6	器台	(17.0)口縁	C	比軟	にぶ黄橙	外面ミガキ
6	SH03	主柱穴P1	100%	器台	4.6くびれ径	A	硬	明黄橙	磨滅、穿孔3
7	SH03	中央土坑	1/8	高杯	(18.8)口径	C	軟	黄褐	屈曲部やや肥厚
8	SH03	中央土坑	100%	高杯	4.0くびれ	A	軟	にぶ黄橙	半分に割れ、片側二次被熱
9	SH03	主柱穴P2	100%	高杯	3.9くびれ径	A	硬	にぶ黄橙	外面ナデ
10	SH03	下層	1/5	器台?	(16.7)口径	B	比硬	にぶ黄橙	口縁端部凹線
11	SH03	下層-床	1/6	壺	(16.2)口径	B	軟	灰黄	全体的に磨滅
12	SH03	床面直上	1/4	壺	(13.2)口径	A	硬	灰黄	全面ナデ
13	SH03	床面直上	1/5	鉢	(15.0)胴部最大径	B	比軟	黄橙	全体的に磨滅
14	SH03	北東下層	1/5	甕	(13.8)胴部最大径	A	硬	赤橙	外面磨滅、内面ナデ
15	SH03	床面直上	1/2	甕	(15.8)口径	A	硬	黄橙	外面タタキ→粗いハケ
16	SH03	床面直上	1/4	甕	(14.0)口径	A	比硬	黄橙	受け口
17	SH03	床面直上	1/4	甕	(15.4)口径	C	比硬	黄橙	全体が磨滅
18	SH03	床面直上	1/3	甕or鉢?	(16.3)口径	A	比硬	灰黄	多条沈線、斜行列点
19	SH03	床面直上	1/3	鉢	(17.6)口径	B	軟	灰黄	二種類の粘土使用
20	SH03	床面直上	100%	鉢	15.3口径	B	比軟	赤橙	肩直線文列点文、赤変、円形剝離痕
21	SH03	床面直上	100%	甕?	2.6底径	C	硬	にぶ黄橙	凹底
22	SH03	南東下層	100%	甕?	4.0底径	C	硬-軟	淡黄橙	底部中央に凹部、外面ナデ、内面磨滅
23	SH03	床面直上	100%	壺or甕or鉢?	4.5底径	A	硬	灰褐	上げ底
24	SH03	床面直上	100%	鉢?	4.9底径	C	硬	灰白	高台状底
25	SH03	上層	1/6	高杯	23.8口径	C	軟	にぶ黄橙	全体が磨滅
26	SH03	床面直上	1/8	高杯	(25.1)口径	B	比硬	赤紫-淡黄橙	二次被熱の可能性
27	SH03	床面直上	100%	高杯	13.4裾直径	A	比硬	にぶ黄橙	外面ミガキ、脚柱内擦痕
28	SH03	床面直上	100%	高杯	3.8くびれ径	B	比軟	黄橙	脚内シボリ、穿孔3
29	SH03	北西上層	100%	高杯	4.3くびれ径	A	硬	にぶ黄橙	外面ミガキ、穿孔3
30	SH03	北東上層	1/6	器台	(16.8)口径	A	硬	淡黄橙	口縁端円形刺突
31	SH03	北西下層	100%	器台	3.3くびれ径	A	硬-軟	淡黄橙	内面ケズリ
32	SH03	床面直上	5/6	器台	4.2くびれ径	A	軟	にぶ黄橙	穿孔3
33	SH04	下層	1/3	壺	(14.4)口径	A	硬	茶褐	多条沈線、刻み目、突帯
34	SH04	上層	100%	高杯	3.6くびれ径	A	硬	にぶ黄橙	外面ナデ、穿孔3
35	SH06	主柱穴P1	1/5	甕	18.8口径	B	軟	暗茶褐	粗いハケ、13次25と類似
36	SH06	集石下層	1/5	甕	(17.7)口径	A	比硬	灰茶褐	口縁面取り
37	SH06	主柱穴P1	100%	高杯	4.0くびれ径	A	硬	暗赤茶褐	脚内面ケズリ
38	SH06	中-下層	80%	鉢	15.6口径	C	硬	淡黄橙	肩多条直線文、波状文
39	SH06	下層	80%	器台or高杯?	(10.6)裾径	C	軟	灰黄	穿孔3
40	SH06	集石下層	100%	壺?	3.4底径	A	硬	暗茶褐	粗いハケ
41	SH06	東南下層	1/6	鉢	13.8胴部最大径	A	軟	明灰黄	凹底
42	SK14		90%	壺	8.8頸径	B	軟	淡黄橙	突帯
43	SK14		2/3	壺	15.7口径	A	軟	灰黄	突帯
44	SK14		1/2	鉢	(16.1)口径	B	軟	にぶ黄橙	二種類のハケを施す
45	SK14		1/8	手あぶり形	(16.2)口径	A	硬	灰茶褐	底部付近ケズリ

46	SK14		80%	甕or壺?	13.0口径	C	比軟	黄褐	外タタキ→粗いハケ、内ハケ
47	SK14		80%	甕	14.0口径	A	硬	灰黄	外面タテハケ
48	SK14		100%	高杯	4.0くびれ径	A	硬	赤橙	脚内回転痕、穿孔3
49	SK14		70%	器台	16.8口径	C	硬	橙	杯外ハケ内ミガキ、脚外ミガキ内ケズリ
50	SK14		70%	器台	17.3口径	A	硬-軟	赤橙	ミガキ
51	SK14		90%	蓋?	7.05口径	A	比硬	にぶ黄橙	器種不明(高杯のへそ?)
52	SK14		100%	壺	16.7直径	A	硬	にぶ黄橙	多条沈線、浮文、刻み目、突帯
53	SK14		80%	壺	17.7直径	A	硬	黄橙	多条沈線、浮文、刻み目、突帯
54	SK14		100%	壺	17.6直径	A	比軟	灰黄-橙	多条沈線、浮文、刻み目、突帯
55	SK14		80%	壺	30.4胴部最大径	A	比軟	淡茶褐	外面胴部上半粗いミガキ、下半ハケ、内面ハケ
56	SK14		50%	壺	5.9底径	A	硬	灰黄	内外ともハケ、底面輪台状
57	SK14		100%	壺	14.3口径	B	軟	灰黄	波状文、肩直線文
58	SK14		60%	壺	15.8口径	C	硬	明灰黄	波状文、突帯、外面ハケ、外下半ハケ→ナデ
59	SK14		2/3	壺	22.3胴径	A	比硬	灰黄	底-胴接合痕、底部ナデ
60	SK14		90%	壺or甕?	16.8口径、5.5底径	C	硬-軟	黄橙-橙	口縁内面にヘラ記号、疑似タタキ(粗いハケ)
61	SH06	集石	1/4	甕	(16)口径	C	硬	淡黄橙	外面ナデ
62	SH06	集石	1/5	甕	15.7口径	C	硬	灰黄	外面肩部浅いケズリ
63	SH06	中層	30%	甕	(13.1)口径	C	比硬	灰黄	外面粗いハケ
64	SH06	集石	1/4	甕	3.6底径	B	比硬	茶褐	外面の断続的なタテハケ、底部赤変
65	SH06	集石	100%	甕	4.3底径	B	軟	乳白	外面タタキ、輪台状底
66	SH06	集石	1/5	甕or壺?	19.2口径	C	硬-軟	淡橙	外面タタキ、内面ハケ
67	SH06	集石	25%	壺	(5.7)底径	A	比軟	にぶ黄橙	底-胴接合痕明確
68	SH06	中層	1/9	甕	(19.4)口径	D	硬	暗茶褐	生駒西麓産庄内式甕
69	SH06	中層	1/12	甕	(14.7)口径	D	硬	暗茶褐	生駒西麓産庄内式甕
70	SH06	北西上層	1/8	甕	(16.2)口径	D	硬	暗茶褐	生駒西麓産庄内式甕
71	SH06	集石	3/4	壺	8.9頸径	B	軟	淡黄橙	外面突帯貼付→ハケ
72	SH06	集石	10%	鉢	15.3口径	B	比軟	灰黄	外面粗いハケ
73	SH06	中層	1/3	鉢?	(11.5)胴部最大径	C	軟	にぶ黄橙	肩がさらに立ち上がる可能性あり
74	SH06	集石	1/2	鉢	7.4口径	A	軟	灰黄	内外面ナデ
75	SH06	集石	100%	甕or鉢?	4.8底径	B	硬	灰褐	高台底
76	SH06	集石	1/6	有孔鉢?	3.4底径	B	硬	暗赤茶褐	外面磨滅、内面ハケ、焼成前穿孔、高台状底部
77	SH06	集石	1/5	高杯	(23.4)口径	A	硬	にぶ黄橙	緻密な胎土
78	SH06	集石	100%	高杯	3.6くびれ径	B	比硬	淡黄橙	外ミガキ、内横方擦痕、穿孔3
79	SH06	中層	100%	高杯	4.1くびれ径	A	比硬	淡黄橙	脚内横方向擦痕、穿孔3
80	SH06	不明	100%	器台	3.9くびれ径	B	軟	明灰黄	脚内シボリ
81	SH06	上層	100%	器台	4.1くびれ径	B	軟	灰黄-淡黄橙	穿孔3
82	SH06	南東部	60%	器台	17.7口径	A	比硬	明灰黄	磨滅
83	2ト	ピット内	1/6	甕	(13.6)口径	A	硬	明黄橙	外面タテハケ、内面ケズリ
84	SH01	上層	1/7	二重口縁壺	(24.5)屈曲部径	C	硬	茶褐	内外面横ミガキ、2つ1組の円形刺突
85	SH01	上層	1/7	鉢	(14.6)口径	B	比硬	灰褐	内外面ハケ

86	SH01	上層	100%	有孔鉢	4.0底径	A	比軟	にぶ黄橙	外面粗いタタキ、内面ハケ→ナデ
87	SH01	上層	100%	甕?	5.4底径	A	硬	にぶ黄橙	外面ナデ、内面ハケ
88	SH01	上層	1/2	甕	17.8口径	C	比軟	淡茶褐	1b類
89	SH01	上層	100%	甕	15.2口径	A	硬	茶褐	外面肩ヨコハケ、内面頸部直下までケズリ、2c類
90	SH01	上層	1/4	甕	(13.8)口径	B	比軟	にぶ黄橙	1?類
91	SH01	上層	1/3	甕	(19.0)口径	C	硬-軟	灰茶褐	1?類
92	SH01	上層	1/2	甕	17.1口径	C	比軟	灰黄	1b類
93	SH01	上層	1/8	甕	(14.0)口径	C	比軟	灰黄	2?類
94	SH01	上層	1/4	甕	(16.6)口径	C	比硬	淡灰黄	2a類
95	SH01		1/8	甕	(17.2)口径	C	比硬	灰白	2?類
96	SH01	上層	1/2	甕	15.8口径	B	比硬	淡茶褐	2?類
97	SH01	上層	1/8	甕	(18.4)口径	B	比硬	淡灰黄	口縁端部ひねりだし、内面ナデ、肩外面ヨコハケ
98	SH01	上層	1/5	甕or壺?		C	比軟	淡灰黄	内湾口縁、肩部内面指圧痕
99	SH01	上層	100%	鉢(碗)	(11.8)口径	C	軟	淡灰黄	内外面ナデ
100	SH01	上層	70%	小形丸底壺	8.6口径	C	軟	灰白	内外面ナデ、底部内面オサエ
101	SH01	上層	70%	小形丸底壺	8.9口径	B	硬	暗茶褐	胴部外面ハケ→ナデ、頸部内面沈線
102	SH01	上層	60%	小形丸底壺	10.5口径	C	硬	灰褐	内外面ナデ
103	SH01	上層	80%	高杯	(17.3)口径	A	軟	灰白	全体的に磨滅
104	SH01		20%	高杯	(16.6)口径	C	比硬	淡黄橙	内外面ナデ、脚杯接合部オサエ、杯-脚接合面シワ
105	SH01	上層	60%	高杯	19.7口径	C	比軟	淡灰黄	杯内面黒色、脚との接合部オサエ、脚内ナデ
106	SH01	上層	40%	高杯	(16.1)口径	C	硬-軟	淡灰黄	全体的に磨滅
107	SH01	上層	1/4	高杯	(18.0)くびれ径	C	比軟	淡灰黄	全体的に磨滅
108	SH01	上層	100%	高杯	3.2くびれ径	B	硬	にぶ黄橙	外面ナデ、内面シボリ→オサエ
109	SH01	上層	100%	高杯	3.1くびれ径	A	硬	淡灰黄	外面タテハケ→ミガキ?ナデ?、内面ケズリ
110	SH01	上層	80%	高杯	18.1口径	C	比硬	赤灰	杯内外面ナデ、脚内シボリ、外ハケ→ナデ
111	SH05	埋土	100%	甕	15.7口径	C	軟	灰黄	1a類
112	SH05	南辺土坑	100%	甕	14.2口径	C	硬-軟	淡灰黄	2b類
113	SH05	埋土	100%	甕	17.9口径	C	比硬	灰白	2b類
114	SH05	南辺土坑	75%	高杯	12.9裾径	A	軟	淡黄橙	外面ナデ(ミガキ?)、内面ナデ
115	SH05	土坑上面	70%	甕	16.6口径	B	比軟	淡黄橙	1b類
116	SK07		4/7	甕or壺?	16.9口径	A	軟	にぶ黄橙	1?類
117	SK08		1/7	甕	(14.8)口径	B	硬	茶褐	2a類
118	SK08		1/5	甕	(15.6)口径	C	比硬	灰褐	2b類
119	SK08		1/3	甕	(16.9)口径	C	比軟	灰白	2b類
120	SK08		1/4	甕	12.8口径	C	比硬	灰白	2b類
121	SK08		60%	甕	15.4口径	C	比軟	淡黄橙	2b類
122	SK08		100%	高杯	16.2口径	A	硬	黄橙-茶	杯外ナデ、内ハケ→ナデ、脚外ナデ、内シボリ・ナデ
123	SK08		100%	甕	17.0口径	B	硬	茶褐	1a類
124	SK08		1/2	甕	13.6口径	C	硬	灰茶褐	1a類
125	SK08		30%	甕or壺?	20.6口径	C	比軟	灰黄	1a類
126	SK09		2/5	甕	(15.8)口径	C	軟	淡黄橙	2?類

127	SK09		1/4	甕	(19.2)口径	C	軟	灰黄	1?類
128	SK09		1/4	甕	(18.0)口径	C	硬	茶褐	1b類
129	SK09		100%	甕	18.2口径	C	軟	灰白	1a類
130	SK09		1/4	二重口縁壺	(26.8)屈曲部径	B	比軟	暗茶褐	外面ナデ、内面磨減
131	SK09		70%	小形丸底壺	8.4口径	C	硬	灰茶褐	胴部外面ハケ→ナデ、内面ナデ底部内面オサエ
132	SK09		1/2	高杯	15.4裾径	C	軟	淡黄橙	全体的に磨減
133	SK09		100%	高杯	15.0裾径	C	硬-軟	灰黄	内外ともにミガキ風のナデ
134	SK09		100%	高杯	3.0くびれ径	C	硬	明茶褐	脚外ミガキ風のナデ、内シボリ・ナデ、穿孔4
135	SK09		1/8	二重口縁壺	(23.8)屈曲部径	A	比硬	茶褐	内外面ハケ→ナデ
136	SK12		1/4	高杯	24.2口径	C	軟	淡黄橙-灰黄	杯内下半はミガキ→部分ナデ
137	SK12		100%	高杯		C	軟	白-灰黄	杯-脚接合に刻み目使用
138	SK12		100%	高杯	3.4くびれ径	A	比硬	にぶ黄橙	外面ミガキ、内面シボリ
139	SK12		100%	鉢(椀)	13.8口径	C	軟	灰黄	底面ヘラ記号
140	SK12		80%	甕		B	硬	淡黄橙	底部内面円形圧痕

(観察表の見方について)

番号は、本文中で付した個体番号を示す。残存は基本的に図化した部分の体積にしめる残存部位の体積を百分率表示で記入した。また、それ以外は口縁、頸部など、最もよく残った部位の長さ、その部位で復原される円周の長さとの比率を分数表示で記入した。混和された砂礫は、A. 石英、長石、雲母などを主体とするもの、B. 石英、長石と同じ量の堆積岩類(チャート、粘板岩、頁岩、硬砂岩)を含むもの、C. 堆積岩類主体のもの、D. 角閃石、長石、雲母を多く含むもの(生駒西麓産といわれている)、の四種類で表示している。色調は、マス・カラーを示している。また、「にぶ」としたのは「にぶい」、「比」は「比較的」のそれぞれ略記である。

口縁端部形態：1. 肥厚させまるくおさめるもの。2. 口縁端部にナデを施し、外側へ端部を拡張・面を持たせるもの。

頸部内面調整：a. 縦方向に強い指ナデが入るもの。b. ゆるやかにナデがかけられているもの。c. ケズリが頸部直下まで施されるもの。

両者の組み合わせをもとに甕を分類する。竪穴式住居跡1出土の甕は、1b類(88・92)、2a類(94)、2c類(89)が確認される。また、口縁端部形態が1類(90・91)、2類のもの(93・95~97)があり、内湾口縁で口縁端を先細りにまとめる例(98)も存在する。肩部外面の調整は、89がヨコハケ、92・94はタテハケである。99は鉢で、口縁端部に面を持つ。100~102は、小形丸底壺である。すべて内外面にナデ調整を施す。ただし、101は胴部外面にハケの痕跡が残り、ナデが不完全といえる。103~109は、高杯である。これらの杯部と脚部の接合部外面には指オサエの圧痕が見られる。また、104の杯部下端に見られるシワは、杯-脚接合の際、接着面積を広くするための技法かもしれない。104・110は、杯部をナデで仕上げる。杯部に対し脚部は差異が大きい。105は、脚内にナデを施す。108は、外面にナデ、内面にシボリ→オサエの調整を持つ。109は、外面をミガキ風にナデを施し、内面にケズリが入る。110は脚内にシボリ、外面にハケ→ナデの痕跡をとどめる。

竪穴式住居跡5出土の土器 甕は、1a類(111)、1b類(115)、2b類(112・113)に分かれる。これらの肩部外面の調整はタテハケで、115は肩部に3か所の刺突の痕跡がある。また、115には

胴部最大径以下の部分に煤の付着が認められる。114の高杯は、外面にミガキ風のナデ、内面にナデを施す。111・113は埋土、112・114・115は南辺土坑から出土している。

土坑出土の土器 土坑1(116)、土坑2(117~122)、土坑3(131~134)から多くの土器が出土した。甕は、1a類(123~125)、1b類(128・129)、2a類(117)、2b類(118~121)のほか、口縁端部形態に1類(116・127)、2類(126)がある。肩部外面の調整は、120・123・128にヨコハケが見られるが、ほとんどがタテハケである。120・121は、煤が胴部下半に確認される。117は115と同様、肩部に3か所の刺突が見られる。130は二重口縁壺である。内傾する口縁部が特徴である。内外面ともに磨滅が著しく、調整は不明である。131は、小形丸底壺である。胴部外面にハケが残るが、基本的に器面調整はナデによる。122・132~134は、高杯である。122は、杯部をヨコナデで仕上げる。杯の内底部にはハケが残り、ナデ消しが完全ではない。脚部外面にはミガキ風ナデが施され、脚柱内部ではシボリ痕の後、ナデが施される。胎土は、比較的精良で硬く焼け締まる。穿孔は認められない。同様の脚部調整は、133・134にも認められる。ただし、134は穿孔を4か所持つ。

その他 135は、竪穴式住居跡3の南東部上層から出土した二重口縁壺である。内外面ともにハケ調整後、ていねいにナデが施される。136~140は、土坑6から出土した。139は、底面にヘラ記号を持つ鉢である。器面は磨滅しているが、ナデ仕上げと考えられる。140は、布留式の甕の底部である。外面にヨコハケが顕著なほか、内面には円形圧痕、ケズリが認められる。136~138は、高杯である。136は、杯内底部にハケをとどめるが、内外面ともにヨコナデで仕上げる。137は、脚部との接着面に放射状にヘラで刻みが入れられており、杯部と脚部の接着面積を広くする効果を持っていたと考えられる。138は、外面をミガキ風ナデで仕上げ、内面にはシボリ痕が残る。

(杉本厚典)

6. ま と め

今回の調査で検出された遺構は、竪穴式住居跡6基、土坑・土器溜まり6か所、集石遺構1か所、ピットなどである。植物園北遺跡の集落の一部を明らかにする上で貴重な資料を得た。以下に調査成果を簡単に記述する。

①出土土器から、竪穴式住居跡3・6は弥生時代終末~古墳時代初頭(庄内式期併行)に、竪穴式住居跡1・5は古墳時代前期(布留式期後半)と考えられる。竪穴式住居跡4は、方位と出土土器から竪穴式住居跡3と同時期と推定される。これらの住居跡は、切り合い関係・方位と出土遺物から、住居跡2→住居跡6・住居跡3・住居跡4→住居跡1・住居跡5と変遷したようである。1トレンチでは、先に造られた住居跡は粘砂土層面を選んでいく傾向がみられ、後に造られた竪穴式住居跡は、砂礫層面に構築され貼り床などはみられない。また、2トレンチのピット群には竪穴式住居跡3に平行または直交するものがみられ、何らかの企画が存在した可能性がある。

②頸部に突帯をめぐらし、口縁外面に多条沈線を入れ浮文を貼り付け、浮文上や口縁の上縁・

下縁に刻み目を入れる広口壺をはじめ、受け口状口縁の鉢など、近江の影響を強く受けたと考えられる土器群が集石遺構内の土坑14からまとまって出土した。前者の土器は、山城地域ではほとんど出土例がなく、地域間交流を考える上で重要な資料となる。

③堅穴式住居跡3の壁沿いにみられる小坑は、壁板を止めた杭跡と推定され、検出例が少なく貴重な資料である。

(石尾政信・杉本厚典)

注1 補助員・整理員(敬称略・順不同)

杉本厚典、山田一郎、森脇一雄、国重佐夜子、牧 淳子、河合 忍、岡 浩正、田畑好章、尾田洋子、小野達哉、大野晃嗣、丸谷はま子、西川悦子、寺尾貴美子

注2 小森俊寛・原山充志・長戸満男「植物園北遺跡」(『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1987

注3 「植物園北遺跡の調査(第9次)」(第49回京都市考古資料館文化財講座資料) 1991

注4 辻 祐司「植物園北遺跡」(『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1987

注5 高 正龍『植物園北遺跡発掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990

高 正龍・平方幸雄「植物園北遺跡1」(『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994

注6 注3に同じ。

注7 高橋 潔「植物園北遺跡」(『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994

注8 長谷川行孝・南 孝雄『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告』ノートルダム女子大学 1991

注9 岸岡貴英ほか「植物園北遺跡第13次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注10 馬瀬智光「植物園北遺跡No.63 No.64 No.65」(『京都市内遺跡試掘調査概報』平成6年度 京都市文化観光局) 1995

参考文献

家崎孝治「植物園北遺跡(1)」(『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1984

久世康博「植物園北遺跡(2)」(『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1984

長戸満男・小森俊寛「植物園北遺跡2」(『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994

竹原一彦「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

7. 井尻遺跡発掘調査概要

1. はじめに

井尻遺跡は、宇治市伊勢田町井尻に所在する。遺跡は、旧巨椋池の南岸部に立地し、東方から派生した宇治丘陵の縁辺部に位置する。周辺からは、これまでに須恵器や土師器が採集されており、平成5年度に今回調査地の北側隣接地で行われた宇治市教育委員会の発掘調査では、顕著な遺構は発見されなかったものの、古墳時代から中世にかけての遺物が出土し、近隣にこの時期の集落跡が広がっていると予想されていた^(注1)。

今回の調査は、京都府の南部地域職員住宅(仮称)建設に伴い、京都府知事公室の依頼を受けて実施した。調査地は、宇治市伊勢田町井尻8-1他に所在する。現地調査の期間は、平成7年10月26日から平成8年1月17日までである。調査面積は、約800m²である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美、同調査員八木厚之、森下 衛が担当した^(注2)。なお、調査にかかる経費は、京都府知事公室が負担した。また、調査にあたっては、京都府教育委員会、宇治市教育委員会などの関係機関から指導・助言を得た。記して感謝したい。

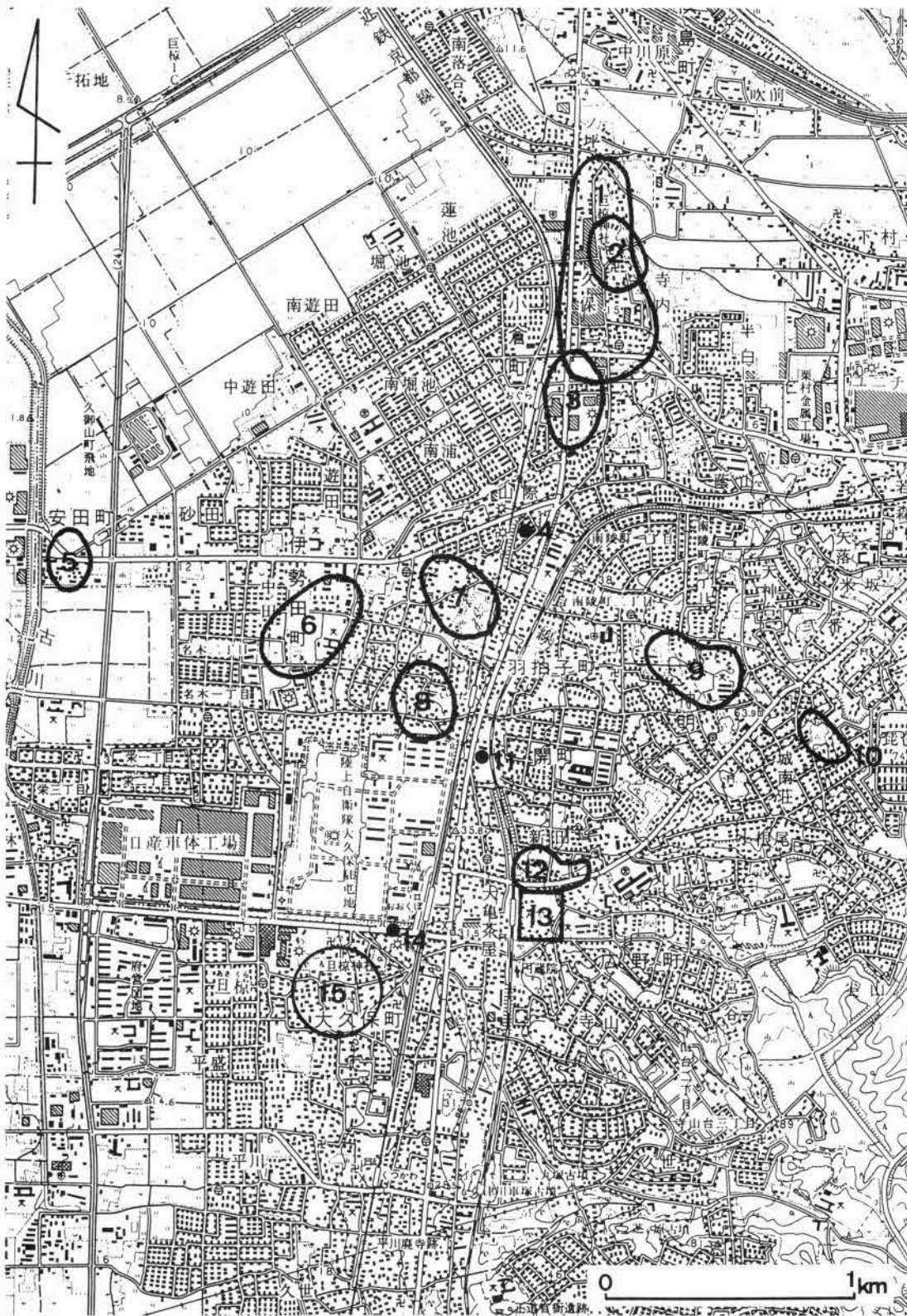
2. 位置と環境

井尻遺跡は、先述のように宇治丘陵の東縁部、旧巨椋池の南岸部に位置する。但し、宇治丘陵東縁部の集落跡(若林遺跡・中山遺跡など)の多くが、標高15m前後に形成された段丘面上の台地部に立地するのに対し、井尻遺跡は、そこから数m下がった沖積低地部に立地する数少ない遺跡である。

一方、この西方部には旧名木川とされる通称山川が南北に流れ、旧巨椋池にそそいでいた。山川は、宇治丘陵の軟質な花崗岩風化土を多量に堆積させ、流路が天井川となると同時に、河口部には広大な三角洲を形成していた。こうした状況からみて、この遺跡は旧巨椋池の湖岸線の変遷と密接に関連して営まれた遺跡であることが容易に推察される。このため、今回の調査では、単に集落跡の実態の解明のみならず、旧巨椋池南岸の変遷を含めた一帯の歴史的環境を復原する上で、多くの情報が得られるものと期待された。

井尻遺跡の周辺地域には、弥生時代から中世までの数多くの遺跡が存在している。

弥生時代の遺跡には、巨椋神社東遺跡、神楽田遺跡、野神遺跡などがある。巨椋神社東遺跡では、弥生時代中期の土器、扁平片刃石斧、石鏃が出土している。神楽田遺跡は、旧巨椋池の東岸に位置し、弥生時代後期の土器が出土している。野神遺跡では、サヌカイト石鏃、磨製石鏃が出土している。それ以外では、石塚遺跡で石鏃が確認され、また若林遺跡でも弥生土器が出土しており、弥生時代の集落跡の存在が考えられる。



第72図 調査地及び周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|----------|----------|-------------|
| 1. 小倉環濠集落 | 2. 巨椋神社東遺跡 | 3. 神楽田遺跡 | 4. 西山古墳 | 5. 安田環濠集落 |
| 6. 井尻遺跡 | 7. 若林遺跡 | 8. 中山遺跡 | 9. 石塚遺跡 | 10. 野神遺跡 |
| 11. 伊勢田塚古墳 | 12. 一里山遺跡 | 13. 広野廢寺 | 14. 北山古墳 | 15. 大久保環濠集落 |

古墳時代の遺跡としては、中山遺跡などで集落跡の一部が確認されているほか、西山古墳、伊勢田塚古墳、北山古墳などの単独墳が宇治丘陵東縁の台地上に点在する。西山古墳は、直径約12mの円墳であり、かつては横穴式石室が開口していたと伝えられ、伊勢田塚古墳は、合口式四柱屋根型陶棺を直葬するものである。

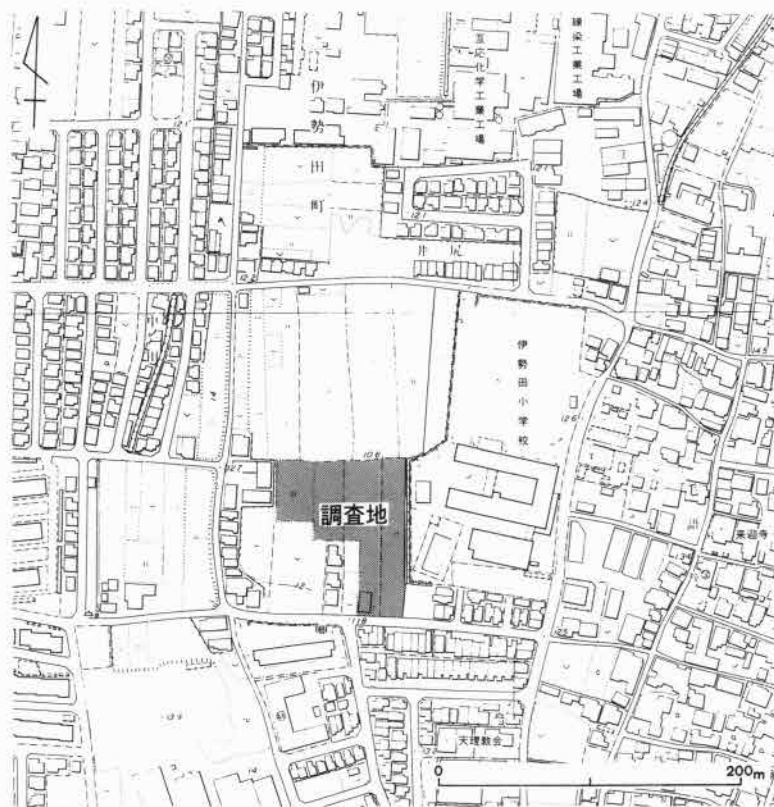
飛鳥時代から奈良時代の遺跡として、広野廃寺がある。この遺跡は、旧東山道が木津川東岸を北上した後、宇治橋方面へ大きく北東方向へ屈曲したとされるあたりに立地し、川原寺式、東大寺式の軒瓦が多数出土している。

なお、井尻遺跡が近接する旧巨椋池は、古くは宇治川・木津川・桂川の三河川が直接流入し、下流淀川の水量調節機能を果たす遊水池であった。また一方で、旧巨椋池の西端部には、淀津、東岸には宇治津・岡屋津、北方に前滝津などがあり、近江・丹波・大和・摂津・河内などに通じる水上交通の中樞をなしていたことが、『正倉院文書』や『延喜式』の記事からうかがわれる。ところが、文禄3(1594)年豊臣秀吉の伏見築城に伴う湖岸の改修により状況は一変した。太閤堤と総称される多くの堤防が旧巨椋池の周囲及び池中に築かれ、これらの機能を一挙に失ったのであった。^(注3)

3. 調査の概要

調査では、まず住宅棟の建設予定地2か所に発掘区を設定した。調査地北側の東西方向のトレンチを第1トレンチ(東西50m・南北11m)、南側の南北方向のトレンチを第2トレンチ(東西12m・南北23m)とした。

掘削は、重機によって行った。第1トレンチでは、地表下約1.2mまで盛り土があり、その下部に近年までの水田耕作土が約15cmの厚さで存在した。その下には、黄灰色土層、暗灰褐色砂礫層が認められたが、遺物は含まれなかった。続く暗灰褐色粘質土層(第5層)で、近代の陶磁器の細片を確認した(地表下約1.6m)。ここで一旦掘削を止め、遺構の有無を確認するために精査を行ったところ、江戸時代末期～明治時代の水田



第73図 調査地位置図

に伴う南北畦畔及びこれに並行して走る溝を1条検出した。

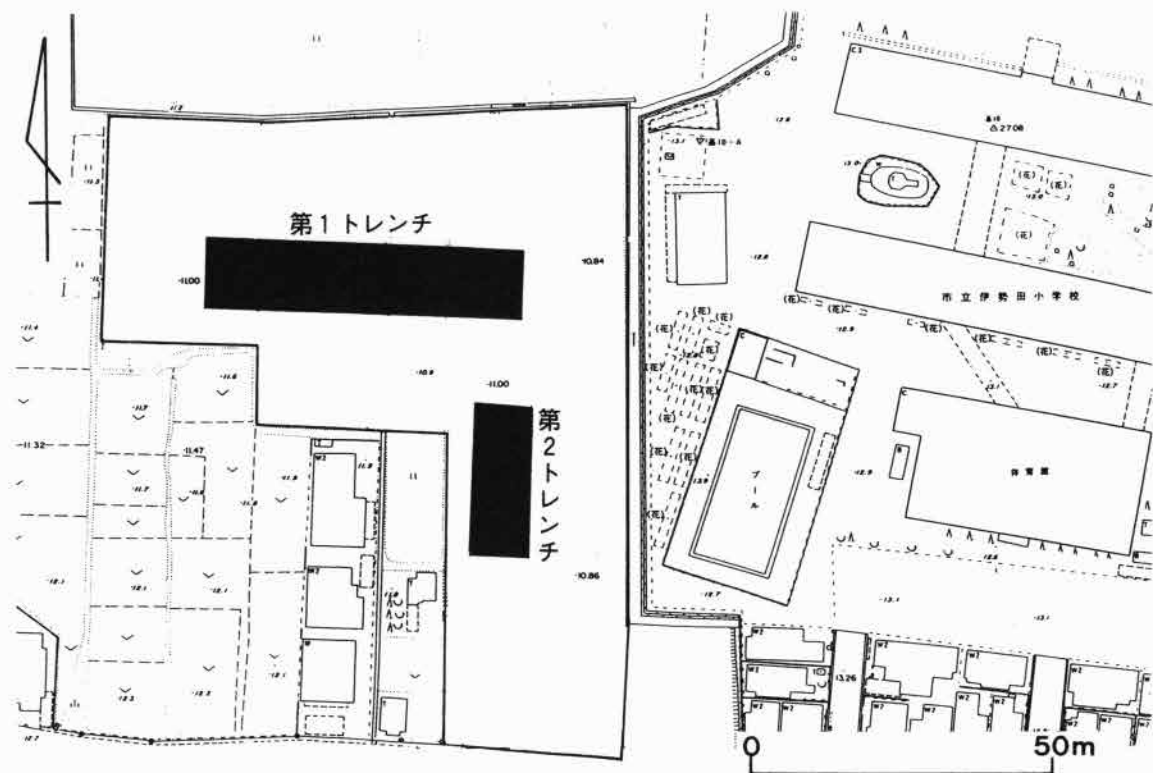
調査では、さらにその下層で遺構の存在が予想されたことから、西端から約12mまでの部分でこの面の調査を行うこととし、これ以東の部位ではさらに下層の調査を進めることとした。その結果、暗灰褐色粘質土層の下の灰白色粘土層(第6層)上面で上層部と同様、近世の水田に伴う南北畦畔を1条確認した。しかし、この面の水田遺構も、出土遺物などから近世以降のものと判断され、ここでも東西約10m分でのこの面の水田遺構に係る記録作成を行うこととした。

続いて、地表下約2.3mの淡黒灰色粘土層(第8層)に至り、この上面部に土師器片・瓦器片が包含されていることを確認した。このため、東端部までの残り約28m分について、この淡黒灰色粘土層を除去し、その下の明灰褐色粘質土層(第9層)上面で遺構精査を行うこととした。作業は、重機によって淡黒灰色粘土層上半部を除去し、その後人力によってその下半部を掘削した。この間、淡黒灰色粘土層中からはわずかに土師器片の出土を認めるにとどまった。

その後、明灰褐色粘質土層上面の精査に移った。ここでは、調査区の東端近くを中心に、土坑状に黒色に変色する部分が数か所認められた。このため、これが遺構ではないかと考え掘削を行ったが、いずれの変色部分も遺物は確認されず、土色の変化も上面からのしみこみのような状況であり、遺構とは認識しえなかった。

また、これとは別に明灰褐色粘質土層上面で杭の痕跡と思える木質の残存を数か所で確認した。但し、状況からみて、この上層である淡黒灰色粘土層以上の面から打たれたものと考えられ、時期的には中世以降のものと判断された。

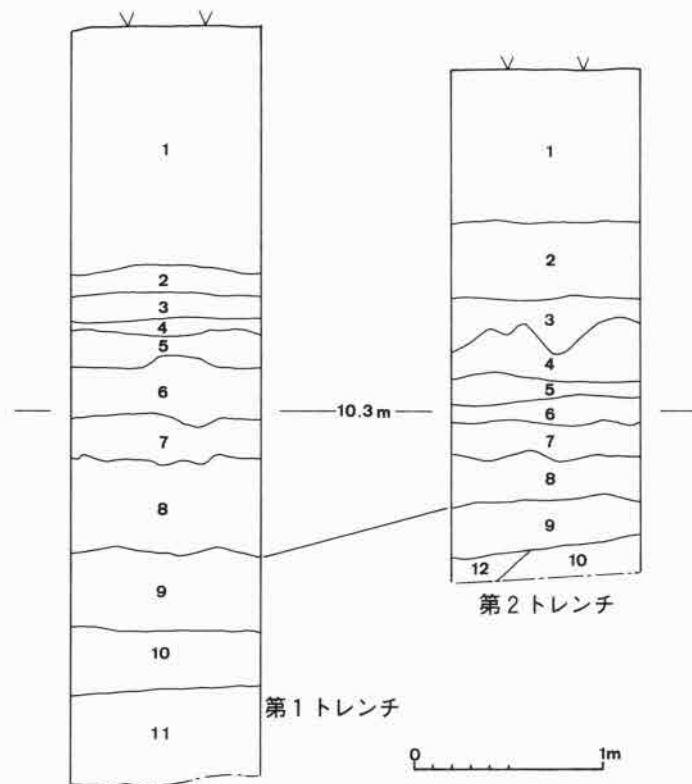
最終的には、トレンチの南辺に沿って断ち割りを行い、以下の土層堆積状況を確認したが、遺



第74図 トレンチ配置図

構・遺物の存在は確認できず、黄褐色砂礫層(第10・11層)の堆積が続くのみであった。

調査では、上記の第1トレンチの記録作成を行った後、引き続き第2トレンチの調査に移った。第2トレンチの土層の堆積状況は、第1トレンチとほぼ同様であり、ここでも最終的に明灰褐色粘質土層の直上で遺構精査を行った。最終的には、このトレンチでも、明灰褐色粘質土層上面で土坑状に黒色に変色する部分を数か所で認め掘削を行ったが、やはり第1トレンチと同様の状況であり、遺構と認識するには至らなかった。その後、ここでもトレンチ内で断ち割りを入れ、これ以下の土層堆積状況を確認したが、やはり遺構・遺物の存在は認められなかった。



第75図 トレンチ土層断面柱状図

- | | |
|------------|------------|
| 1. 盛り土 | 7. 淡青灰色粘質土 |
| 2. 耕作土 | 8. 淡黒灰色粘土 |
| 3. 黄灰色土 | 9. 明灰褐色粘質土 |
| 4. 暗灰褐色砂礫 | 10. 明黄褐色砂礫 |
| 5. 暗灰褐色粘質土 | 11. 暗黄褐色砂礫 |
| 6. 灰白色粘土 | 12. 暗黒灰色粘土 |

4. まとめ

以上、今回の調査では、残念ながら顕著な遺構・遺物を確認することはできず、近世の水田跡を2面、さらに淡黒灰色粘土層(第8層)から中世頃の土器片がわずかに出土したにとどまった。但し、調査によって確認した土層の堆積状況からは、この地域の変遷を知る上で非常に重要な知見を得ることができた。

調査地の西方をかつて山川が流れていたことは先に述べたが、断ち割りによって確認した明灰褐色粘質土層下に堆積する明黄褐色砂礫層(第10層)は、この山川によって堆積されたと考えられる。位置的に山川の形成した三角洲の基部付近に相当することからすれば、当然のことといえるであろう。

その後のこの地域の状況を推測する手がかりとなるのは、淡黒灰色粘土層(第8層)である。この土層の状況から、長らく沼状の地形を呈していたことが想像され、旧巨椋池南岸部の低湿地となっていたことが想像される。出土遺物はわずかであったが、この土層中から中世の土器片が出土しており、沼状地形をなしていたのが中世を中心とした頃であったと判断される。ちょうどこ

の頃には、山川の影響を受けなくなったようであるが、このことが山川の天井川化に大きく関係しているものと思われる。近年、南山城地域のいくつかの天井川で、その形成時期についてわずかながら資料が提示されつつある。これによると、多くが中世以降にその形成が始まったとされている。今回の調査成果は、間接的ながら山川の天井川化もこれらと同様に中世頃から始まった可能性を示すものといえるであろう。

この沼状地形は、淡青灰色粘質土(第7層)の堆積によって埋没している。その堆積状況は、一気に埋めた状況に近く、人為的に沼状地形が干拓されたと判断している。なお、この土層の堆積時期については、上面の水田の時期や干拓直前の巨椋池の範囲などから、昭和の巨椋池干拓に伴うとは考えられず、豊臣秀吉による巨椋池周辺の大改変の頃に近い時期と判断している。

沼状地形が埋没した後、一帯は水田として利用され、近年に至ったようである。ただ、造成前の水田までには少なくとも2面の水田跡が確認され、合計すれば3時期の水田が形成されたこととなる。この中には、洪水によって堆積したと思える暗灰褐色砂礫層(第4層)が一面に広がる部位も確認された。秀吉によって、周辺が大きく改変された巨椋池は増水時に洪水を起こす地域がそれまでとは大きく変化し、改変以後は、池の南岸部でも洪水の大きな被害をおこしたとされる^(注4)。沼状地形を呈していた中世までは洪水の痕跡を認めることができなかった反面、水田が営まれて以後に洪水砂礫層が確認されたことは、こうしたことが背景にあったと考えられるだろう。

(八木厚之)

注1 宇治市教育委員会主事 荒川 史氏の御教示による。

注2 調査参加者は下記のとおりである。

永沢拓志、長谷川洋、上田真一郎、小川正志、北村伊佐子、細山田章子、坪内達雄、福田玲子、奥平廣子

注3 『宇治市史』第1巻 宇治市 1973

注4 注3に同じ。

圖 版



(1) 調査地（青路古墳）遠景（北から）



(2) 調査地掘削後近景（西から）



(1) 調査地（銭塚古墳）近景（南から）



(2) 調査地掘削後（北西から）



(1) 調査地遠景（北西から）



(2) 調査地全景（空撮、南西から）

図版第4 池下城支城跡



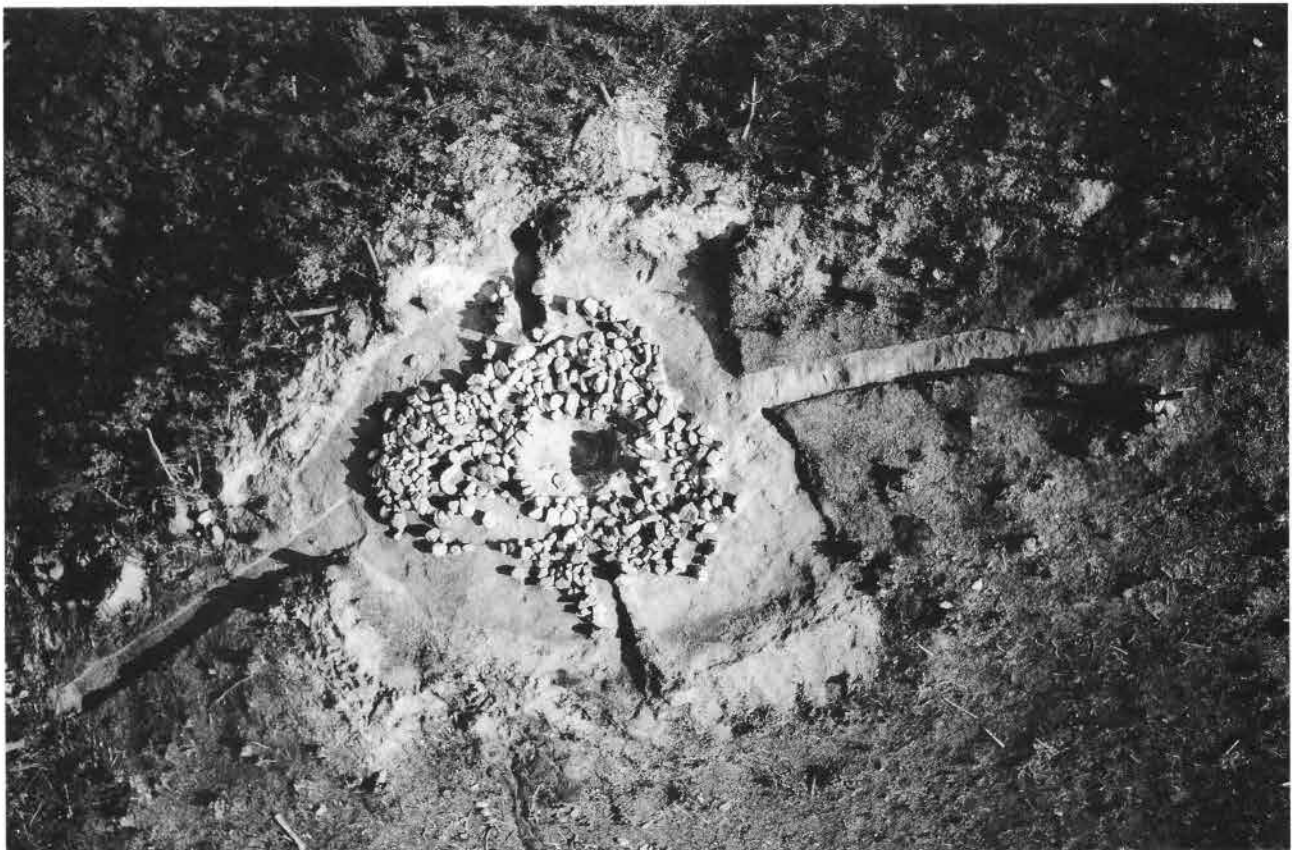
(1) 調査地全景 (空撮、南東から)



(2) 集石遺構全景 (空撮、南から)



(1) 集石遺構全景（空撮、南東方向から）



(2) 集石遺構全景（空撮、垂直方向）



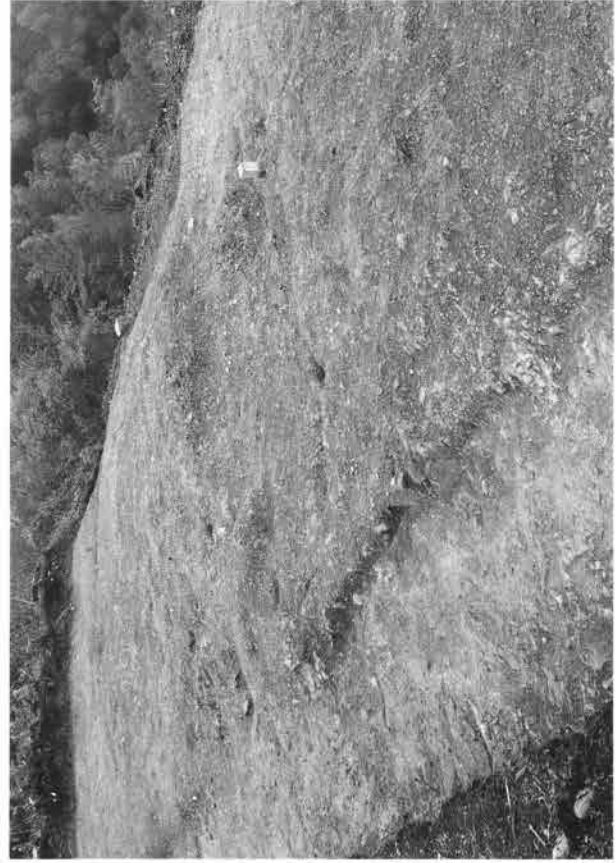
(1) 南堀切掘削状況 (東から)



(2) 南堀切掘削状況 (南西から)



(3) 郭掘削状況 (南東から)



(4) 郭掘削状況 (北から)



(1) 南堀切掘削状況 (北から)



(3) トレンチ掘削状況 (南から)



(2) トレンチ掘削状況 (南東から)



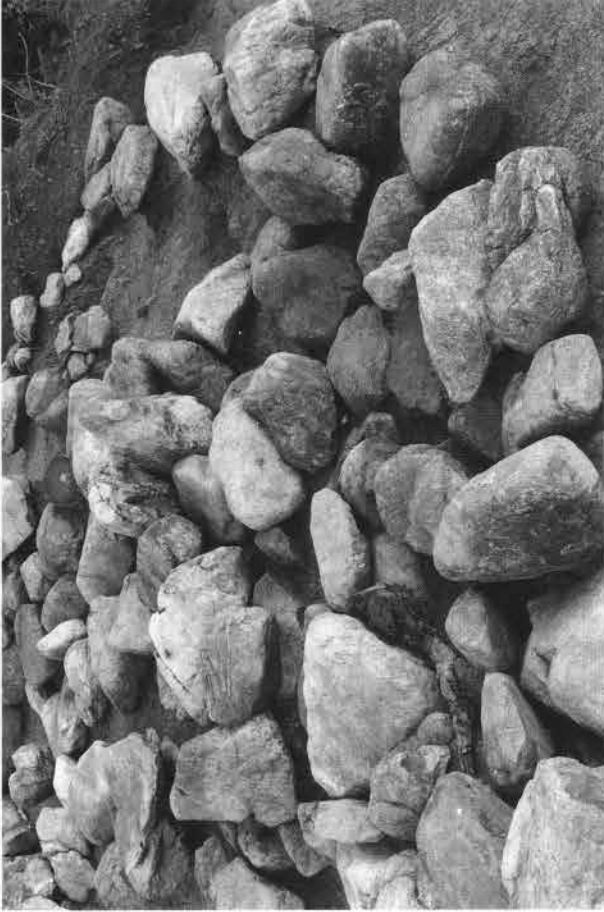
(4) トレンチ掘削状況 (南から)



(1) 集石遺構検出状況（南から）



(2) 集石遺構検出状況（北から）



(3) 集石遺構 (南東部)



(4) 集石遺構 (北東部)



(1) 集石遺構 (南部)



(2) 集石遺構 (北西部)



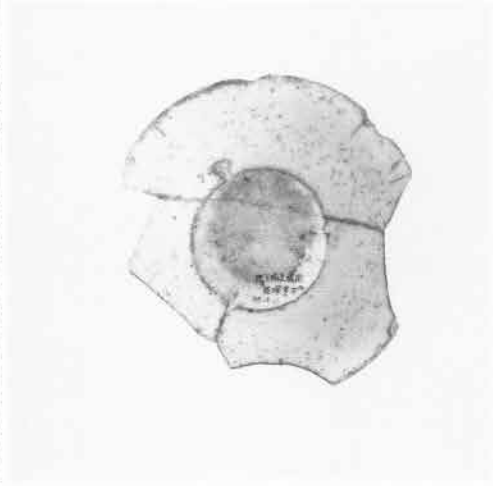
(1) 再掘坑周辺精査状況



(2) 再掘坑精査状況（南から）



(1) 青白磁小皿及び出土状況



(2) 鉄刀及び出土状況





(1) 集石遺構下層検出状況（南から）



(2) 集石遺構調査終了風景（南から）



(1) 調査前風景 (北東から)



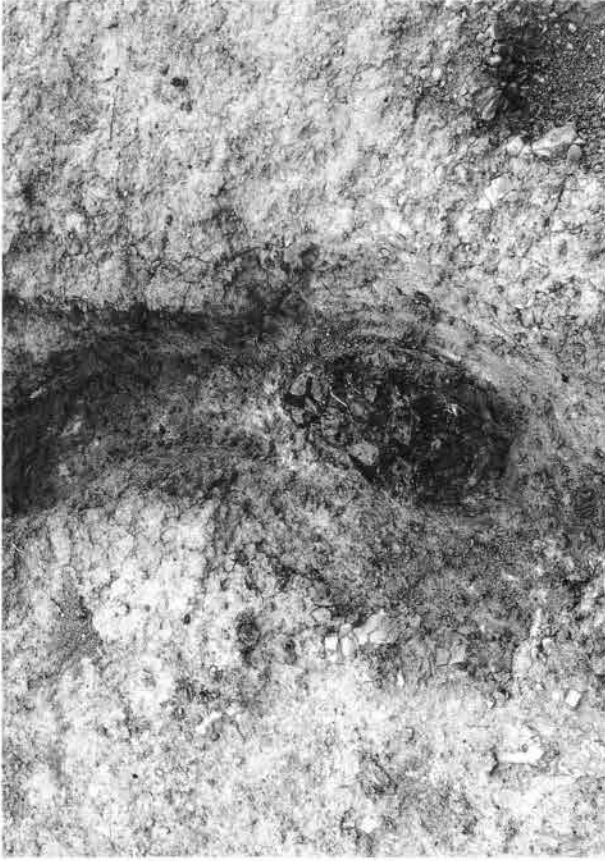
(2) 調査地南部トレンチ掘削状況 (北から)



(1) 遺構検出状況（北東から）



(2) 遺構検出状況（北から）



(3) 土坑内炭化材検出状況



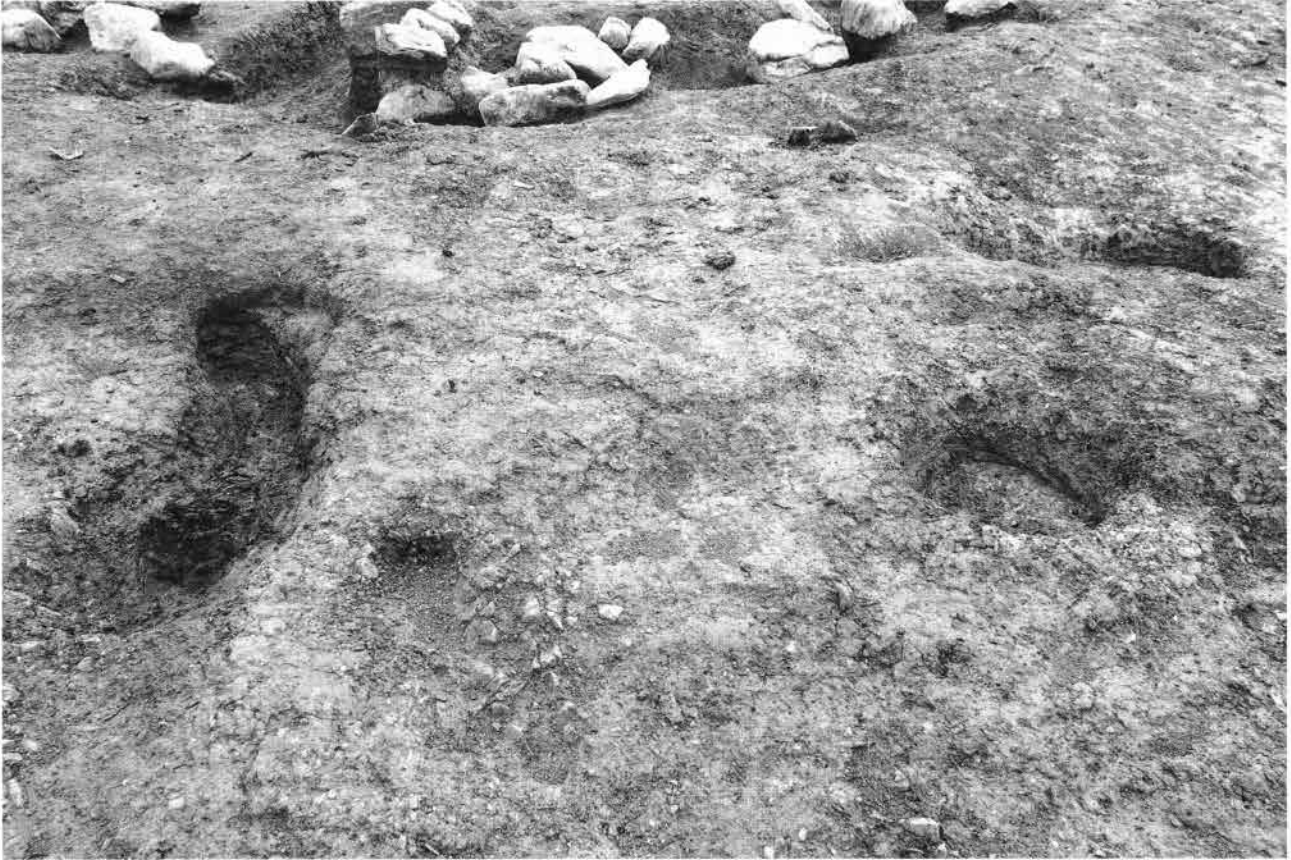
(4) 主体部内炭化材検出状況



(1) 主体部完掘状況（北から）



(2) 主体部完掘状況（東から）



(1) 土坑検出状況（北西から）



(2) 調査完了風景（北西から）



(1) 中堀検出状況（南から）



(2) 中堀検出状況（西から）



(1) 坑列検出状況 (南西から)



(2) 坑列検出状況 (アップ)



(1) 中堀掘削状況 (東から)



(2) 中堀内土層堆積状況 (東から)



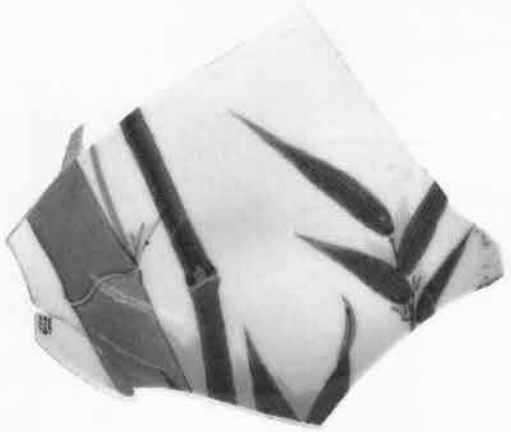
(1) 中堀完掘状況 (南から)



(2) 調査地全景 (北東から)



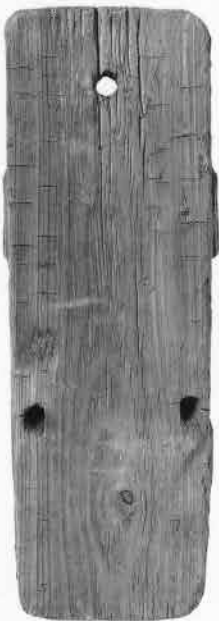
出土遺物 (1)



35



33



46



49



50



52



51



(1) 調査地遠景（西から、調査地の右寄りが上中城跡）



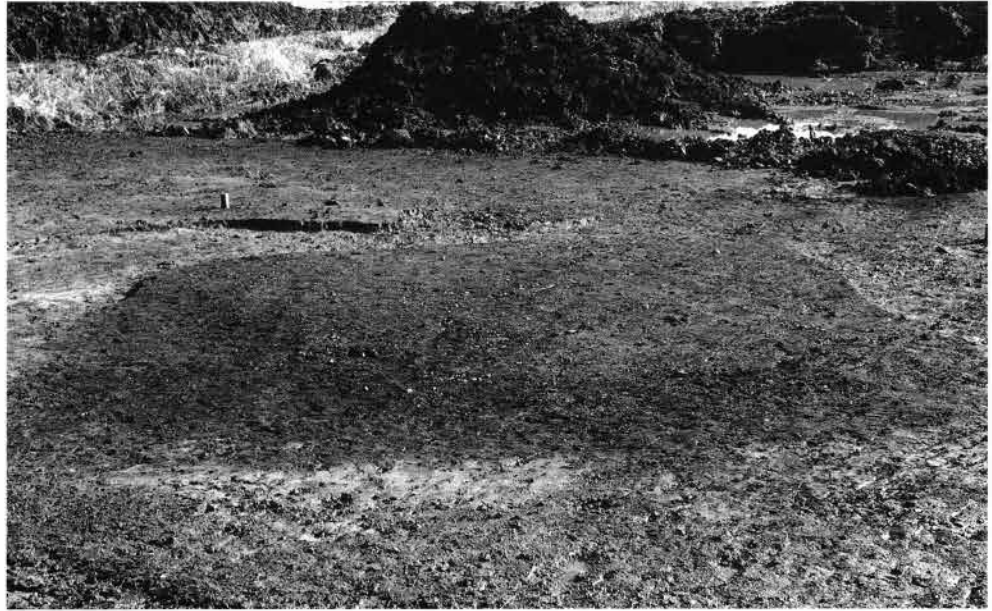
(2) 調査地空中写真（右側が北）



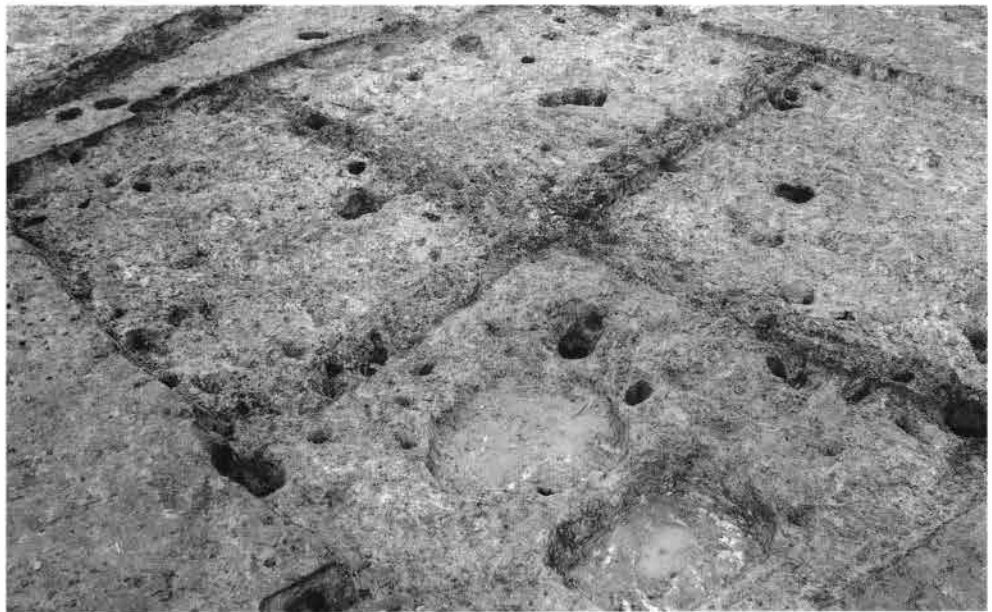
(1) 第2トレンチ調査前（南から）



(2) 第1トレンチ重機掘削状況（北西から）



(1) SH14検出状況
(南西から)



(2) SH14完掘状況
(南西から)



(3) 第1トレンチ
完掘状況
(北西から)



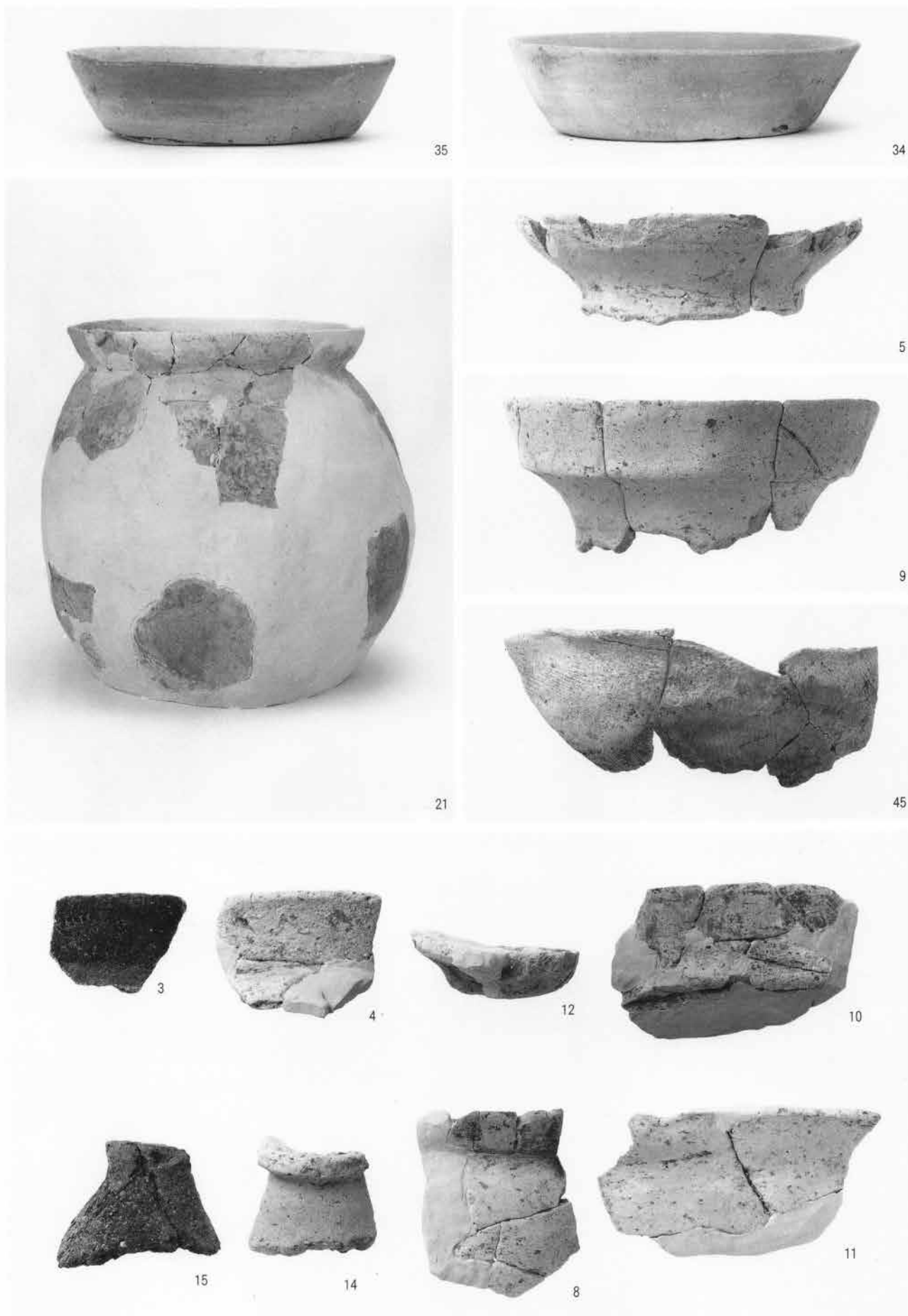
(1) SB10柱根検出状況



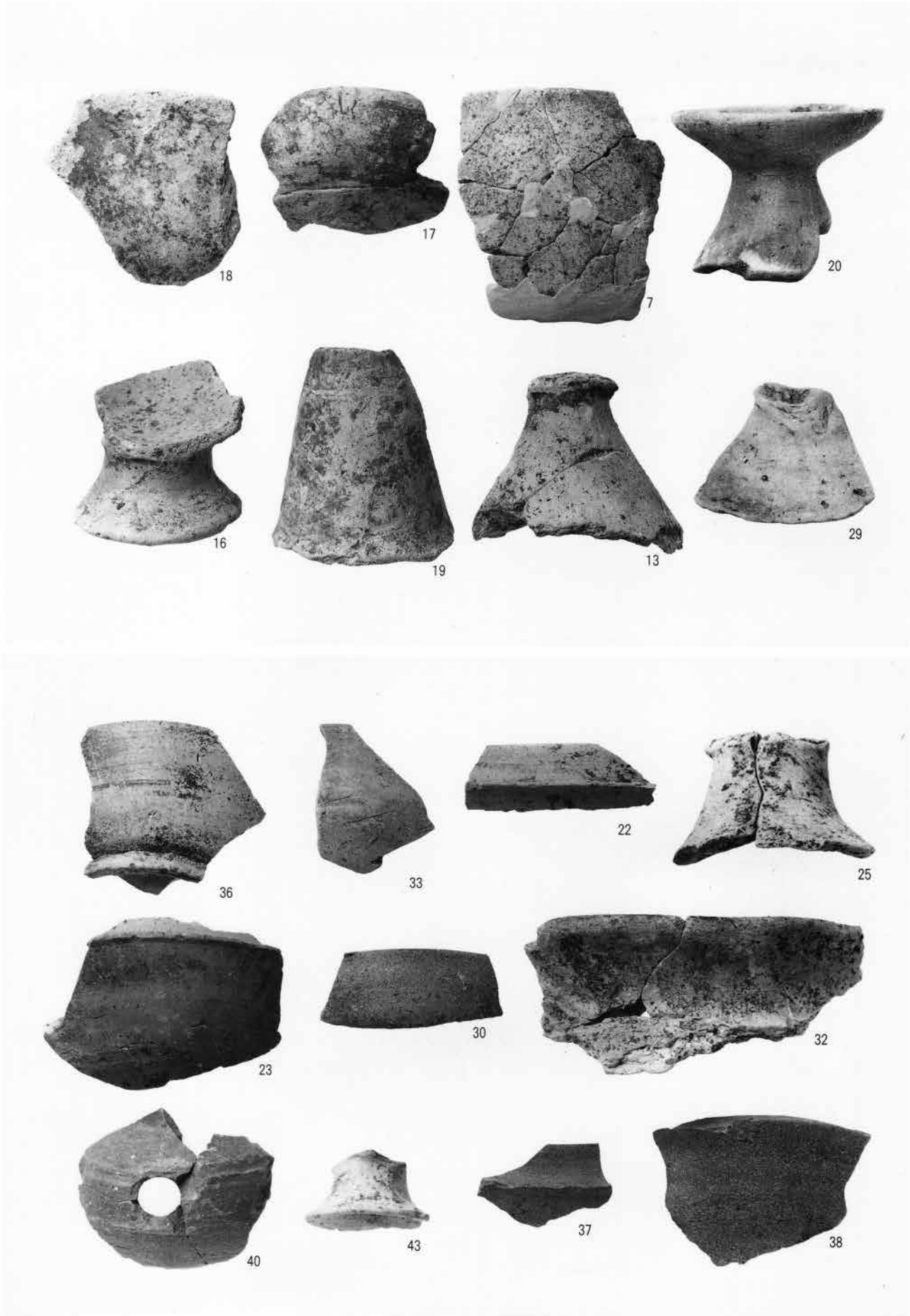
(2) SD01遺物出土状況



(3) SH07遺物出土状況



出土遺物 (1) (付番は実測図に対応する)



出土遺物 (2)



(1) 1トレンチ調査前全景（北から）



(2) 2トレンチ調査前全景（西から）



(1) 1トレンチ上層遺構全景（南から）



(2) 1トレンチ下層遺構全景（南から）



(1) 2トレンチ全景（西から）



(2) 竪穴式住居跡SH201全景（西から）



5



6



4



12



10



13



9



(1) 1トレンチ調査前全景（北から）



(2) 1トレンチ全景（北から）



(2) I トレンチSD 498103 (南西から)



(1) I トレンチSD 498101 (南から)



(1) 1 トレンチSD498103遺物出土状況（南西から）



(2) 1 トレンチSD498102（北西から）



(1) 2トレンチ調査前全景（南から）



(2) 2トレンチ全景（南から）



(1) 2 トレンチSB498201 (南から)



(2) 2 トレンチSB498201柱穴 (北から)



(1) 2 トレンチSD498201・498202（西から）



(2) 2 トレンチSD498202遺物出土状況（南から）



(1) 3トレンチ調査前全景（南から）



(2) 3トレンチ全景（北から）



(1) 3 トレンチSE498301 (南から)



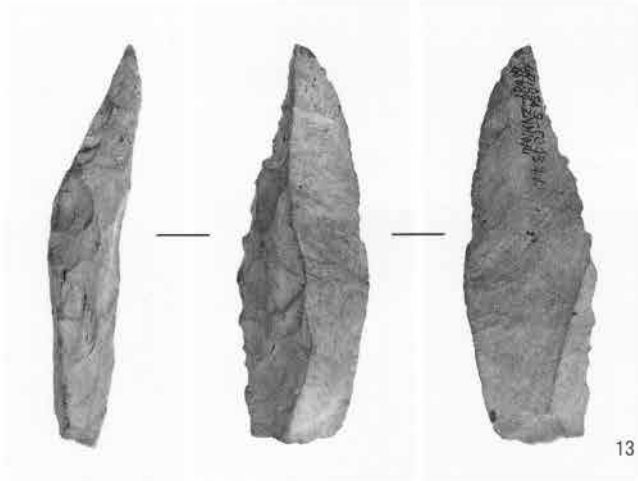
(2) 3 トレンチ杭列 (南から)

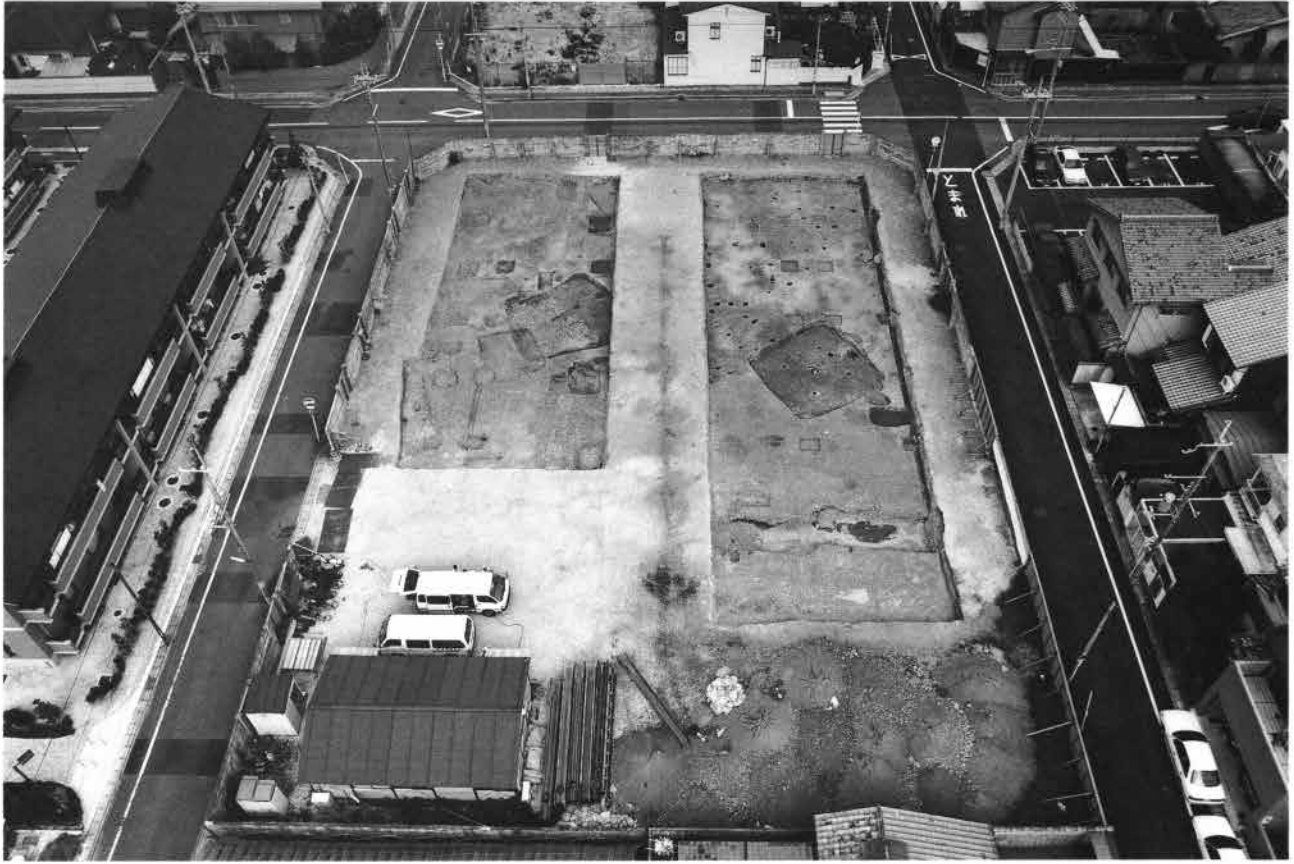


(1) 3トレンチSB498301（西から）



(2) 3トレンチ断ち割り後全景（北から）





(1) 調査地全景 (西から)



(2) 調査地全景 (南から)



(1) 1トレンチ全景 (西から)



(2) 竪穴式住居跡1 集石遺構 (北から)



(1) 竪穴式住居跡1上層土器堆積状況（西から）



(2) 竪穴式住居跡1完掘状況（北から）



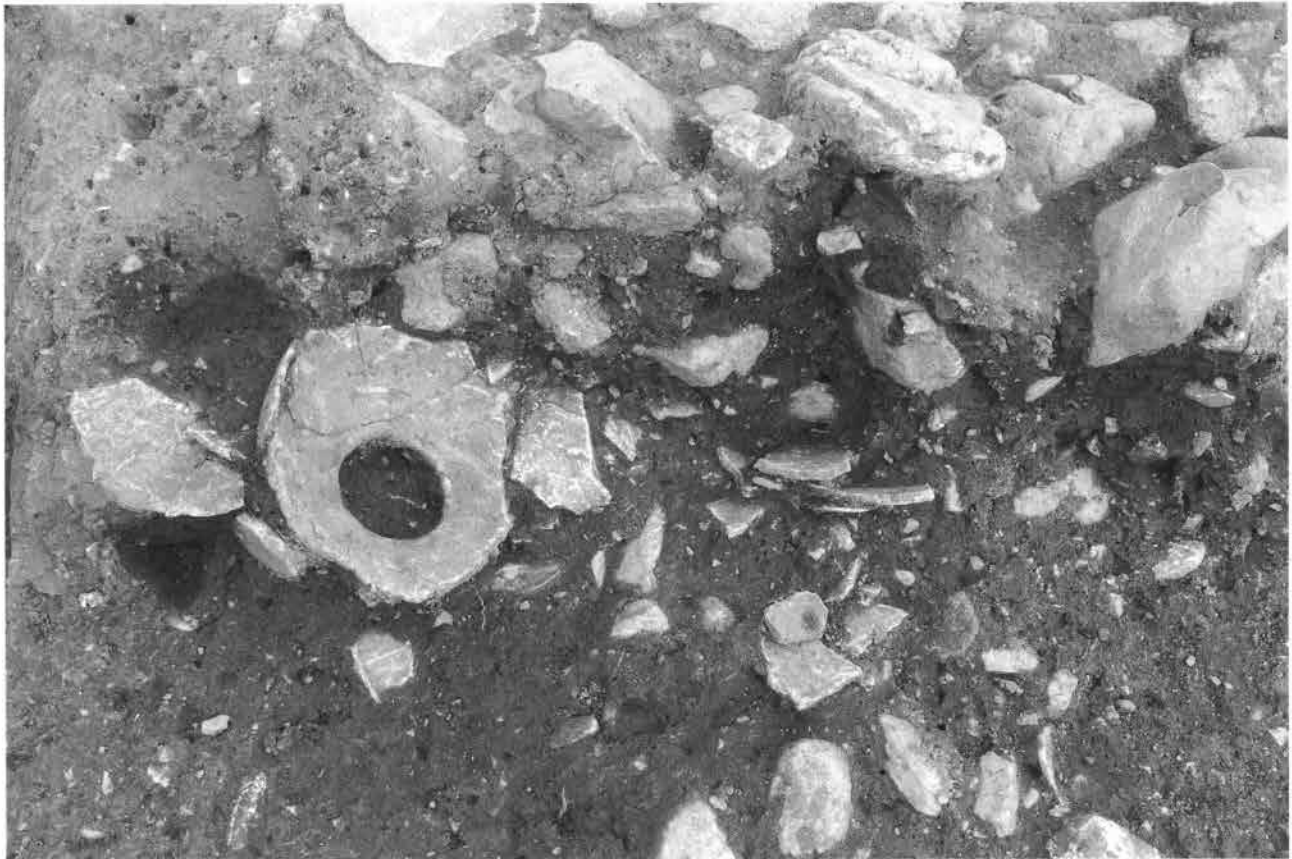
(1) 集石遺構 (西から)



(2) 集石遺構 (東から)



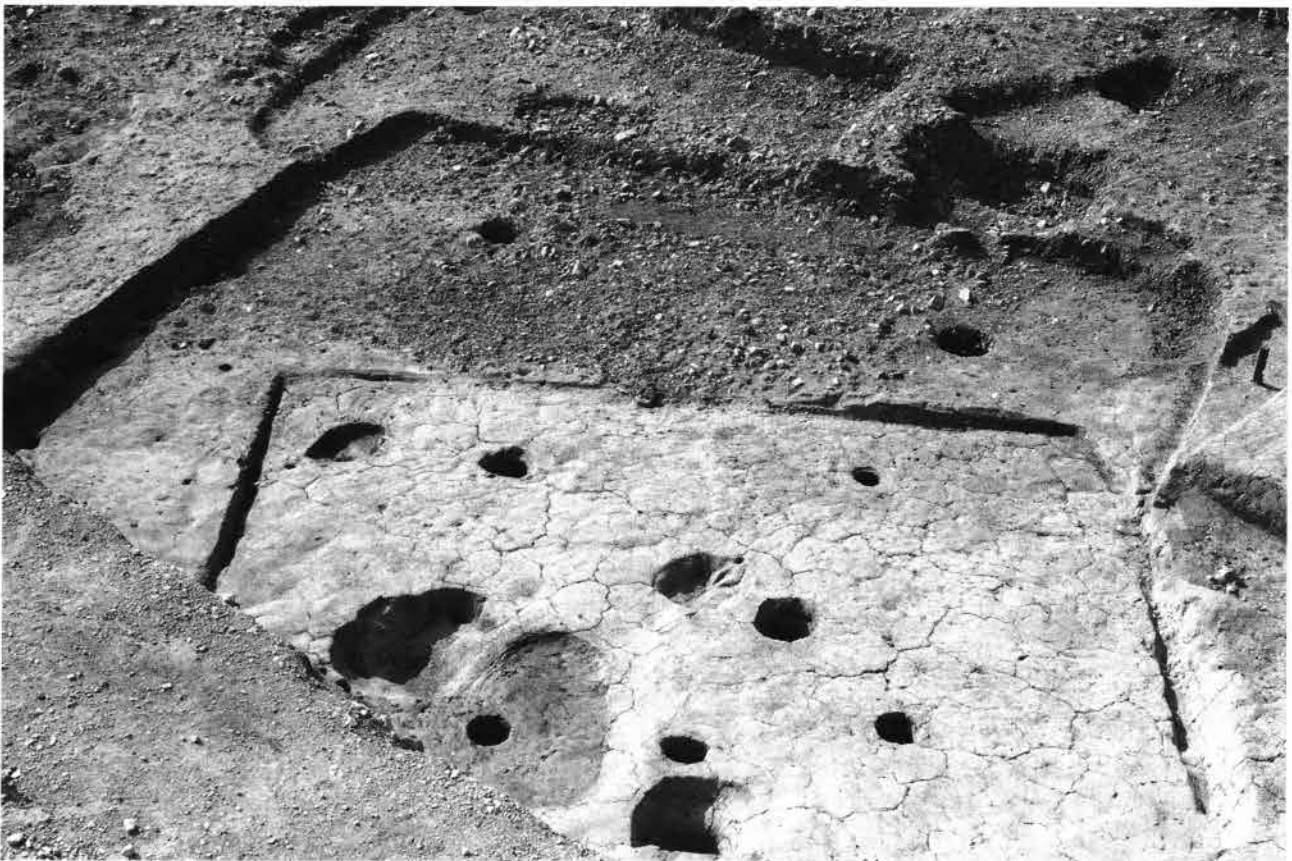
(1) 集石遺構の土坑14土器出土状況（西から）



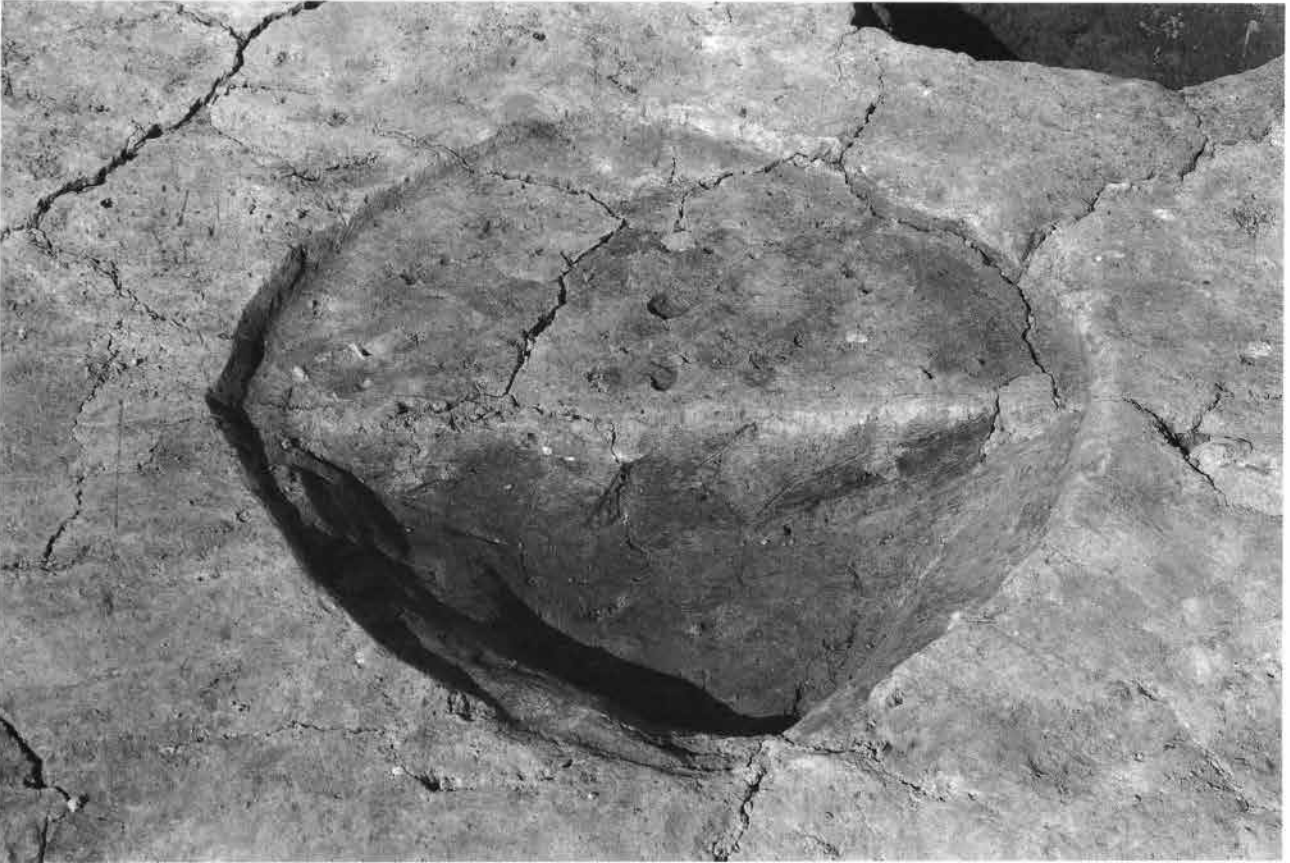
(2) 集石遺構下層の土器出土状況（南から）



(1) 竪穴式住居跡 2・6 完掘状況 (北から)



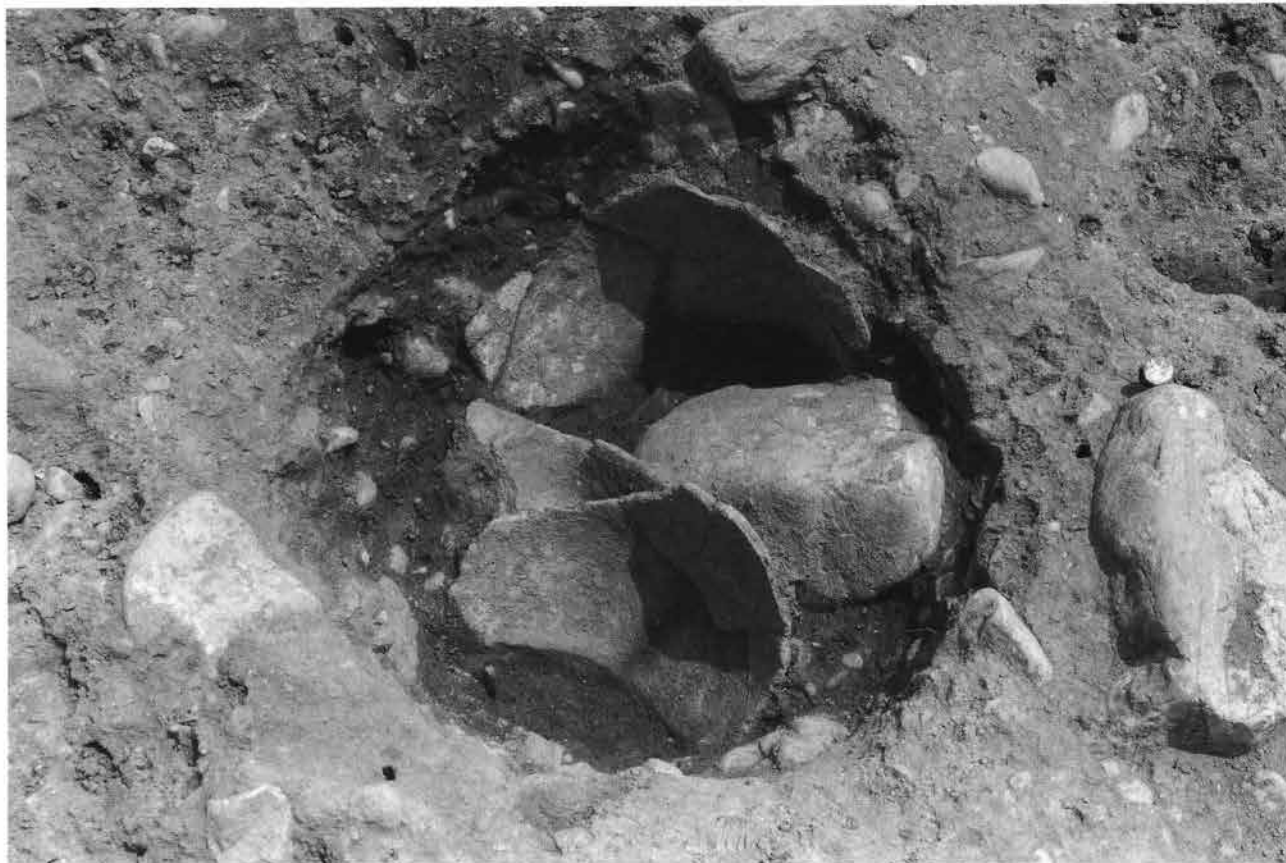
(2) 竪穴式住居跡 2・6 完掘状況 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡2中央土坑(西から)



(2) 竪穴式住居跡2南辺土坑(西から)



(1) 竪穴式住居跡6 柱穴1 土器出土状況 (北から)



(2) 竪穴式住居跡5 南辺土坑土器出土状況 (北から)



(1) 竪穴式住居跡5完掘状況（東から）



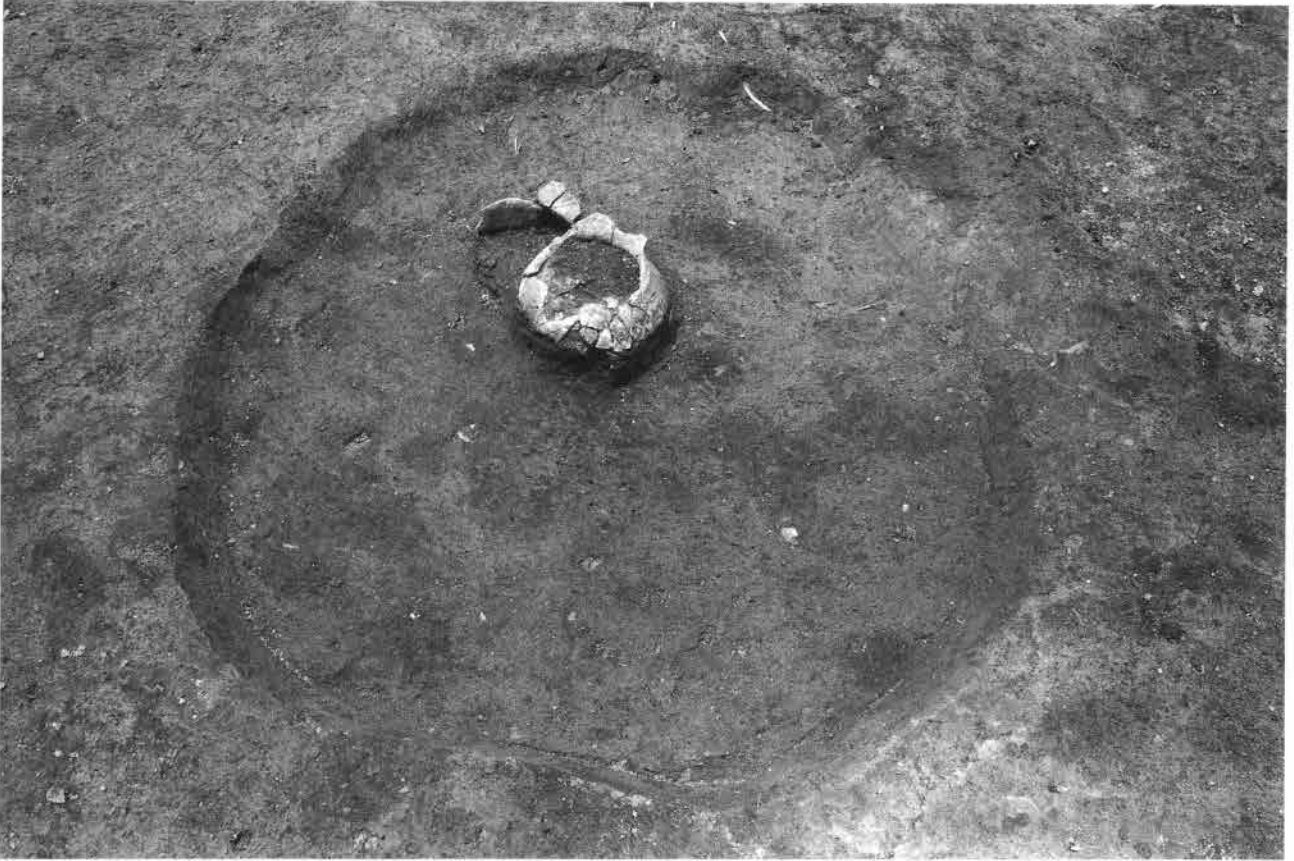
(2) 竪穴式住居跡5南辺土坑完掘状況（北から）



(1) 竪穴式住居跡4完掘状況（南東から）



(2) 竪穴式住居跡4堆積土断面（東から）



(1) 土坑7 土器出土状況 (南から)



(2) 土坑8 土器出土状況 (北から)



(1) 土坑9土器出土状況（北から）



(2) 土坑12土器出土状況（南から）



(1) 2トレンチ全景 (西から)



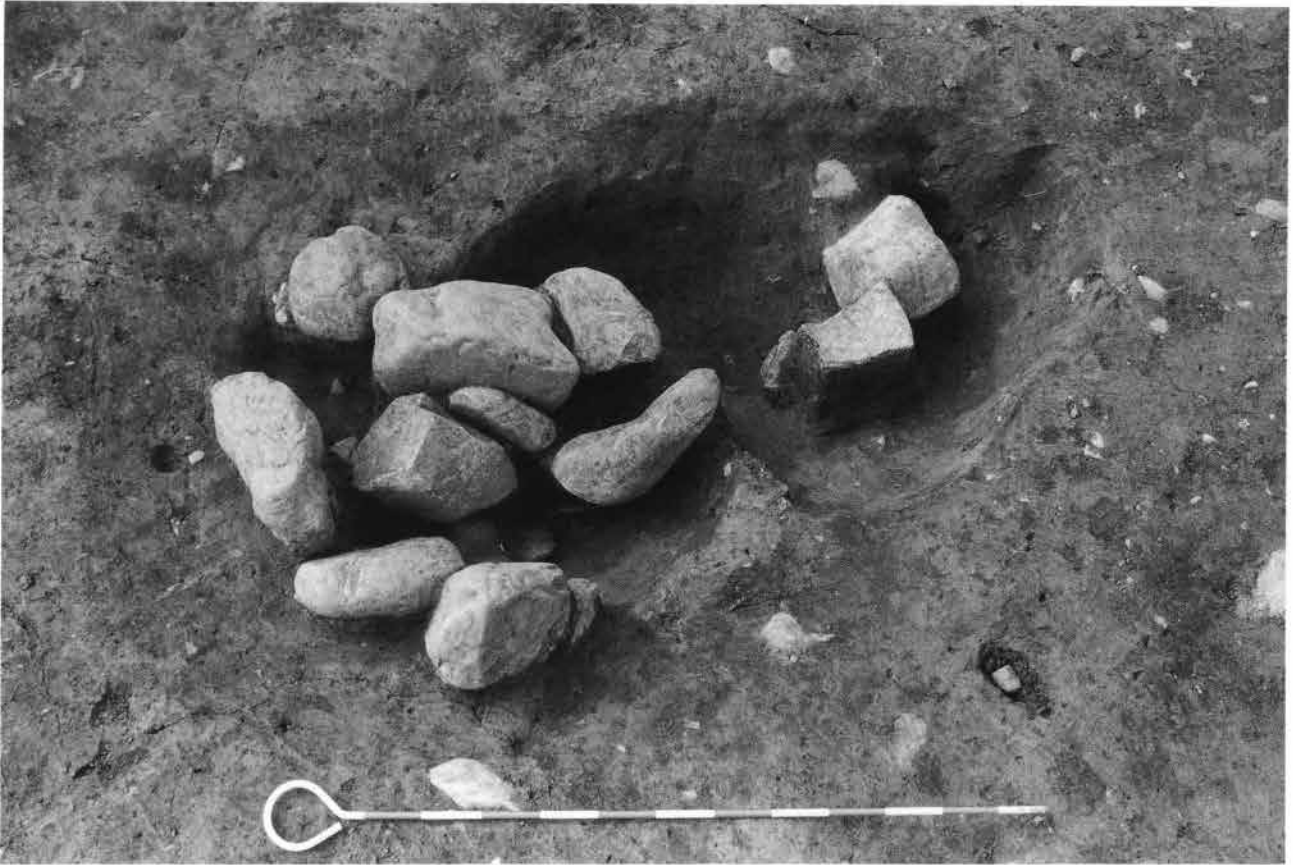
(2) 竪穴式住居跡3完掘状況 (北から)



(1) 竪穴式住居跡3 床面直上土器出土状況 (南から)



(2) 竪穴式住居跡3 東辺沿いの小坑 (北から)



(1) 竪穴式住居跡3 中央土坑 (南から)



(2) 竪穴式住居跡3 南辺土坑 (西から)



20



49



38



50



47



52

出土遺物 (1) 20. 竪穴式住居跡 3 38. 竪穴式住居跡 6 47~52. 土坑14



出土遺物 (2) 53~60. 土坑14 100~102. 竪穴式住居跡1 131. 土坑9



110



115



122



120



139

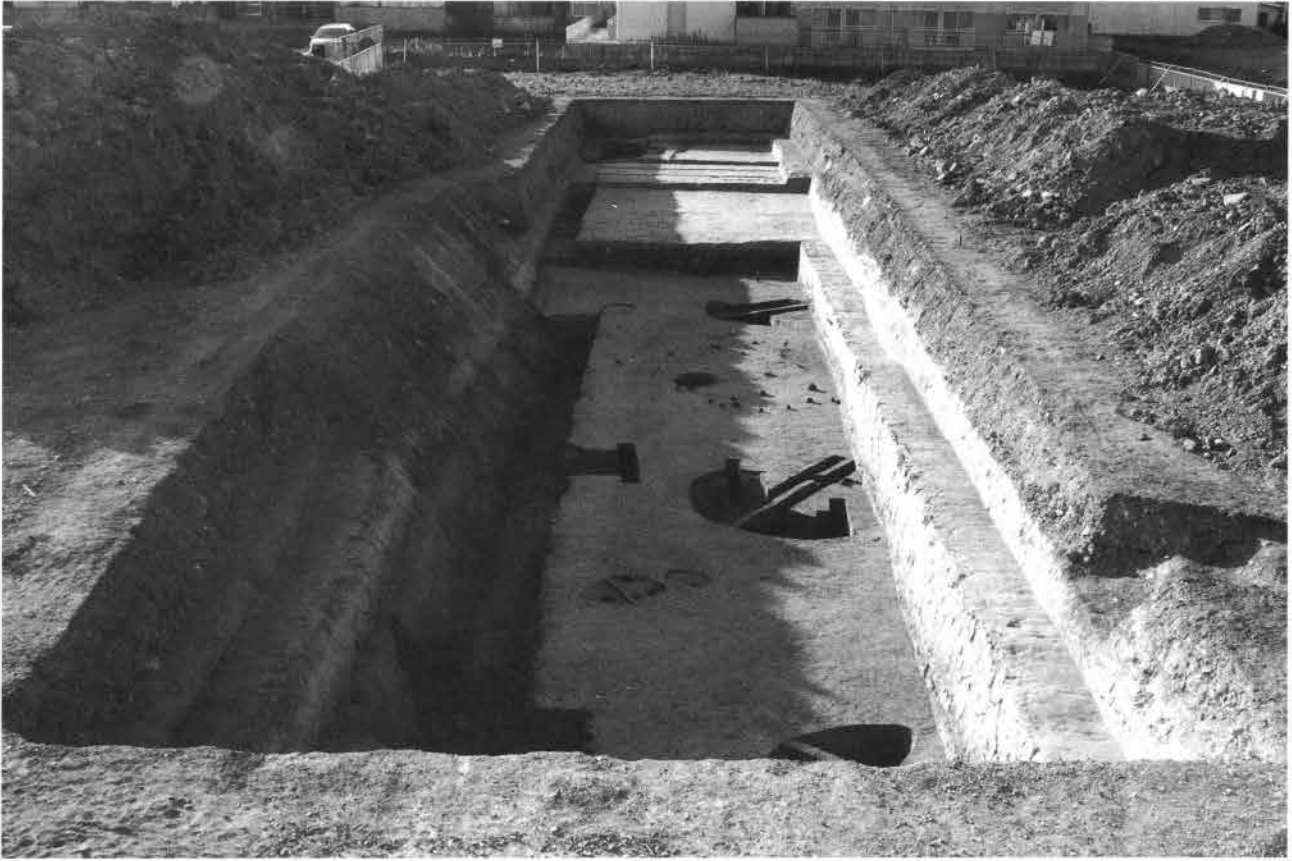


139



124

出土遺物 (3) 110. 竪穴式住居跡1 115. 竪穴式住居跡5 120~124. 土坑7 139. 土坑12



(1) 第1トレンチ全景 (東から)



(2) 第2トレンチ全景 (南から)



(1) 第1トレンチ遺構全景（東から）



(2) 第1トレンチ杭群検出状況（南から）



(1) 作業風景



(2) 第1トレンチ遺構検出状況 (南東から)



(1) 第1トレンチ土層断面（北から）



(2) 第2トレンチ土層断面（東から）

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第70冊							
編著者名	野島 永・黒坪一樹・竹下士郎・奈良康正・引原茂治・石尾政信・杉本厚典・八木厚之							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				TEL	075(933)3877		
発行年月日	西暦		1996 年		3 月		26 日	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あおじこふ ん・ぜにつか こほ 青路古墳・銭 塚古墓	まいづるしよほろ こあざ8ばん、ま いづるしどうのお くこあざあおじ 555ばん 舞鶴市与保呂小字 8番、舞鶴市堂ノ 奥小字青ジ555番	202		35° 26' 56" 35° 27' 15"	135° 25' 14" 135° 25' 19"	19941205 ～ 19950216	350	道路建設
いけしもじょ うしじょうあ と 池下城支城跡	まいづるしあざい けうち 舞鶴市字池内	202		35° 24' 12"	135° 21' 5"	19950925 ～ 19951208	400	道路建設
ほりこふん 堀古墳	まいづるしあざほ り 舞鶴市字堀	202		35° 24' 5"	135° 20' 43"	19951019 ～ 19951129	200	道路建設
そのべじょう あとだい4じ 園部城跡第4 次	ふないぐんそのべ ちょうござくら ちょう97 船井郡園部町小桜 町97	401	31	35° 6' 5"	135° 28' 18"	19950626 ～ 19950809	800	学校建設
かみなかお おたいせき 上中太田遺跡	きたくわたぐんけ いほくちょうおお あざかみなかこあ ざしろ 北桑田郡京北町大 字上中中小字城	381		35° 11' 46"	135° 38' 27"	19951019 ～ 19951222	1,500	ほ場整備
なかかいどい せきだい34じ 中海道遺跡第 34次	むこうしもずめ ちょうごしょかい どう 向日市物集女町御 所海道	208		34° 57' 39"	136° 18' 10"	19950927 ～ 19951121	300	道路建設

ながおかきょうあとうきょうだい498じ 長岡京跡右京第498次	ながおかきょうしてんじん1ちょうめ 長岡京市天神1丁目	209		34° 55' 16"	135° 41' 31"	19950605 ～ 19951222	610	道路建設
しよくぶつえんきたいせきだい16じ 植物園北遺跡第16次	きょうとしさきょうくしもがもきたしばちょう 京都市左京区下賀茂北芝町	101	30	35° 2' 50"	135° 46' 23"	19950419 ～ 19950818	860	住宅建設
いじりいせき 井尻遺跡	うじしいせだちょうういじり8-1 宇治市伊勢田町井尻8-1	204	86	34° 52' 51"	135° 46' 31"	19951026 ～ 19960117	800	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な 時代		主な 遺構		主な 遺物		特記事項
青路古墳	古墳状隆起	なし		なし		なし		
銭塚古墓	古墳状隆起	なし		なし		なし		
池下城支城跡	中世山城跡、不明	戦国、鎌倉		郭・堀切・集石遺構		青白磁器皿、刀断片		
堀古墳	墳墓	不明		方形掘形、周溝		なし		
園部城跡	近世城郭	江戸		南中堀		肥前系陶磁器類		
上中太田遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良		竪穴住居、掘立柱建物、溝状遺構		弥生土器、土師器、須恵器		
中海道遺跡第34次	集落跡	弥生、鎌倉、室町江戸		竪穴住居、溝		弥生土器、土師器、瓦器、近世陶磁器		
長岡京跡右京第498次	都城跡	古墳、長岡京期、鎌倉、室町		溝、掘立柱建物、井戸		土師器、須恵器、瓦器、瓦、石器		
植物園北遺跡第16次	集落跡	弥生、古墳、長岡京期、平安		竪穴住居、土坑、集石遺構		弥生土器、古式土師器		
井尻遺跡	散布地	なし		溝、畦畔		土師器、中・近世陶磁器		

京都府遺跡調査概報 第70冊

平成8年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)